
カンピオーネ!
かりそめの聖夜
Campione XII
丈月 城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

XII　かりそめの聖夜

丈月　城

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
Campione XII
かりそめの聖夜


エリカ
恵那
護堂
リリアナ
祐理


「あなたでしたか！」
護堂は驚いた。
視線の先にいるのは旧知の人物だったのだ。
茫々たる広野に端然と座し、
膝に乗せた台形の琴を奏でるのは
あでやかな十二単に身をつつむ娘。
美しく長い髪は亜麻色で、
冴えわたる瞳は玻璃の色。
幾度か幽世で邂逅した、玻璃の媛であった。

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。護堂を監視するため派遣されてきた。

万ま里り谷や祐ゆ理り

霊視の力を持つ媛巫女。魔王である護堂を恐れている。

リリアナ・クラニチャール

《青銅黒十字》の魔術師。エリカと同様に護堂の監視役を務める。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

当代随一とされる「太刀の媛巫女」。深山に籠もる。

沙さ耶やの宮みや馨かおる

正史編纂委員会東京分室室長。

甘あま粕かす冬とう馬ま

正史編纂委員会のエージェント。

羅ら濠ごう

《五嶽聖教》教主。護堂の義姉。

陸りく鷹よう化か

羅濠の直弟子。

Contents

イラスト / シコルスキー


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
かりそめの聖夜
Campione XII

序章

　その日、草くさ薙なぎ護ご堂どうは朝の六時に目を覚ました。

　子供の頃から早寝早起きには慣れている。この起床時刻も苦にならない。

　しかし、今日は一二月一五日。師走しわすもなかばをすぎて、さすがに早朝の冷気がだいぶ堪こたえるようになってきた。寒さを気合いで無視して、布ふ団とんをはねのける。

　あとはスピード勝負。そそくさと着替えをすませる。

　ジョギング用のトレーニングウェアで上下を固め、障しよう子じを開けて廊ろう下かへ。

　隣室では、妹の静しず花かがまだ寝ているはずだ。音を立てないよう注意しながら階段を下り、洗面所で身づくろい。台所で水を一杯飲んでから、玄関に向かう。

　ランニングシューズをはいた護堂は、外へ出た。

　この季節、日が差してくるのは遅い。まだ周囲は暗かった。だが、日課のジョギングをするうちに明るくなっていくはず。

　空を見れば、雲はすくない。気持ちのいい冬晴れになりそうだ。

「じゃあ、いくか」

　十分なストレッチのあと、護堂は白い息とともにつぶやいた。

　ゆっくりと走りはじめる。ここから徐々にペースを上げていくのだ。

　元アスリートで、今も体力に頼る場面が多い日々。根がまじめな護堂は、ふだんから体力作りに余念がなかった。まあ、単純に体を動かすのが好きという性しよう分ぶんのせいもあったが。

　なので、日課どおりに今朝もランニング。

　コースは走りながら適当に決める。根ね津づ三丁目の商店街を抜けると、今日は言こと問とい通どおりの方向をめざした。このまま上うえ野の公園をめざすのも悪くない。

　真冬の朝なので、もちろん寒い。だが、どうせすぐに体はあたたまる。

　慣れている護堂には、冷たくて清せい澄ちような空気がむしろ心地よかった。

「やっぱり、走るなら朝の方が気分いいよな。空気はきれいだし、人もほとんどいないから走りやすいし」

　つぶやいてから、「ん？」と首をかしげる。

　そういえば、最近はもっぱら夜や夕方の空あいた時間に走っていた。ルーチンワークとなった朝の仕事があり、毎朝そのために時間を割さいていた気もするのだが——。

「でも、こうして今日も走りに出てるしなあ……」

　テンポよく軽快に走りながら、護堂は疑問を無視することにした。

　思い出せないのなら、重要事項ではないはずなのだ。

　昔は古書店でもあった古い木造家屋。それが草薙家の住まいである。

　帰ってきた護堂は台所の前を通ろうとして、妹の姿に気づいた。

「よう」

「そこはおはようでしょ、お兄ちゃん」

「一〇年以上いっしょの兄妹なんだ。これで十分だろ」

　ガスコンロの前で味み噌そ汁しる作りに精を出す妹との、朝いちばんの会話であった。

　今日の食事当番は静花の方なのだ。同じ学院の中等部二年に所属する妹は、小皿にとった味噌汁を味見していた。むずかしい顔だ。



「んー……」

「まずいのか？」

「まさか。ダシ入りの味噌をお湯に溶かすだけでも、それっぽい味になるんだよ。でも、おじいちゃんのとくらべたら、たしかにいまいちかな」

「鰹かつお節ぶしでダシを取るところから、きちんとやる人だもんな」

　今、静花が使っているのは大手メーカーのダシ入り味噌である。

　だが、ふだん料理の一切を担当してくれる祖父・草薙一いち朗ろうは白味噌派。しかも、信しん州しゆうかどこかの『親切な女性』が送ってくれるという絶品手作り味噌を常用する。

　味に差が出るのは、もはや必然であった。

　しかし、そうとわかっていても、護堂と静花はダシ入り味噌を使ってしまう。

　こちらの方が楽なのだ。やはりダシを取るのはめんどくさい。

「マメだからな、じいちゃん。俺たちとは大ちがいだ」

「そこは本当に同意見。まあ、いろいろ困った人でもあるけど」

　台所で兄妹はうなずき合う。

　祖父は現在、長期の旅行に出かけている。なんでも、かつてブータン（もちろんインドと中国にはさまれた、あの国だ）でお世話になった人が入院中らしいのだ。

「ちょっと見舞いに行ってくるよ。ついでに、しばらく向こうの友達のところをあちこち回るつもりだ。たぶん新年はあちらで迎えると思う。家のことはいいようにやってくれ」

　旅立つ前日、祖父が口にした言葉である。

　そのままフラッと出ていった。七〇過ぎとは思えないフットワークの軽さ。

　だが、逆にこれこそが草薙一朗の真しん骨こつ頂ちようとも言える軽妙さだった。

「あちこち回るって、たぶんブータン一国だけじゃないよね？」

「当たり前だろ。じいちゃんなんだぞ」

「友達のところって言ってたけど……それだけじゃないよね？」

「……当たり前だろ。じいちゃんなんだぞ」

　妹が口にした疑問。ふたつ目に答えるとき、護堂の口はすこし重くなった。

　男友達以外。女友達、あるいはもっと親密だった女性たち。

「おじいちゃんのことは大好きだけど……女性関係のあれこれだけは大目に見たりできないなって、いつも思うの」

「まあな。俺だってそうだよ」

「そう。だったら、今後も気をつけてよね」

「何をだ？」

「変な女にひっかけられたりしないように。お兄ちゃんって女子に慣れてないくせにさ、いつのまにか女の人と縁ができるよね。それもかなり頻ひん繁ぱんに」

「静花……俺をじいちゃんの同類みたいに言うなよ」

　遠い目をして、護堂は苦情を言った。

「ほんと自慢にならないけど、俺はおまえ以外の女子と長く話すことってないぞ。ああ、明あ日す香かがいたか。でも、あいつは女子ってのとはちがうからなあ」

「よろしい。そのまま現状維持に専念してよね」

　護堂の締まらない申告に、妹はなぜか満足そうだった。

「えらそうに言うなら、何か見返りでも用意してくれ」

「いいよ。明日香ちゃんに超失礼なこと言ったの、黙っといてあげる」

　にんまりほくそ笑む妹の顔を見て、護堂は頭をかいた。

　どうやら失言だったらしい。気づかなかった。とはいえ、徳とく永なが明日香は幼稚園に上がる前からの幼なじみ。べつにいいかと思いながら、ふとカレンダーを見る。

「そういや、クリスマスが近かったな」

「今さら何言ってんの。もう一二月。おひとりさまの男子女子には一年でいちばんさびしい月のどまんなかじゃない」

　きびきびと静花は言った。

「お兄ちゃん、二四日は今年もうちにいるでしょ？　どうせお母さんは帰ってこないだろうから、ケーキはふたり分でいいよね。――あ、何なら明日香ちゃんとか、さくらちゃんにも声をかけて、プチパーティーでも企画してみる？」

「んー……悪い。返事はちょっと保留させてくれ」

「え!?　まさかイブをいっしょに過ごすような人、できたの!?」

「いや、そうじゃなくて。この辺りで何か重要なイベントがあったように思うんだよなー。何だったかな？」

　護堂は首をかしげながら、壁掛けカレンダーを眺め続けた。

　一二月後半。二四日、二五日の近辺。たしかに何か予定があったような――。

第１章　草薙護堂は神殺しである……？

１

　クリスマスの前後にあった気がする予定。

　しかし、思い出せない。やはり記憶に引っかからないことは、たいして重要ではないのだろうか。だが、それですませるのもまずいように思える。

「つっても、思い出せる気がしないんだけどな……」

　朝。ホームルーム前の教室で、護ご堂どうはぼそりとつぶやいた。

　城じよう楠なん学がく院いん高等部、一年五組。すっかり使い慣れた、いつもの席である。

「よう、草くさ薙なぎ。今日は早いな」

　声をかけてきたのは、クラスメイトの名な波なみだった。

「俺、いつもこれくらいの時間には来てるだろ？」

「そうだったか？　いつもホームルームの五分前くらいに来てた気がするけどな……。まあいい。そんなことより外を見ろよ」

　ホームルーム開始まで二〇分はある教室で、名波は言った。

「空がきれいだと思わないか？」

「ああ、いい感じの冬晴れだ。でも名波……熱でもあるのか？」

「おいおい。いきなり何を言う」

「それはこっちのセリフだよ。空がきれいとか詩人っぽいことを口走る今日の名波は、相当に変だ。よかったら保健室につきあうぞ」

　護堂は割とまじめな口調だった。六割は冗談である。

　だが、残り四割は結構本気で心配していた。名波は三バカといわれる男どものリーダー格である。よくも悪くもふつうではない。こいつに何が起きたのか。

「ふっ……バカだな」

　少年漫画に出てくるニヒルな敵かたき役やくのように、名波は微笑ほほえんだ。

「オレはなぜだか最近、とても心がおだやかなんだ。どんな理り不ふ尽じんも今なら許せそうな気さえする。明めい鏡きよう止し水すいってのはこういう境地を言うのかもしれん」

「そいつはすごいな」

　護堂が目を丸くしたら、さらに男子ふたりが近づいてくる。

「よう。今日もいい具合に平和でうれしくなるな。このまま世界から戦争がなくなればいいと、心の底から祈りたくなるぞ」

「ああ。見ろよ、世界はこんなにも美しいんだぜ」

　と、おだやかに微笑む男子×二は、護堂の友人だった。

　通称・三バカの残り二名、反そり町まちと高たか木ぎである。ふたりは弥み勒ろく菩ぼ薩さつあたりが浮かべそうなアルカイック・スマイルを口元にたたえ、驚くほどやさしい目をしていた。

「おまえたちまでどうした⁉　本当におかしいぞ。……そういえば最近、おまえら変に落ち着きなかったよな？」

　三バカたちがわめいていた文句を、護堂は思い出した。

「ほら、『クリスマスなんて恋愛資本主義に毒されたマスメディアと、それに踊らされた愚ぐ民みんどもが浮かれ騒ぐだけのイベン

ト。自分たちはこの風ふう潮ちように力の限り抗あらがってみせる』とか」

「まあな。だが、もういいんだ」

「たしかに、世間の乱らん痴ち気き騒ぎは目にあまるとは思うんだが」

「オレたちの身近で荒れ狂っていた大嵐がおさまった気がしてな。そうなると不思議なもんで、浮うわつくリア充じゆうどもですら微笑ほほえましく思えるようになった」

　悟りを開いた聖者の目で、三バカは口々に言った。

「俺たちの身近に大嵐なんてあったっけ？」

「具体的に何だったかは思い出せないんだけどな。でもな草薙。オレはこうも思う」

　不意に高木が手をのばし、護堂の肩を強く抱いた。

「今の草薙になら言える。おまえはまちがいなくオレたちの同志、道をひとつにする仲間のひとりだぞってな」

「奇き遇ぐうだな。実はオレもだ」

「ああ。オレも今の草薙なら、同志と認めることができる」

　反町と名波まで力強く言う。護堂は困こん惑わくした。

「何だ、そりゃ。今までだって友達づきあいしてただろ？」

「友と同志はちがう。たとえ種族がちがっても友にはなれる。だが、同志はそうじゃない。血と魂たましいを分かち合う同族同士でしか共有できない、心の絆きずなが必要なのさ……」

　訳知り顔で名波が言ったときだった。

　教室に銀髪の女子生徒が入ってきた。日本人ではない。

　城楠学院の制服に身をつつんだ、細身の女子生徒。華きゃ奢しゃで、可か憐れんで、妖精めいた独特の雰ふん囲い気きがある。きれいな銀髪をポニーテールにまとめていた。

　彼女の名はリリアナ・クラニチャール。イタリアからの留学生だった。

「リリアナさん、おはよう！」

「今日、お昼いっしょに食べない？」

　クラスの女子たちがすぐに声をかける。結構な人気者なのだ。

　リリアナはおだやかに微笑して答えながら、自分の席につく。護堂の列から四つほど先の席で、ちょっと離れていた。途中、護堂とリリアナの視線が合った。

　銀髪の東欧系美少女は日本式に会え釈しやくした。それだけだった。

　あいさつに来るでも、こちらに来て話しかけたりもしない。あいかわらず警戒されているらしい。実は草薙護堂、クラスの人気者ふたりとの微妙な人間関係を持てあまし気味だった。決して疎そ遠えんではないが、なかなか親密にもなれないというか。

　もうひとりの人気者が姿を見せたのは、二時間目のあとだった。

「あ、エリカさん！」

「よかった、今日は来ないのかと思ってたんだよ！」

　二時間目と三時間目の間にある、短い休きゆう憩けい中。

　教室にやってきたのは金髪の白人美少女、エリカ・ブランデッリであった。赤みがかった金髪を王冠のようにかかげる、ミラノからの留学生。

「ごめんなさい、いろいろと用事が立てこんでしまったの」

　貴婦人の微笑で、女子たちに応こたえるエリカ。



　歳としは同じはずだが、優ゆう雅がさと余裕が段ちがいだった。ちなみに彼女は『本国で大学卒業者と同程度の単位を取得ずみ』という免めん罪ざい符ふのおかげで、フレックスタイムでの通学を容認されている。どう考えても、無茶がすぎる言いわけだ。

　おそらく、この言い分を通すために催さん眠みん系けいの魔術が使われたはずだ。

　護堂とエリカの視線が交差した。すると金髪のイタリア人少女は華麗な笑みを口元にひらめかせ、優美に一礼してみせた。まるで決闘に臨のぞむ美び々びしい騎士のように。

　それだけだった。あいさつに来るでも、こちらに来て話しかけたりもしない。

　エリカの席は、リリアナの席のひとつ前。ちょっと離れている。こちらから話しかける理由もないので、護堂はふたたび肩をすくめた。

　もうすこし彼女たちと仲よくしてもいいように思える。

　だが、そのためにどうすればいいのか、見当もつかなかった。

2

　この日の放課後、護ご堂どうはまっすぐに帰宅した。約束があったのだ。

　実は一二月三日が妹・静しず花かの誕生日である。幼なじみの明あ日す香かといっしょにプレゼントを用意して、静花といっしょに出かける約束もしていた。

　だが当日。予定は変更になった。離婚して家を出た父から連絡が入ったのだ。今日、顔を出すかもしれんと。静花と護堂は顔を見合わせた。

「どう思う？　ちなみに、あたしは結局来ない方に一票」

「俺もそっちに一票。でも、そういうことがあるかも程度のつもりで待ってみるか」

　ひとまず予定変更。三日の夜、兄妹は家で過ごした。父からメールが届いたのは、午後七時頃だった。いわく、急用ができてカナダのトロントへ旅立つことになったと。

「まあ、お父さんだもんね」

「あの親父だからな」

　予想どおりの展開に兄妹はそれだけ言って、後日あらためて出かけることにした。

　その仕切り直しが今日だった。ちなみに外出先は小こ洒落じやれたレストラン。手の込んだスペイン料理とワインが美お味いしい店だ。

　予告をひるがえした父と放任主義がいきすぎの母に、資金提供を交こう渉しようした成果である。

「娘の誕生日だったんだ。何か美う味まいものを食べさせてくれ」と。

　尚なお、もうひとり連れていくことも了りよう承しようさせたので、幼なじみの同行も決まった。

「でもさ。親に何か頼むのを『交渉』っていう家、あまりないわよね」

　兄妹から事情を聞いて、幼なじみ・徳とく永なが明日香はしみじみと言った。

　目的のレストランに向かう途中である。根ね津づの草薙家から徒歩で行ける距離なので、三人は連れ立って歩いていた。

「そうか？　割とふつうな気がするけどな」

「言い方がちがうだけで、どこの家でも同じことしてるわけだしね」

　交渉役だった護堂が言えば、横で静花もうなずく。

「あのね護堂。あんたは『似てる』イコール『同一』って意味じゃないことをきちんと学ぶべきだと思うわよ。あんたがそんなだから、静花ちゃんまで影響受けるんじゃない」

　ツインテールの幼なじみからの苦言であった。

　あいかわらず勝ち気そうで、歯に衣きぬ着きせない物言いだ。

「いつもそうだけど、人を常識のないヤツみたいに言うなよ」

「そうだよ明日香ちゃん。あたし、お兄ちゃんの影響なんて受けてないよ。自信を持って言うけど、我わが家でまともなのはあたしだけだし」

　護堂が反論すれば、静花もちょっとひっかかることを言う。

　いや、常識家で小物の兄からすれば、いずれ怪物に大化けしそうな将来性サムシングは妹の方がたっぷり秘めていそうに思えるのだが。

　話すうちに、三人は目当てのレストランに到着した。

　高校生ふたりと中学生ひとりで入るには、ちょっと敷しき居いが高い店がまえだった。

　店の看板や装飾は洒落ているが派手ではなく、照明も暗め。実際、食材もワインもいい品をそろえているので、ここでの飲み食いはそれなりに高くつく。

「俺たちには分ぶん不ふ相そう応おうだけど、誕生日のお祝いだし、スポンサーもきちんと用意してきたし、たまにはいいよな」

　店の前で言うと、隣で明日香が眉まゆをひそめた。

「よく言うわね。正月のギャンブル大会で貯ためこんでる預金通帳があれば、満まん漢かん全ぜん席せきだって食べられるでしょ、あんたは？」

「あ、あの通帳は、俺のなかではないことになってるんだよ！」

　公言できない秘密をいくつも知られている幼なじみ。

その厄やつ介かいさを護堂はまさに実感した。まあ、最近は『隠し資産』に手をつけるケースも増えているのだが。家族にないしょで海外渡と航こうするときなどに。

ともあれ、三人は店に入った。

敷居の高そうな店だが、実は草薙兄妹にはなじみの場所だった。

ときどき祖父や母に連れられて、来店しているからだ。おまけに近所なので、シェフ兼オーナーのおじさんは知り合い——どころか、母の飲み友達である。たまに草薙家の居間で酒盛りしたり、台所でプロの技を振るったりもする。

というわけで気き後おくれすることもなく、案内された席に着く。

予約の電話を入れたとき、料理は『おまかせで』と頼んであった。なので、皿が勝手に運ばれてくる。ホワイトアスパラのサラダ、ジャガイモたっぷりスペイン風オムレツ、海老のオイル焼き、牛ヒレ肉の赤ワインソース、ロブスターはじめ魚介満載のパエリア……。

三人で美お味いしい料理を片づけながら、たわいないおしゃべり。

途中、店主のおじさんが厨ちゆう房ぼうから顔を出したときに「ワインはいいの？　面白いの仕入れたんだよ」と問われたので「今日の面メン子ツは全員未成年です」と言えば、「あ、そうかそうか」と今さらなコメントもされたが。

母の知り合いの無む軌き道どうぶりを再確認しつつ、食事はつつがなく進む。

デザートのクレームブリュレを静花と明日香が満足そうに口へ運ぶ頃合いとなった。

護堂はといえば、甘味よりもむしろコーヒーの苦みを愉たのしんでいた。だが、気づいてしまった。すこし離れた席に、知り合いがふたりもいる。

「それでエリカ。今日はどういうつもりで呼び出したんだ？」

「さっき電話で言ったじゃない、リリィ。たまには女の子同士、ふたりきりでおしゃべりしましょうって。あのこと、あなたにもう話したかしら？　ほら、わたしが最近ハマっている女流小説家の話」

「んくくっ。つまり、またわたしを脅きよう迫はくするつもりなんだな⁉」

「バカ言わないで。急に文学談義をしたくなっただけよ。……ねえ、例の『この気持ち、あの人に届けたい。でも――』ではじまる短編について二、三考えてみたのだけど」

「みみみ見くびらないでもらおうか。そんな昔の作品を蒸むしかえされたところで、わたしの心はすこしも揺るがないっ。い、いくらでも聞き流してみせる！」

「ふふっ。声が震えてるわよ、リリィ♪」

　優美で音楽的な声と、凛り々りしくも可か憐れんな声のやりとり。

　ふたりとも学校では見せない顔だ。金髪の少女は悪魔のように微笑し、銀髪の少女はあからさまにうろたえている。ちなみに今の会話はイタリア語。きっと旧友同士の語らいで、くつろいでいるのだろう。

　彼女たちのプライベートに土足で入りこんだ気がして、護堂は気まずくなった。

　しかし、このままあいさつもなしに帰るのは問題だろう。どうしたものか――思し案あんしたときだった。向こうも護堂に気づいた。

　エリカ・ブランデッリは急に顔を引きしめ、微笑を消し去った。

　焦あせりまくっていたリリアナ・クラニチャールも、凛りんとした女騎士の表情を甦よみがえらせた。

　ミラノから神殺しの魔王を『監視』するため派遣された少女たちは、要監視者にシリアスすぎる視線を向けたのである。

「ちょっとお兄ちゃん、鼻の下のびてない？」

「たしかにきれいな外人さんたちだけどさ。あんた、ぶしつけに見すぎ」

　いきなり妹と幼なじみに言われた。

　護堂の視線が向く先を見とがめ、批判精神を刺激されたらしい。

「ば、バカ。あれは同じクラスの連中だよ。たまたま出くわしたから驚いたんだ」

　事実の一部を、護堂は言いわけに使った。

　すると静花は「ああ」と思い出した顔になり、明日香も「へえ」と賛さん嘆たんした。

「あの人たちがうわさの……。お兄ちゃんと同じクラスだったんだ」

「私立の進学校だと、海外から留学生も来たりすんのね」

　一方、護堂たちのやりとりをよそに、向こうの卓でエリカが手をあげた。

　店員のひとりを呼んだのだ（といっても、店主のおじさん、その奥さん＆お母さんが三人で切り盛りする店だったが）。

　エリカたちの卓に向かったのは、店主のお母さんだった。

　しばらく金髪の少女と話しこむ。お母さんはうなずいて、卓を離れる。厨房に行くのかと思いきや、なぜか護堂たちのところに来た。

　しかも、意味ありげにニコニコと微笑んでいる。

「あちらのおふたりがね、ぜひ護堂くんといっしょにお食事したいんだって。うふふ、やっぱりお祖じ父いさんに似て、こういう縁がたくさんあるのね！」

　このお母さん、そういえば熱烈な祖父のファンであった。

　だからといって、じいちゃんと孫をいっしょにしないでほしいのだが。護堂は心のなかでぼやきつつ、向こうの卓を見た。エリカも

リリアナも鋭い表情のままだった。

　まちがっても、お母さんの期待するような展開にはならないだろう。

「お兄ちゃん、これどういうこと⁉」

「護堂、あんたまた悪い癖くせを出したんじゃないでしょうね⁉」

「なに興奮してんだ？　同級生がこっち来いよって誘ってるだけだぞ。ふたりとも、先に帰っててくれ。俺はあいつらと話をしてくる」

　というわけで、テーブルを変えて仕切り直しになった。

　食事を愉しむ欧おう州しゆうの美少女ふたりとともに、黙然とコーヒーをすする。女子に慣れていない草薙護堂にとって、正直プレッシャーのかかる状況だった。

「ご家族との時間に割って入るのは無ぶ粋すいかとも思いましたが――」

　開口一番、エリカが言った。

「カンピオーネであられる御おん身みとお会いしながら、ご挨あい拶さつもなしで終わってはブランデッリ家の名折れ。あらためて拝はい謁えつのよろこびを申し上げますわ」

「いや、だからさ」

　立て板に水のエリカ節に、護堂は割って入った。

「いつも言ってるだろ。背中がくすぐったくなるから、ふつうに話せって。俺が今みたいになる前と同じ感じでさ」

「いいじゃない。そうと知っててやる、嫌がらせなんだもの」

　敬語をやめて、エリカは笑った。

　親愛の情ゆえの笑みではない。狩りを前にした雌めす獅じ子しの笑顔である。

「あなたがウルスラグナを弑しいす前に出会っていた偶然へ感謝だわ。そうでなかったら恐れおおくて、こんな口を利きけなかったかもね」

　エリカとのつきあいは、今年の春にさかのぼる。

　草薙護堂がサルデーニャ島で古代ペルシアの軍神を斃たおし、神殺しとなる直前まで。

　ただし、いまだに友好的な関係とは言えない。エリカはずっと険のある言動を臆おくせず魔王カンピオーネに示しつづけている。

「エリカ……すこしひかえろ。お若くとも草薙護堂はカンピオーネ、しかもサルバトーレ卿きようの盟めい友ゆうであられる危険な——失敬、影響力の大きな方だ。然しかるべき言葉を選び、礼節を示すのは騎士の道だぞ」

　旧友に意見したのは、もちろんリリアナだ。こちらはみごとに四角ばっている。

　護堂と個人的な友ゆう誼ぎを結ぶつもりなど、おそらくないのだろう。

「ドニのバカ野郎と俺が仲良しみたいに言うのもやめてくれ」

　事実誤認を訂正すべく、護堂は言った。

「あんなのといっしょにされたら、すごく困る」

「……ですが、スフォルツェスコ城をごいっしょに破壊されたり、ナポリでも交互に騒動を起こされたりと、共闘の機会が多いようにお見受けします」

　リリアナは怜れい悧りな口調で意見した。

「そのような穴だらけの反論、なさらずとも大丈夫です。わたしにはおふたりの複雑で微妙な御関係、あらかた呑のみこめていますから」

「複雑とか微妙って何だよ？」

「つまり、こうです。あなたはサルバトーレ卿に友情以上の好意を

感じていらっしゃる。男性の友人としてではなく、ひとりの人間として愛してらっしゃるのでしょう」

「あ、愛!?」

　名探偵のごとく推理を語られて、護堂は愕がく然ぜんとした。

「ですが、それは人に語ることのできない背はい徳とく的な感情。また、お若いあなたには自身の特殊な性せい癖へきを認めがたくもある……。だから、あえてサルバトーレ卿を嫌っているとおっしゃって、彼への想おもいを断ち切れないかと苦悩している……」

「その発想はなかったわ。でも、たしかにそれだといろいろつじつまが合うわね……」

「合うか！　俺の感情を捏ねつ造ぞうするのはやめてくれ！」

　リリアナの推理にエリカまで感心したので、護堂はすぐに否定した。

「いずれにしてもです。あなたがイタリア魔術界の盟主にして火薬庫でもある方と、浅からぬ仲であることは事実」

「火薬庫って……上う手まいこと言うな」

　意外と口が悪いリリアナの表現に、護堂はつぶやいた。

「でも、俺はあいつ——ていうか、ほかのカンピオーネの連中とはちがう。平穏無事な暮らしを続けて、畳たたみの上で死ねれば満足なんだ。監視みたいな真ま似ねはやめてくれ」

　エリカもリリアナも将来を嘱しよく望ぼうされる逸いつ材ざいだという。

　魔術結社の名門《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》と《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》の若き大騎士。それほどの人材が東京に派遣されたのは、草薙護堂を監視するためなのだ。

　サルバトーレ・ドニの〝盟友〟であるカンピオーネの動向をチェックするために。

「何を言うの、草薙護堂。神殺しの魔王陛へい下かに『監視』なん

て不ふ敬けい、できるわけないわ」

　ほくそ笑むように唇くちびるをゆがめて、エリカが言った。

「あなたが何か事をはじめたら、思わぬ影響が欧州に波は及きゆうする可能性はたしかにある。そういう万一が起こりそうなら、結社の本部に連絡を入れるかもしれない。でも、わたしたちが東京にいる目的はあくまで留学。東アジアの文化を見けん聞ぶんするためよ」

「マルコ・ポーロの『東とう方ほう見けん聞ぶん録ろく』を気取ってみるのも、得がたい体験です」

　リリアナまで、しれっとした顔で言う。

「そういうことですから、王よ。わたしたちなどお気になさらず、どうぞ今までどおりにお暮らしください」

　うーん。護堂は眉まゆをひそめた。今までずっとこの調子で、とりつく島もない。

　どんな役であれ長く身近にいるのなら、仲良くやっていきたいところなのだが……。

3

　草くさ薙なぎ護ご堂どうは神殺し。魔王カンピオーネである。

　おかげで、ふつうの高校生活では体験しない出来事によく出くわす。

　その最たる例がイタリアから送りこまれた監視員たち。だが、母国である日本の組織にも目をつけられている。

　日本国内の呪じゆ術じゆつ・魔術・怪かい力りよく乱らん神しんを管理し統制する組織。

　すなわち、正せい史し編へん纂さん委員会である。昔でいう忍者

（！）まで擁ようする秘密機関で、護堂の身近にも諜ちよう報ほう員いんを潜せん伏ぷくさせているらしい。どこにいるのかはよくわからないが。

　だが、正体の明らかな関係者がひとりいた。

　彼女のうしろ姿を見つけたのは、通学途中であった。

　いつものように学校をめざしていると、七メートルほど前を歩いていることに気づいた。やや茶色味の強い、美しく長い髪のおかげですぐにわかった。

　名は万まり谷や祐ゆ理り。媛ひめ巫み女こと呼ばれる異能者。

　正史編纂委員会が高貴な客分として遇し、さまざまに協力を要よう請せいする貴き人じんであった。

『媛』の呼び名は伊だ達てではない。制服の上に地味な紺のダッフルコートを着た、まじめな女子生徒のうしろ姿。だが背筋はピンとのび、足取りは規則正しく、冒おかしがたい気品を振りまいている。

　昨夜エリカとリリアナ相手に話したことを、護堂は思い出した。

　監視員めいた役どころであろうと、やはり彼女たちともすこしは仲良くしたい。ちょっと積極的になってみようか。意を決して、護堂は声をかけた。

「おはよう、万里谷」

「——!?　おはようございます、草薙さん」

　祐理はすぐに足を止め、振りかえった。

　しかし、その直前に『びくっ』と肩を震わせていた。草薙護堂——カンピオーネの声を突然聞いて、驚いたのだろう。もしかしたら恐怖さえ覚えたかもしれない。

　だが、こちらを向いた祐理は平静そうな顔だ。

　清せい楚そな大やまと和なでし撫子この美び貌ぼうが、護堂をまっすぐ見つめている。その凜りん然ぜんさには、雪解けの水を思

わせる清らかさがあった。そして硬い。

　日本に生まれた神殺しを超危険人物と見なし、警戒するがゆえの硬さだった。

「ええとさ。もうすこし気楽にしてくれて、全然かまわないんだけど」

「あなたは世界に七人しかいらっしゃらない神殺しの君であらせられます。そのご身分にふさわしい敬意を示し申し上げることも、私どものお役目。どうかお気き遣づかいなく」

　祐理は深々と頭を下げて、護堂に答えた。

　言葉遣いも態度も、申し分ないほど礼儀正しい。だが、護堂と祐理は同じ学校に通う同学年の生徒同士。異様な礼儀正しさといえた。

　要するに、礼儀正しさという名目のよそよそしさなのである。

　しかし、護堂はあえて気づかぬふりをして、気さくに話しかけてみた。

「じゃあ、そのままでいいからちょっと話をしよう。どうせ行き先は同じなんだし」

「草薙さんとごいっしょに、ですか!?」

「ああ。学校に行くまでの間だけでも、歩きながら」

　あと五分ほどで校門に到着する。短い間だが、何も話さないよりはいいはず。

　そう考えての提案で、なぜか祐理は意外なほどうろたえた。

「は、はい。王の仰おおせとあらば、致し方ありません。私などが話し相手ではとてもご満足いただけないでしょうが、すこしの間お供いたします」

　思いつめた感じの、やたらと丁てい寧ねいなイエス発言。

　――俺とのおしゃべりがそこまで怖いのか。護堂は申し訳ない気

持ちになった。

　祐理は数年前、悪名高いカンピオーネのヴォバン侯こう爵しやくに捕らえられ、さんざん怖い思いをしたらしい。その体験が影響しているのかもしれない。

　ともあれ、ふたりは連れ立って学校への道を歩きはじめる。

　さあ、何を話そう。護堂はひとまず世間話を振ってみた。

「そういや期末試験の結果が返ってきたよな。どうだった？」

「は、はい。いつもどおりの結果と申しますか……」

　以上だった。祐理は言葉すくなに答え、護堂も上う手まく会話を広げられない。

　そのまま黙々と歩く。ただ横にならんでいるだけ。これではいけない！

「ま、万里谷たちって巫み女こさんだけど、ふつうにクリスマスとかやっていいのか？」

「は、はい。特に禁止されたりはしておりません……」

　またしてもこれで終わり。ふたたび会話は途切れ、ふたりは黙々と歩く。

　護堂は自みずからの失敗を悟った。ただでさえ女子に慣れていない草薙護堂が、このむずかしいシチュエーションを会話トークで乗り切れるはずなかったのだ！

　いつのまにか校門が見えてきた。

　どうやら今日はここまでらしい。自分のふがいなさを護堂は呪のろい、それから祐理に対して申し訳なく思った。無駄に怖い思いをさせてしまった、と。

「ごめんな。本当は俺なんかといっしょにいたくなかっただろ？」

　つい謝罪してしまった。

　言わなくてもいいことかなと自分でも思うのだが、言ってしまう

あたりが対女子スキルの低さゆえか。ともかく護堂があやまると、祐理は困り顔になった。

「あ、いえ。そのようなことはありません。……もちろん、カンピオーネであられる御方とごいっしょなので、緊張はしましたが」

　すこし礼儀正しさの壁が崩れ、困惑という素すの感情がかいま見えている。

　恥ずかしげにつぶやく祐理を見て、護堂はドキッとした。いかにも奥ゆかしい大和撫子という風ふ情ぜいで、すばらしく魅惑的だったのだ。

「それよりも、同じ学校の男性といっしょに登校するは初めてでしたので……むしろそちらが恥ずかしくて。正史編纂委員会の方といっしょになったりもしますが、あちらは媛巫女の仕事ですし、こういうことには本当に慣れてなくて……」

　話すうちに、高等部の正面玄関までやってきた。

「上手くお話しできず、申し訳ありません。失礼いたします」

　祐理は口早にあやまり、ぺこりと頭を下げてから、足早に護堂から離れていった。自分たちの組の下駄箱へと向かったのである。

　どうやら草薙護堂と万里谷祐理、対異性スキルの低さはどっちもどっちらしい。

　次の機会にそなえて、べつのアプローチ法を考えた方がよさそうだ。

　自らにダメ出しをしつつ、護堂も靴をはきかえ、一年五組に向かった。席に着くと、高木がやってきた。飲みかけたコーヒー牛乳のパックを持っている。

「草薙！　おまえ、オレたちを裏切るつもりか⁉」

　悲ひ愴そうな声で叫ばれて、護堂はびっくりした。

「何だよ、いきなり？」

「さっき見たぞ。おまえが六組の万里谷さんとならんで歩いている

のを！」

「ちょっといっしょだっただけだぞ。何でそれが裏切りに？」

「万里谷さんといえば我わが校いちばんのお嬢さまで、絶ぜつ滅めつ危き惧ぐ種しゆの大和撫子。どんな男子がアプローチしても、隣を歩くことさえやんわり拒否される深しん窓そうのご令嬢だ。そんな女子といっしょに歩くとは、油断も隙すきもないヤツめ！」

「やっぱりそうなのか。悪いことしたなぁ……」

　護堂がカンピオーネだから、祐理はいっしょに歩いてくれたのだろう。

「次に会ったときはあやまっとこう。ありがとう高木、教えてくれて助かった」

「くっ。今後もひきつづきアプローチする気か。何とかして不純異性交遊に持ちこむつもりだな、裏切り者め！」

「バカ言うな。用があって話しかけただけだよ。大体、たしかにいっしょだったけど」

　いきり立つ高木をなだめるように、護堂はおだやかに言った。

「結局、一言か二言しゃべった程度だしな」

「そうなのか……？」

「ああ。ところで、前に名な波なみから借りたゲームあるだろ？」

　学園祭で押しつけられた、携帯ゲーム機と『英国正せい統とう女じよ中ちゆう譚たん・小間使いエイミー』なるゲームソフトについて、護堂は言及した。

「昨日ヒマだったからはじめてみたんだけど……あれ、結構むずかしいんだな。もう三回くらい切り裂き魔に殺されてる」

　タイトルから小こ間ま使づかいの女性が主役かと思いきや。

　その主であるオックスフォードに通う大学生が主人公であった。

　ちなみに舞台は一九世紀の英国、ヴィクトリア朝の時代。軽い気

持ちではじめた護堂だが、霧のロンドンに出没する切り裂き魔の謎なぞをエイミーとともに追うミステリー仕立ての展開がなかなかに面白かった。

　だが、それにしても――。護堂はふと疑問に思う

　以前はなかなか遊ぶきっかけがつかめなかった気もするのだが。

　常に誰かしらが身のまわりにいて、そちらの相手ばかりしていたような……。

「でも、あの内容だったらタイトル変えた方がよさそうだけどな」

「ふふふ……おまえはまだ物語の序盤を体験しているにすぎん。そこからはじまる愛と怒ど濤とうのストーリーに翻ほん弄ろうされ、手に汗にぎり、涙するといい」

「え？　俺、昨日だけで文庫本半分くらいは読んでるはずだぞ!?」

「圧倒的なボリュームなのに、ダレることのない展開がウリだからな。しかも、ゲームを進めるうちにメイド愛が高まっていくのは、もはや製品の仕様。メイド属性の持ち主はもちろん、そうでない者も次々とメイド好きに洗せん脳のうしていくモンスターだ。おまえはまだ、その片へん鱗りんを見ているだけなのさ……」

「そ、そうか。最近のゲームは奥が深いんだな」

　その方面にくわしくない護堂は、高木の解説に感心した。

「何なら今月中に秋あき葉は原ばらへ行ってみろ。今ちょうど『エイミー』と協賛フェアをやってるメイド喫茶があってな。あの世界観を再現するため専用のメイド服を用意して、しかもわざわざ改装までして営業中だ。なかなか楽しめるぞ」

「秋葉原のメイド喫茶か。そういうのは興味ないんだよなあ……」

　言ってから、護堂は「ん？」と考えこんだ。

　自分の言葉に引っかかったのだ。秋葉原？　メイド？　メイド喫茶？　そのどこかに足りないピースがあるようにも思える。

　穴だらけのパズル。それを埋めるためのピースがどこかに――。

4

　草くさ薙なぎ護ご堂どうは書しょ斎さいの人ではない。アームチェアに腰かけて謎なぞ解ときする安あん楽らく椅い子す探偵にあこがれたことはないし、思い立ったら割とすぐに行動を起こす方だ。

　だから、その日の放課後。秋あき葉は原ばらを訪ね、ぶらぶらしてみた。

　時期が時期なので、街はクリスマスムード一色であった。赤や緑で華はなやかに彩いろどられた街並みを、当てもなく一時間ほどさまよったところ。

「さすがに、これで何とかなるわけないよな」

　結局、嘆たん声せいを吐き出すことになった。

　一二月後半に予定していた（かもしれない）謎のイベント。ここに来れば、もしかしたら思い出せるかも——。淡あわい期待はあっけなく崩れた。

　もちろん、何か収穫があれば、もうけもの程度の気持ちではあったが……。

「今日のところは、おとなしく帰るか」

　護堂がいるのは中ちゆう央おう通どおり。秋葉原電気街の中心である。

　根ね津づに帰宅するなら、ＪＲ秋葉原の駅だけが選択肢ではない。たとえば中央通りを上うえ野の方面に歩いていけば、東京メトロの駅も利用できる。徒歩でも帰れる距離だ。

　護堂はひとまず、上野方向に歩くことにした。

　この街を呑のみこむ再開発の勢いは、とどまるところを知らない。訪ねるたびにどこかが変わっているようにさえ思える。電気街

が今どうなっているか、見たくなったのだ。

　昔ながらの電気店、パーツ店はずいぶんすくなくなった。

　ゲーム店、大型量販店、ゲームセンターなどに加えて、どんどん増えてきた食事処や洋服店が街の主役になりつつある。

　途中、護堂はメイド喫茶のメイドさんが配る電気街マップを受け取った。

　そのまま、なんとなく歩いていると御お徒かち町まちまで来た。あとすこしで上野の駅前だ。

　ここまで来ると、もう電気街の雰ふん囲い気きはない。

　背後からの『監視』に護堂が気づけたのは、偶然のおかげだった。たまたまうしろを振りかえったら、知り合いの姿を発見できたのだ。

　足を止めて、待つことにした。

　すると、銀髪の美しき尾行者は肩をすくめ、足を速めた。

「わざわざお待ちいただけるとは恐きよう縮しゆくです、草薙護堂」

「それはいいんだけどさ。もしかして、ずっと俺のうしろにくっついていたのか？」

　そばまで来たリリアナは、制服姿のままだった。悪びれた様子はない。

　理知的な女騎士の顔で、護堂の目をまっすぐ見つめている。

「はい。畏おそれながら、あなたは今日の授業中、ずっと考え事をされていました。もしかしたら、どこかの襲撃計画でも立てたのではと心配になり——」

「尾行したのかよ!?」

　リリアナは短く「はい」とうなずいた。

「そんなこと誰がするか。なあリリアナ、いいかげん俺を信用して

くれ」

「残念ながら、それはできかねます。いざというときにあなたが見せる大おお雑ざつ把ぱで危険すぎる行動、さんざん存じあげていますから……」

「うっ」

　あっさり拒否されて護堂は絶句した。身に覚えがありすぎるので反論できない。

「じ、じゃあ、せめて声をかけてくれよ。俺にやましいところはないから、尾行なんてしなくても大丈夫だ。俺のやることをすぐそばで見てればいいだろ」

「え？　わたしがあなたのおそばに、ですか？」

「ああ。いつのまにかうしろにつかれるより、全然気楽だし」

「そちらの方がわたしも『仕事』をしやすいでしょうけど……王であるあなたといっしょに出歩くのも畏れ多いといいますか……」

　銀髪の女騎士が遠慮しようとする。だが、護堂はさらに言った。

「いいんだよ。王様である俺が許可するんだから。それに、騎士が王様のそばにいたって不思議なことはないだろ？」

　我われながら強引な言いぐさだ。しかし仕方ない。

　実は護堂、女の子相手に『そばにいろよ』などと口走ってしまい、混乱したのである。今の発言にどう収しゆう拾しゆうをつければいいのだろうと。

　なので、かなり強引な理屈だったが、リリアナは考えこんだ。

「まあ、カンピオーネのそばに名門魔術結社の大騎士がひかえるのは、むしろ妥だ当とうな振るまいだとも思えますが……あれ？」

　急にリリアナの顔から凜り々りしさが減り、表情に隙すきができた。

　しっかり者の女騎士というより、うっかり屋さんの女の子みたい

な顔つきだ。その顔が不思議なほどなつかしく、そして可愛かわいらしく思えて、護堂はどきりとした。

　ときめきを悟られまいと、とっさに訊たずねる。

「どうかしたか？」

「あ、はい。考えてみたら、たしかにあなたを監視——じゃなくて観察するのでしたら、ずっとおそばにいる方が合理的なのに、どうして今までそうしなかったのかな、と」

　言葉遣づかいまで崩れている。しかし、そんなリリアナが新鮮で可愛らしい。

　彼女との距離がすこし縮んだ気がして、つい護堂は言ってしまった。

「じゃあ、今からいっしょに来るか……？」

「え、ええ。あなたの方に問題がなければ……」

　夕ゆう闇やみが濃くなり、夜の時間が近づいている。

　そんな頃合いの上野を、護堂は銀髪の白人美少女と連れ立って歩いていた。

「今日は目的もなく街をぶらぶら……散歩していただけで、今もそうであると？」

「ああ。べつにいいだろ、散歩くらい。誰かに迷惑かけるわけじゃないし」

　まさか正体不明の忘れ物を思い出すため、さまよっていたとも言えない。

　護堂は当たりさわりのない言いわけを口にした。それに実際のところ、今まで護堂がやっていたことは『散歩』以外の何物でもない。

　しかし、リリアナは憂うれえるようにつぶやいた。

「だとよいのですが……」

「待て。今日は俺、道を歩いてただけだぞ？　それが問題になるのかよ!?」

　護堂の反論。だが、女騎士は憂いを顔に残したまま切り返す。

「ふつうでしたら、もちろん問題になりません。でも、あなたのやることですから……。たとえば、こういう展開もありうると思います」

　リリアナはつらつらと語る。

「あなたは散歩の途中で偶然にも『まつろわぬ神』と遭そう遇ぐうする。そのまま戦闘に突入、舞台となった東京は半分以上が崩壊し、広大な廃はい墟きよと化す……。しかも、これがきっかけで半年後には無法地帯となり、東京は暴力と暴ぼう虐ぎやくが支配する魔界都市と成りはてて――」

「それ、もう推測じゃないだろ!?　単なる妄もう想そうだよ！」

　超展開すぎる未来予想に、護堂はつっこんだ。

「昨日のドニと俺の妙な関係とか、今の話とか。リリアナの考えることは、変にズレてるよな……。妄もう想そうたくましいというか。小説とか書く人間って、そういうもんなのか？」

「く、草薙護堂っ。今なんと？」

「妄想たくましい？」

「い、いえ。そのあとです。あなたはなぜ、わたしの趣味を知ってるんですか!?」

「え……あれ？」

　リリアナに詰めよられて、護堂は首をかしげた。

「そういえば何で知ってんだ、俺？」

「その秘密を知るのは、この世でエリカただひとり。まさか、あなたはあの悪魔女と仲の悪いフリをしつつ、裏では密約を交わし、わ

たしを陥おとしいれようとしてるとか⁉」

「し、してない。するはずないだろうっ」

　護堂はうろたえつつも、言い切った。

「たぶん、前にリリアナが自分で教えてくれたんじゃないか？　そうでもなきゃ、俺が知ってるはずないことだし」

「まさか！　そんな告白、わたしがするはずありません！」

「どうしてさ？　べつに犯罪を犯してるわけでもないし、趣味を人に教えるくらい、ふつうにやることだろ？」

「あの趣味は、どこまでもわたし個人の快かいら——じゃなくて、娯楽を追い求める行為といいますか……。誰はばかることなく想像の翼を羽ばたかせるには、人に見せようなんて邪じや念ねんはむしろ不要といいますか……。とにかく、わたしはわたし自身を満足させるため、心に思い浮かぶあれこれを書き留めているんです！」

「そ、そうなんだ」

　リリアナの剣幕に圧倒されながら、護堂はやっと相づちを打った。

「そうです。だから草薙護堂、この件についてはくれぐれも他言無用、わたしとあなたの間だけの秘密としてくださいっ。よろしいですね⁉」

　さっきからリリアナがカンピオーネへの敬意を忘れ去っている。

　よほど狼ろう狽ばいしているのだろう。神殺しの魔王に命令同然の要請をする銀髪の騎士が護堂には珍しく、そして微笑ほほえましかった。

「それにしても……あなたといいエリカといい、どうやってわたしの秘密を……。もしかして我が家の警備態勢に致ち命めい的てきな欠けつ陥かんがあるとか……？」

「ち、ちょっとあそこに寄ってみないか⁉」

　気まずさをごまかすため、護堂は目の前にあったゲームセンター

を指さした。

　よくある大手ゲームメーカーの系列店だった。

　四階建てのビルを全て使った大きめの店舗で、アミューズメント施設特有のにぎやかな装飾が目につく。きちんと掃除されているらしく、結構きれいだった。

　その店内を、リリアナは興味深げに見まわしていた。

「深夜〇時まで夜遊びできる場所にしては、ずいぶんと明るい雰囲気ですね。思っていたのとちがいます」

　五歳くらいの男の子と父親らしき男性を見て、リリアナが微笑んだ。

　男の子は戦隊ヒーローのゲーム筐きよう体たいにはりついて、真剣な顔でボタンを押したりカードを動かしたりしている。

　せっかくだから、自分たちも何か遊んでみようか。護堂は訊ねた。

「リリアナは何かやってみたいのあったか？」

　ゲームセンターは初めてだという相方のために、ひととおり店内をまわったあとだった。

　クレーンゲーム、新作・旧作とりまぜたゲームの数々、ひときわ大きな筐体を使うカードゲームやオンラインゲーム、コスプレ用の着がえスペースなどなど。

　選択肢には困らない状況ではあったが。

「そうですね……正直、こういう遊びにはあまり興味がありません」

「あー、やっぱり」

　リリアナの告白に、護堂はうなずいた。

　彼女の視線はよりどりみどりのゲーム類の上をあっさり通過し、

むしろ店の設備や客層の方を重点的にチェックしていたのである。

　やはり、デジタルよりもアナログの世界で生きる魔女ということか。

「じゃあ、そろそろ出るか。ごめんな、無理につきあわせて」

「あ、いえ。ひとりではまず来ない場所を見られて、わたしも満足しています。それに全てが興味の対象にならないかというと、そんなこともないわけでして……」

　コホンとせき払いして、リリアナはずいと護堂に顔を近づけてきた。

「ひとつ確認させてください」

「な、何だよ？」

　真剣な女騎士の顔が至近距離に迫ってきたので、護堂はあせった。

　だが当然だろう。こんな近くで妖精のように美しい顔を直視するのだから。

「草薙護堂、あなたは秘密を守れる御方ですか？　特にわたしの友を自称する、悪魔のような女にも秘密を厳守できるなら……つきあっていただきたい場所が」

　そして、三分後。

　妙に軽い足取りのリリアナとともに、護堂は二階へ移動した。

　十種類以上のクレーンゲームがならぶフロアである。リリアナはそのうちのひとつ、特にファンシーな動物のぬいぐるみを収めた筐体へと向かう。

「ぬいぐるみのひとつやふたつ、もちろん買ってしまう方が手っとり早いでしょう」

　両替したばかりの一〇〇円硬貨をにぎり、上機嫌でリリアナは言う。

「でも、自分の手で狩るのも悪くない体験だと思います。なんといっても、狩りは騎士のたしなみのひとつですし♪」

「クレーンゲームを狩りっていうのは、強引すぎないか？」

「そんなことはありません。自みずから獲え物ものを見さだめ、自らの技で射い止とめて、我が物とする。ほら、本質はほとんど同じじゃありませんか」

　凛り々りしい女騎士は、珍しく浮うわついた笑顔であった。

　護堂はそれ以上のツッコミをひかえ、べつの疑問を口にした。

「でも、何でエリカにないしょなんだ？　ぬいぐるみくらい、いいじゃないか」

「ダメですっ。いつも騎士の道を説くリリアナ・クラニチャールが寝室に可愛らしい人形を並べていると知れば、あの女は絶対にからかうはず。そうはさせるものですか！」

　リリアナの答えに、護堂は「うーん」と考えこんだ。

　極秘の趣味だという小説執筆を知られているくらいだ。その程度の機密はとっくに漏ろう洩えいしていそうだが——まあ、言わなくてもいいことだろう。

　それにしても、リリアナは本当に楽しそうだ。

　慣れないゲーム機と向き合って、目当ての人形をゲットすべく奮闘している。

　考えてみれば、料理にハーブ・健康食材・お菓子作り・編み物など、女子が好きそうなジャンルにはことごとく精通し、一いつ家か言げん持つ少女なのだ。

　となれば、ベタにぬいぐるみやファンシーグッズ愛好家でも、たしかに違和感はない。

（でっかい遊園地に連れていったら、ものすごくよろこびそうだな……）

　凛々しい容姿と雰囲気で、つい見失いがちだが。

　護堂の身近でいちばん『少女らしい』異性は、実はリリアナではないのか。

　しみじみ思ってから、護堂はふと気づいた。自分はどうしてリリアナが好きなものを知っているのだろう？

　小説の件といい、今の感想といい、たしかに何かがおかしい——。

　結局、護堂も手伝って五つのぬいぐるみを手に入れて。

　ふたりはゲームセンターをあとにした。辺りは暗く、すっかり夜だった。

「じゃあ、そろそろ帰るか」

「ええ。いい頃合いですしね」

　護堂とリリアナはうなずき合って、駅への道を歩きだした。

　本音を言えば、このままどこかで夕食でもいっしょに、とも思う。そしてリリアナとの関係をわずかであれ好転させたい。しかし。

　ふたりきりで食事しようと女子を誘う。草薙護堂には高すぎるハードルだ。

　だから、黙って歩くことにした直後——。

「収穫のあと……？　聖なる何かが通りすぎた……？」

　不意にリリアナが足を止めた。

　狩りの成果ですっかり上じよう機き嫌げんになっていた騎士にして魔女。その顔は今や超然と研とぎすまされ、その目は茫ぼう洋ようと宙を見つめている。まさか霊視の啓けい示じが降りてきたのか？

　護堂が驚いていると、リリアナの目に理性の光がもどった。

「何か視みえたのか？」

「はい。……ひとつ確認させてください。今、神の気配は感じましたか？」

「いいや、全然」

　宿敵同士であるカンピオーネと神々は、たがいの存在を感知し合う。かなり接近しなくてはダメだが、『まつろわぬ神』に近づいた神殺しの心身には戦うための力が充じゅう溢いつするのだ。

「もしかして神様がいたのか？」

「それはないと思います。ですが、何かしらの怪異を起こす者が近くにいたような——」

　不吉なことを教えられた。

　このどこかにあやしい怪物がいるのか？　護堂は周囲を見まわしてみた。

　クリスマスを前にして、街は華やぎ、どこか浮ついているようにも思える。上野の駅近くという場所柄、通行人はやたらと多く、騒がしい——ん？

　歩道を行く人たちの一部が、何やら怪け訝げんそうにしていた。

　百貨店のショーウインドウをのぞき込んで指さしたり、あれこれ話したりしている。

　護堂が目くばせすると、リリアナは即うなずいた。ふたりでそちらへ近づく。騒ぎの理由はすぐにわかった。若い女性のふたり連れが声高に話していたからだ。

「ほんと一瞬だったんだよ！　さっきまでふつうにサンタさんの人形だったのが、一瞬で〝これ〟に変わったの！」

「えー、うそぉ。前から〝こう〟だったんじゃないのー」

「ちがうって！　ちゃんと見たんだから！」

　彼女たちがいるのは、大きなオモチャ屋の前だった。

　そのショーウインドウをのぞき込んで、護堂は驚いた。そこに

あったのが、なんとも華のない代しろ物ものだったからだ。

　現代において、冬の風物詩ともいえるサンタクロース。

　でっぷり太った老人。白髪で白いひげ。トレードマークは例の赤い衣装。

　オモチャ屋だけあって、店頭のショーウインドウには大小さまざまなサンタ人形が配置され、街のクリスマスムードを盛り上げるのに役立って——いなかった。

　護堂の見るサンタ人形は、全て灰色だったのである。

　赤いはずの衣装も灰色。その肌も、白であるべき髪やひげも灰色。かつぐ袋も灰色。

　白黒テレビでも見ているような、灰一色のカラーリングであった。

「灰色のサンタ……？　なんかメチャクチャ地味だな」

　こんなのを大量に飾ったところで、たいしてクリスマス成分の足しにはなるまい。

　しかし、さっきの言葉『一瞬でこれに変わった』とは？

「……草薙護堂。妙なことになったようです」

　閉ざしていた目を開き、リリアナが言った。

　どうやら視覚を飛ばす『魔女の目』の術を使っていたようだ。

「この駅前の通りにいる全てのサンタクロース……人形も、絵も、仮装した人間も全て、色が変わっています」

「色ってまさか、こいつらと同じで灰色だけになってる、とか？」

「そのとおりです。この変化に何か意味がある——とも考えづらいのですが、とにかく全てのサンタが灰色に変わっていますね」

　報告するリリアナは困惑した口調だった。

　ためしに護堂は駅前をぶらついてみた。赤いサンタがどこかにい

ないか探す。

　だが、ひとつも見当たらない。

　ポスターに描かれたサンタも灰色。

　店頭に飾ってあったサンタのぬいぐるみも灰色になっていた。

　しかも、色の変化はサンタのコスプレで客引きをしていた青年にまで影響していた。彼の場合、衣装だけだが灰色一色になっていたのだ。

　華やぎの成分が二割ほど失われたような——そんな印象だった。

　そして、『灰色化』を遂とげた老人慈じ善ぜん家かの姿があふれる街のなかで、通りがかりの人たちはとまどい、不思議がり、不ふ審しんがっていた。

　リリアナのところにもどるなり、護堂は言った。

「これって、さっきリリアナの言ってたヤツが起こした怪奇現象か？」

「だと思われますが……これではただのイタズラです。こんなことをしでかす理由、ちょっとわかりかねますね」

　不思議そうな銀髪の騎士の前で、護堂は腕組みした。

　思い出せないクリスマス前後の予定に、ささやかな怪奇現象。いつも神と戦うカンピオーネの尺度からすれば、どれもスケールの小さい事件である。

　だが、とにかく不可解で、そして厄やっ介かいそうな事件ではあるのはたしかだった。

第２章　灰色の謎を追って

1

「まあ、被害地域ではサンタというサンタが全て灰色になるもんだから、迷惑をこうむってる人は地味に多いです」

　緊張感に欠ける口調で説明するのは、旧知の人物だった。

　正せい史し編へん纂さん委員会のエージェント・甘あま粕かす冬とう馬ま。よれよれの背広を着た青年である。

　場所は虎とらノ門もんの高台に位置する七なな雄お神社。その境けい内だいであった。ここは万ま里り谷や祐ゆ理りが媛ひめ巫み女ことして奉ほう職しよくする神域で、甘粕の隣には彼女も付き添っていた。

「せっかく買ったミニスカサンタ衣装を買い直さなきゃいけない。せっかく刷ったサンタの絵え面づら入り販促物をまた印刷しなきゃいけない。プレゼントを楽しみにしてる子供たち直筆のサンタさんイラストが残念な色合いに、みたいな。でも」

　緊迫した状況でも昼ひる行あん灯どんぶりを見せるのが甘粕節ではある。

　だが、護ご堂どうにはなんとなくわかった。

　このゆるさ、それほど危険な事件だと本当に思ってないのだなあ、と。

　昨日、護堂が目撃した怪異。サンタの衣装が灰色に変わるという怪奇現象。放課後、七雄神社を訪ねて祐理に問い合わせたところ、

説明のため甘粕がやってきたのである。

　ただ、怪異を語る甘粕はいつも以上のお気楽さであった。

「言っちゃアレですけど、それだけなんですよねェ。神様がやってきて暴れてるわけじゃないんです。だから、わざわざ天下のカンピオーネさまにお手間を取らせる意義も必要も皆かい無むといいますか」

「むしろ、草くさ薙なぎさんが動かれることで怪異が増幅するかもしれません」

　ひかえめに言い添えたのは、祐理だった。正史編纂委員会側の主張——いや要望は、こうなのだろう。頼むから余計な首をつっこまず、おとなしくしていてくれ、と。

　魔王カンピオーネは皆、くすぶる火種を爆発させる名人。

　誰の言葉だっただろう？　思い出せない記憶をもてあそびながら、護堂は自分に対する偏見を悲しく思った。俺はほかの連中とちがうっていうのに……。

「でも、実際に事件は起きてるわけじゃないですか」

　ひとまず葛かつ藤とうを棚たな上あげして、護堂は訴えてみた。

「ええ。草薙さんが目撃した上野のケースだけじゃありません。すでにここ四、五日ほどで十数件も発生中なんです。事件現場は新しん宿じゆく、六ろつ本ぽん木ぎ、池いけ袋ぶくろ、上野、大おお手て町まち、銀ぎん座ざ、新しん大おお久く保ぼ、恵え比び寿す、三さん軒げん茶ぢや屋や……まあ、その他いろいろです」

「人の集まるところばかりですね……」

「はい。この事件についちゃ、ある推測を立てていますよ。真相はたぶんこれだろう、みたいな。割と当たってそうな気もしてます」

「そりゃすごい。どんなのですか？」

　甘粕の敏びん腕わんエージェントらしい物言いに、護堂は感心した。

　ただし、すぐに「？」と首をかしげることになったが。

「おそらく、これは復讐なんですよ。クリスマスシーズンを憎む不幸な非モテ層による、幸せなリア充じゆうたちへの報復行為！　クリスマスが憎い……だから、その象しよう徴ちようであるサンタクロースをヴィジュアル的にめちゃくちゃにしてやる！　なんてね」

「すいません。今の説明でわからない言葉がいくつかあったんですが」

「私もです。『ひもてそ』とは、どのような方々なのですか……？」

　護堂が言うと、遠慮して口数のすくなかった祐理まで質問した。

　内うち輪わの用語を無節操に使う悪あく癖へきが、甘粕にはあるのだ。

「いや、ほら。クリスマスって幸せそうなカップルが多いでしょう？　そういうのを見るのも腹立たしいってモテない民間の呪術師なんかが、ついカッとなってやった——なんて真相を想像してたんですよ」

　苦笑しながら説明しなおす甘粕に、護堂は訊たずねた。

「術とか魔法で、サンタの色だけ変えたりできるんですか？」

「そんなくだらない術を考案して研けん鑽さんしたなんてバカ話、寡か聞ぶんにして存じあげませんが。理論的には十分に可能です。ただ、まあ……」

　ここで甘粕はすこし口ごもった。

「魔女でもあるリリアナさん——勘かんのいい彼女が、術を使う気配に気づかなかった。そこがすこしだけ引っかかります」

　広範囲に影響をおよぼす術は感知しやすいのだと、甘粕は注釈した。

「よほど巧妙に術者の存在をカモフラージュしたんでしょう。こんなバカげたイタズラのために、そこまで工夫する理由がわかりません」

「イタズラですか……」

「犯人はすごく真剣なのかもしれませんがね。ただ怪奇現象ではありますが、本当にささやかなものです。われわれ委員会の下したっ端ぱが駆けまわって、解決すればいいってレベルの。クリスマスまでに処理したい案件ですし、私の方で何とかしてみますよ」

　さりげなく護堂のお節せつ介かいをこばむ言い方で、甘粕は請うけあった。

　七雄神社を出る頃には、すっかり暗くなっていた。護堂は虎ノ門駅で電車に乗った。帰宅するためではない。銀座線の上野駅で降り、昨日も訪れた街へやってきた。

　師も走る年末の一二月。街の雰囲気はどこかせわしない。

　だが、この時期の高校生を悩ませる一大イベント・期末テストはすでに終了していた。城じよう楠なん学がく院いんでは毎年、一二月の上旬に行われるのだ。

　このため、護堂は心おきなく夜の街に繰り出せる。

「何でか気になるんだよな……」

　上野の駅前を歩きながら、護堂はつぶやいた。

　繁はん華か街がいである。会社帰りの勤め人、学生、私服の若者など、とにかく人出が多い。まだ宵よいの口くち、この界かい隈わいの夜はこれからが本番なのだ。

　夜ではあったが、かなり明るい。

　街灯、店の照明、光る看板、道ゆく車のライト。そうした明かりのおかげで、街を見渡すのにも苦労しなかった。まあ、カンピオーネは夜目が利きく。完全な闇やみのなかはともかく、星明かりでもあれば夜でも苦労しないのだが。

　護堂は上野の街をさまよいながら考える。最近、不可解なことが多い。あったかもしれないクリスマス前後の予定。なぜか知っていたリリアナの個人情報。そして、灰色のサンタクロース誕生劇。こ

れらを座視していたら、とんでもないことが起こりそうな——。

　イヤな予感が胸を騒がせる。

　野球の試合なら、こんな展開かもしれない。

　初回で七得点して大量リード。しかし、敵は一回に一点ずつ返しながら着実に反撃中。一方こちらは追加点なし。いつのまにか点差は一にまで縮まって——みたいな。

「どうせ考えたって、何かわかるわけないんだ」

　草薙護堂は智力よりも、体力・脚力の方が遥はるかに達者な男。

　だったら、刑事物のドラマではないが現場一〇〇回。手がかりが見つかるまで足を使うのも悪くない。開きなおって、単純労働に精を出すことにする。

　昨日、サンタの『灰色化』が起きた駅前の大通り。

　しかし、灰色に染まったサンタたちは、人形・写真・イラスト・衣装のどれもとっくに撤去され、街はふたたび赤と緑のクリスマス色でいろどられていた。

　さすが日本人と誉ほめるべき勤勉さで、もとどおりに復旧されたのだ。

　だが、護堂にはそれが今は腹立たしい。ほかに手がかりはないだろうか——思案をはじめたとき、携帯電話が着信音を鳴らした。

　取り出してみる。液晶を見ると、リリアナからの着信だった。

「そういえば俺、何であいつらの番号とか登録してるんだ？」

　護堂は不思議に思った。リリアナだけでなく、エリカや祐理の電話番号、メールアドレスも登録済みなのだ。個人情報を交換し合うほどの関係でもないように思えるのだが。

　ともかく疑問は脇わきに置き、電話に出てみた。

『あなたもこちらにおいでとは、意外でした』

　いきなりリリアナに言われた。『も』？

『昨日のように、後ろをごらんください』

まさか。振りかえると、今日は私服姿の女騎士が真後ろで電話中だった。

2

リリアナが所属する魔術結社の名は《青せい銅どう黒くろ十じゅう字じ》。

その名のとおり『青と黒ネラツズーロ』を組織のシンボルカラーとしている。

だからだろう。リリアナが着る私服には、必ず青と黒の二色がどこかに入る。しかし、今日は珍しく白単色のコートに、濃いグレーのパンツという装いだ。だが、護堂は気づいた。

リリアナが首に巻くマフラー。これが青と黒の縦たて縞じま模様だった。

エリカもそうだが、欧おう州しゅうの騎士たちはこういうところをおろそかにしない。さりげなく自分たちの所属を明らかにしている……。

ひそかに感心する護堂の前で、リリアナはここに来た理由を語っていた。

「サンタクロースの色が変わった昨日の一件。どこかの魔術師が企くわだてたイタズラ、放置してもかまうまい……そうも考えたのですが」

行きかう人々の雑ざつ踏とうから離れ、ガードレールのそばでふたりは話していた。

「わたしはこれでも魔女。万ま里り谷や祐ゆ理りほどでありませんが、魔術の気配には敏感な方です。なのに、昨日の怪異は発生するまで感じ取れなかった。よほど巧妙にカモフラージュしていたのでしょう。そこまでする理由が不思議で、調べる気になったのです」

　硬い口調で、甘あま粕かすも指摘していた疑問点を語る。

　まじめなリリアナはそこをスルーせず、答えを見み出いだそうとしたのだろう。

「それで草くさ薙なぎ護ご堂どう。あなたはなぜここに？」

「俺の方は……いろいろあるけど、最終的には『なんとなく』かな。なんとなく気になったから、原因を突きとめたくなった。勘かんとか言ってもいいけど」

　護堂は答えた。まあ、もろもろの理由は一応ある。だが、その辺をひっくるめると『なんとなく』や『勘』になってしまう。

　この説明では納得してもらえないかもと、護堂は危き惧ぐしたのだが。

「いかにもあなたらしい、動物的で大おお雑ざつ把ぱな理由ですね」

　リリアナは大きくうなずいた。納得顔だ。彼女は草薙護堂をどういう人間だと認識しているのだろう？　訊きいてみたいが、イヤな答えが返ってきそうな気もする。

　あえてチャレンジしようとせず、護堂は代わりに言った。

「なあ。もしよかったらだけど……つきあってくれないか？」

「つきあう⁉」

　リリアナは急にびっくりした。

「まさか、あなたと男女の交際をせよと⁉　い、いくらカンピオーネのお言葉でも、ひとりの乙女おとめとして受けいれがたい御命令ですっ！」

「な、何でそうなる？　昨日の事件、いっしょに調べてくれって意味だよ」

　あせるリリアナへ、護堂は冷静に補足する。

　彼女はまじめで堅物な女騎士である。だが、ひどく乙女らしい素

顔も隠し持っている。何でもかんでも恋愛に結びつけてしまったり。

　すこし困りながらも護堂は苦笑した。こういうところがリリアナの良さかもしれない。

「し、失礼しました。……ところで、それは『王』としてのご用命ですか？」

　わずかに赤面してから、リリアナは言った。

「今回の調査は、個人的な研究のようなものです。もちろん、わたしたち魔術師の王であるカンピオーネに求められれば、共に謎なぞを追う——いえ、魔王方のしもべとなって謎解きするのも厭いといません。ですが」

　理り不ふ尽じんな暴君に挑むような凜り々りしさ、あるいは人の器量を試ためすような気き概がい。

　リリアナの言葉には、そういう微妙な綾あやがありそうだった。

「魔術を知らない素人しろうととしてのご要望でしたら、考えさせていただきたいところです。ひとりの方が動きやすいですし、専門知識をいちいち講義するのも面倒ですから」

「そ、そうだろうな」

　要するに『素人は邪じや魔ま』と言われて、護堂はたじろいだ。

　たしかにそうなのだ。すでに専門家の甘粕が探たん索さくをはじめているはず。卓たく越えつした魔女であるリリアナも調査に乗り出した。

　何の知識も持たない素人がしゃしゃり出る理由は、特にない。

　草薙護堂は『神との戦い』がなければ役立たず。並の人間より体力がある程度の取とり柄えしかない。まあ、この怪異がきっかけで『まつろわぬ神』でも出れば話は別だが、それほどの大事件とは今のところ思えなかった。

　しかし、灰色のサンタ。その謎を解かねばいけない気がした。

　だったら言ってしまうか。『これはカンピオーネとしての命令だ』と。護堂はその誘惑を一〇秒ほど吟ぎん味みし、即座に捨てた。

　こんなことを言う男は、魔王としてはともかく、人としておしまいだ。

「わかったよ。俺は俺でなんとかひとりでやってみる。変なこと頼んで悪かった」

　あえて護堂がさらりと言うと、リリアナはため息をついた。

「草薙護堂。ここは『カンピオーネとしての命令だ』と宣言すべき場面です。ついでに、王への敬意を知らない大騎士風ふ情ぜいに懲ちよう罰ばつもあたえるべきでしょう。……あなたは本当に、いつまで経たっても魔王らしくならない方ですね！」

　あげく、あきれたような口調でダメ出し。そのうえ、こんなことまで言い放つ。

「ですが、幸いにもわたしはイタリアの騎士。盟主である魔王に多少の問題があっても、補佐することには慣れています。以後はわたしの指示——いえ、進言をよくお聞きくださいね」

「え？」

　国籍はイタリア。だがクロアチアの血をひく東欧系移民。複雑な民族事情を持つ妖精めいた少女は、悪戯いたずらっぽい表情で魔王ふたりへの暴言を口にした。

　ちょっとリリアナらしからぬ悪ふざけに、護堂はびっくりしつつ答えた。

「つまり、俺につきあってくれるのか？」

「はい。さっきお会いしたときから、そのつもりでした」

「……じゃあ、何であんなことを言ったんだよ⁉」

「それは——なぜでしょう？　ああいうふうに迫ったら、たぶんあなたは『王』として御命令できないような……そんな気がしたんです」

　リリアナはフッとやわらかく微笑ほほえんだ。

　それはいつもの凜々しさ、あるいはときどき見せる迂う闊かつさともちがう、歳とし相そう応おうの少女らしい無む邪じゃ気きな微笑みだった。その笑い方が護堂にはなぜかなつかしく、そして魅力的で、思わずドキッとさせられた。

「なので、すこし試してみたくなりました。申し訳ありません」

　あまり申し訳なさを感じさせない謝罪。だが、護堂は何も言えない。

「さきほど正せい史し編へん纂さん委員会には問い合わせ済みだとおっしゃいましたね？　どうせ甘粕冬とう馬まあたりにも強く出られず、ひとりでここへ来たのでしょう？」

「う……」

　護堂はうめいた。見すかされている。なぜだろう？

　リリアナと自分はそれほど深い仲ではないはず。なのに、彼女は草薙護堂という人間を不思議なほど理解している。護堂もリリアナ・クラニチャールの性格を把は握あくしている。

　なんとも不可解で、しかし、これはこれでよろこばしい事実。

　ともあれ、護堂は有能きわまりない協力者を得ることができたのだった。

「ひとつ気になったのは、サンタクロースの色が変わったという現象です」

　語りながら、リリアナは紅茶のカップを護堂の前に置く。

　上野で再会したあと、団だん子ご坂ざかの一軒家にふたりは移動した。根ね津づ三丁目の草薙家からもかなり近い。この家はリリアナの日本での仮住まいだった。

　ふたりがいるのはリビングである。窓は南側。陽当たりもよさそうだ。

「赤が灰色になったことか？」

「はい。……まあ、目立つ原色を地味な色に変えたかっただけかもしれませんが。昨日の霊視で授さずかったイメージもありますし」

「そういえば、いろいろ言ってたもんな」

「わたしには一瞬、街の景色が収穫のあとのように見えたのです。そして、聖なる何者かが通りすぎ、収穫後の畑で落ち穂を何粒か拾っていったように……」

「なんか農作業みたいだな」

　護堂は素そ朴ぼくな感想を口にした。するとリリアナはうなずき、

「ええ、まさに。あれが『農耕』、つまり大地の恵みにまつわるイメージだとすれば、サンタクロースの『赤』が失われた意味は意外と大きくなるかもしれません」

　リリアナはつらつらと自説を語りはじめた。

「日本でいうサンタクロースの原型は聖ニコラス。キリスト教の守護聖人です」

「聖ニコラスとサンタクロース……全然ちがう読みだな」

「理由はかんたんです。日本人はサンタクロース文化をアメリカから学んだわけですが、アメリカ大陸にこの風習を持ちこんだのはオランダ系移民でした」

　リリアナはメモを取り、アルファベットを書きはじめた。

「聖ニコラスをオランダ式に読むと聖シントニコラアス。これが訛なまって『シンタクラアス』となり、『サンタクロース』とアメリカ式に発音するようになるのです」

　Saint NICOLAS　Sint Nikolaas　Sinterklaas

　そして、最後にSanta Clausとリリアナは綴つづってみせた。

「聖ニコラスならざるサンタクロースがトナカイのソリに乗って現

れ、子供たちにプレゼントをばらまく。この定型はたしか一九世紀のアメリカで確立されたはずです。あの赤い衣装がユニフォームになったのは、もっと最近でしたね」

「あー……そういやコーラ会社の販促キャンペーンがきっかけだっけ」

　リリアナに言われて、護堂は思い出した。

　赤をイメージカラーとする北米の有名飲料メーカーが一九三〇年代に冬の売り上げをのばすため、ＣＭキャラクターにサンタクロースを採用。ポスターに出しまくったのだ。彼が着るコスチュームは当然のように『赤』であった。

　サンタの服が赤いのは、コーラの缶が赤いから。冗談のような事実であるらしい。

「赤いコスチュームの老人が世界中で市民権を得る前、今でいうサンタクロースに相当する存在は聖ニコラスないし、彼に類るい似じする人物や妖精などでした。その頃の彼が配り歩いたプレゼントは木の実や果物です」

「シンプルっていうか、夢がないプレゼントだな」

「木の実や果実は穀こく物もつの実り、収穫、地の豊ほう穣じよう――そういった『大地の恵み』を象しよう徴ちようするにすぎません。元をたどると、クリスマスとは『冬の祭日に聖なる者が来たりて、大地に豊穣をもたらす』宗教儀礼。遥はるか太古にまでさかのぼれる祭事なのです」

「宗教儀礼……」

　否いやが応おうでも『まつろわぬ神』を想起させられる言葉だ。

　リリアナが気にしていた問題点、なんとなく護堂は見えた気がした。

「あれか？　今のサンタはともかく、赤くない頃のサンタはむしろ聖ニコラスとかいうべきで、そいつが地上に出てきたら『まつろわぬ神』になるかもしれないと？」

「〝かもしれない〟ではなく、なるでしょう」

　あっさりとリリアナは認めた。

「地上に降こう臨りんした聖ニコラスは、おそらく大地の属性を持つ豊穣の神にしてカトリックの聖者という神格になるはずです」

「やっぱりか！」

「昨日あなたは神の気配を感じておられなかった。だから考えすぎかとも思います。ただ逆をいうと、まちがいなく安全とも言い切れません」

「だよなあ。念のため、調べておくに越したことはないな」

　護堂とリリアナはうなずき合った。

　こういうときは、まじめな性格同士なので話が早くていい。

「昨日の霊視は聖ニコラス本体でなく、その筋に連なる大地の精を示していたのかもしれませんね。その線ですこし追いかけてみましょう」

　ふたりで話しこんでいると、リビングのドアが開いた。

　カレン・ヤンクロフスキ。リリアナに仕つかえる専属メイドが入ってきたのだ。

　珍しくメイド服ではない。青のコートに、黒い毛皮の帽子という私服姿。車輪付きのトランクまで持っている。これから旅行のようだ。

「いらっしゃいませ、草薙さま。お帰りなさいませ、リリアナさま。ご挨あい拶さつが遅れてしまい、申し訳ございません」

　深々と頭を下げ、カレンは口こう上じようを述べた。

「まだいたのか、カレン」

「はい。出発前に急な用事ができまして、この時間まで居残ることに。……でも、おかげでいいものを見ることができました。ふふふふ」

　女主人のリリアナと話しながら、カレンはほくそ笑む。

「まさか私の不在をいいことに、リリアナさまがカンピオーネであられる殿との方がたをご自宅に引きこまれているとは……。人のうわさに戸は立てられないと申しますが、ご安心ください。女主人の秘密を厳守するのはメイドのたしなみ」

「へ、変な邪じゃ推すいはするな！」

「今夜はごゆっくりとお愉たのしみくださいませ。では、よい夜を」

　ニヤニヤ笑いながら一礼し、カレンは去っていった。

「あの子、どっかに行くのか？」

「え、ええ。もうすぐナターレですからね。家族といっしょにすごさせるため、特別休暇をあたえました。これから本国へ帰るところです」

　ナターレとは、イタリアでいうクリスマスのことだ。日本とちがい、欧州では家族とともにすごすことが圧倒的に多いとか。それゆえの配慮だろう。

　それにしても、クリスマスの足音がすこしずつ近づいてくる。

　イエス・キリストの聖せい誕たん祭さいとやらの前に、解決の目め処どを立てられるだろうか……？

3

　一二月一八日。クリスマスと冬休みがぐっと近づいてきた。

　終業式を三日後にひかえて、城じよう楠なん学がく院いん高等部では午前中だけ授業を行う。だが、この日リリアナは欠席していた。

　その理由を知る護ご堂どうは授業終了後、昼食も食べずに彼女の家へやってきた。

　玄関でチャイムを押すと、インターホン越しにリリアナの声が応こたえる。

『鍵かぎはかかっていませんので、そのままお入りください』

　女子の家にお邪じゃ魔ますることを気恥ずかしく思いながら、護堂はドアを開けた。

　しかも、この家の専属メイドは遠くイタリアに里帰りしていて、女主人は一時的にひとり暮らし中なのだ。

　かすかに動揺する内心を隠しながら、ひとまずリビングへ。

　リリアナはそちらで作業中だった。彼女は魔術の準備をするため学校を休んだのだ。

「申し訳ありません。この地図のなかには入らないよう、お気をつけください」

　リビングのテーブルやソファは、どこかに片づけられていた。

　そうしてスペースを作った部屋に広げられているのは、巨大な航空写真地図——東京を空から撮影したものだった。サイズは縦たて三メートル、横四メートルというところか。リリアナはその一角に片ひざをつき、しゃがみ込んでいた。

　護堂は気づいた。リリアナがいるのは文ぶん京きよう区くの辺りだ。

　地図上の文京区団だん子ご坂ざか——この家がある地所にリリアナはしゃがみ込んでいるのだ。

　そして、航空写真の東京地図がすくなからぬ呪じゆ力りよくを宿しているのも感じ取った。

「これって、何か魔法を使ってるんだよな？」

「はい。探たん索さくの魔術……を使うための仕込みといいますか」

　リリアナはしゃがんだ姿勢のまま語る。

　右手をのばし、人差し指と中指の先端を地図につけていた。指先からリリアナの――テンプル騎士にして魔女でもある者の呪力が放出中だった。

「昨日も言ったとおり『赤くないサンタクロース』が地の豊ほう穣じようにかかわる者だとすれば、この現象が起きた場所では地の霊気がわずかにせよ高まるかもしれません。猟りよう犬けんを放って、たしかめてみようと思います」

「リリアナはそんなのを飼かってたのか」

「もちろん、召しよう喚かんの魔術で呼び出す使い魔ですが。わたしたち魔女は天と地の女神に仕つかえた巫み女この末まつ裔えい……地に属する獣けものの霊を召し出し、地の霊気をたどらせることはそれほどむずかしくはありません」

　プリンセス・アリス。ルクレチア・ゾラ。そしてリリアナ・クラニチャール。

　護堂が知る三人の魔女。彼女たちはふつうの女魔術師（たとえばエリカのような）では使えない、特殊な術法を操あやつる資質に恵まれているという。

　その術法の大系こそが『魔女術』だった。エリカが前にどこかで、

「あまり言いたくはないけど……天と地、つまり自然や風土にまつわる魔術の素養ではリリィの足もとにも及ばないわ」

　と、洩もらしていた気もする。いつどこでかは、なぜか思い出せないが。

「ただ、そうするには魔性の猟犬を東京中に送りこむ必要があります。それをやると時間も手間もかかりますし……何より危険があるといいますか」

「まあ、バケモノみたいなのを野放しにするわけだしなー」

　魔術で呼び出す魔獣・使い魔の類たぐいと、護堂は戦ったことがある。

　あんなのが無邪気にじゃれつくだけでも、一般人には致ち命めい

傷しようになりそうだ。

「そこで東京の地図に類るい感かん呪術を施ほどこしました。ここに猟犬を解とき放ち、探索させれば、現実の東京都内を駆けまわらせるのと同じ効果が得られます」

　と、リリアナは写真地図から指先を離した。術をかけ終わったようだ。

　類感呪術とは民俗学の用語だ。たとえば、憎い人間の髪の毛を人形に埋めこみ、これを燃やす。すると、憎しみの対象である当人が焼死する。超自然的な効果を何かにおよぼしたいとき、その対象と類るい似じしたものを代わりに用意する呪術のことだった。

「もう準備できたのか。じゃあ、その猟犬っていうのは？」

「そちらもすでに。これです」

　リリアナが示したのは、彼女の足もとに置かれていた『豚ぶた』だった。

　ブタのぬいぐるみ。二日前、リリアナがゲームセンターで取っていたやつだ。手のひらサイズで、ゆるキャラ風デザインのくせに目つきが悪い。

「……ぬいぐるみのように見えるけど」

「ぬいぐるみに大地の精である『豚』の霊を宿らせたものです。先ほど猟犬と言ったのは、あくまで話をわかりやすくするため。地の霊気を追うのですから、貪どん欲よくで鼻が利きく『豚』の霊がいちばんだと思い、準備しました」

「いや、べつに犬でもブタでもかまわないんだけどさ」

　護堂は言った。ウルスラグナの化身『猪いのしし』だって、ブタの近きん似じ種しゅだ。

「せっかく魔術とか呪術ってのを使うんだから、ぬいぐるみよりもそれっぽい小道具の方がいいような気はちょっとするな……」

「た、たまたま手近にあったブタの似姿がこれだったんです！」

　リリアナはちょっと恥ずかしそうに反論した。

「もしも霊気の高まりを確認できたら、試ためしに現地へ行ってみましょう。そこでサンタクロースの『灰色化』が起きるか、あるいは起きたあとなら、どこかの魔術師によるイタズラ以上の厄やつ介かい事ごとである可能性が高くなります」

　何はともあれ、探索の魔術はつつがなく行使された。

　リリアナが用意した巨大な写真地図。その上をブタのぬいぐるみがゆっくりと——三分間に一、二センチ程度の速さで動いていく。

　もちろん、ブタを動かす人間の手も動力もない。勝手に這はいまわっている。

「ただ待ってるのも退屈だし、昼飯でも食べに行かないか？」

　護堂は切り出した。もう昼もだいぶ遅く、空腹だったのだ。

「あ、いえ。よろしければ、おひとりでどうぞ。わたしはこの地図にかけた類感呪術を維持させる仕事がありますので」

　ランチの誘いに、リリアナは答えた。

「呪力を送りこむだけでむずかしくはないのですが、そばにいないと駄目なんです」

「じゃあ、何か買ってこよう。リリアナは食べたいものあるか？」

　相棒がいそがしいなら、雑用くらいせねば。護堂としては当然の気き遣づかいだったが。

　リリアナはムッと、説教くさい感じで眉まゆをひそめた。

「昨日も申し上げたではありませんか。あなたには魔王らしさ、カンピオーネらしさが欠けていると。お昼の買い出しに行く魔王なんて初耳です」

「いいじゃないか。俺はヴォバンのじいさまあたりとはちがうんだから。スーパーで買い物だってするし、購買でパンも買うよ」

　肩をすくめて護堂が言うと、リリアナはあきれ顔になった。

「あなたはそろそろ執しつ事じなりメイドなりを用意して、そういう雑事からご自身を解放させるべきですね。世界に七人しかいないカンピオーネなのですから」

「執事・メイド付きで暮らす高校生なんて、聞いたことないぞ……」

「いいんです。草薙護堂は神殺しなんですから。……でしたら、いい機会です。あなたにはすこし、奉仕を享きよう受じゆすることに慣れていただきましょう」

　リリアナが胡う乱ろんなことを言ったので、護堂は「えっ？」と聞きかえした。

　類感呪術を維持するには、そばにいて呪力を供給するだけでいい。

　だから、その間ほかの作業をしても問題ない——。と言って、リリアナは愛用のエプロンを身につけ、キッチンという戦場へ降り立った。

　剣の代わりに包丁、まな板、フライパン、鍋なべにお玉などを駆く使しして奮闘する。

「な、何か手伝おうか？」

「無用なお気遣いです。王らしく鷹おう揚ように、向こうでお待ちください」

　せっかくの申し出は、あっさりと拒絶され。

　手て際ぎわよく料理するリリアナの姿を、護堂はキッチンの入り口から見つめるだけだった。まさか、自分のために女の子が手料理を振る舞ってくれるとは——。

　めまいにも似た感かん慨がいと困惑が、護堂を襲う。

　リリアナの格好は黒のセーターに青いジーンズ、その上にエプロンという洒落しやれっ気けのないものだった。それがかえって、女の子のプライベートに入りこんでいる実感をまざまざと感じさせて

くれる。

　もはや護堂は、神殺しでもカンピオーネでもなく。

　女子に不慣れな『彼女いない歴＝年齢』男子として、おろおろ立ち尽くすだけだった。

　そうして待つこと約三〇分。ついにリリアナは料理を終え、しかも手早く調理道具も洗ってしまい、準備万端で昼食に臨のぞむ形となった。

　しかし、リビングでは今も『豚』が地図の上をのったり動いている。

「今日は天気もいいことですし、外でいただきましょう。ちょっと寒いですけど、風もありませんしね」

　リリアナは提案して、料理の載のったトレーとともに庭へ出た。

　丸い木のテーブルと木のイスがふたつ置かれていた。本来はもっと温暖な季節に活躍させるためのセットだろう。だが、今日はリリアナが言ったとおり、一二月にしてはかなりあたたかい。庭での食事も十分にいけそうだった。

　というわけで、テーブルに料理がならぶ。

　ボロネーゼのパスタ。温野菜のサラダ。熱々の豆スープに魔法瓶の紅茶。

「買い物もしていなかったので、すこし手を抜いた感じになってしまいました。お口に合わないかもしれませんが……」

「どこで手を抜いたのか全然わからないって。特にパスタとか、やたら美う味まいし」

　リリアナの断りが、護堂には意味不明だった。

　パスタにまとわりつくボロネーゼソースの味がかなり深い。リリアナはこれをさっと一〇分程度で作っていたので、レトルトかとも思っていたのだが。

　じっくり長時間煮こんだ、手作りの味だった。

「実は、そのパスタがいちばん手抜きしています。昨日の夕食だったビーフシチューの味を変えたり挽ひき肉にくを加えたりして、それらしく整えただけなので」

「って、ボロネーゼじゃなかったんだな……」

　リリアナの手抜き申告に、護堂はむしろ感心した。

　これが料理のセンスというものか。残り物に手を加えて、新しい味にしてしまう。手間も作業時間も簡略化する。なんとも合理的だ。

　十代男子らしく、護堂はガツガツと手料理を口に詰めこんでいった。

　純粋に美味だったのと、作ってくれたリリアナと差し向かいで食べるのが照れくさく、どうにかしてごまかしたかったからである。

　食後、食器くらい洗わせろと護堂は主張したが、無視された。

　ひとりで食器洗いもすませたリリアナといっしょに、護堂は釈しゃく然ぜんとしないままリビングに戻ったのだが。例の『豚』が地図上の一点で止まり、ひっくり返っていた。

　腹を天てん井じようにさらしながら、ぶるぶる震えている。

「どうやら霊気の高まりを感じ取ったようですね」

　自らの使い魔が示した卦けを見て、リリアナがおごそかに言った。

　その場所。次に『赤くないサンタクロース』が生まれるかもしれない場所。

　そこはお台だい場ば――クリスマスも近い今、カップルでにぎわっていることは疑いようのないデートスポットだった。

「では、すぐに向かってみましょう」

　リリアナに言われて、護堂はうなだれた。当然そうなるよな、と。

灰色のサンタの謎を追うため、とびきり魅力的な女子とともにデートスポットへ。それもふたりきりで。この状況が妙に気恥ずかしかった。

4

お台だい場ばまではＪＲとモノレールで移動。

現地に着いたら『豚ぶた』の使い魔を放し、試ためしに怪異の匂においを追いかけさせてみる。

移動の車内で、護ご堂どうとリリアナはこのように計画を立てた。

だが、事態はふたりが考えていた以上の早さで展開し、そして収束してしまった。

というのも、お台場に乗りこんだ魔王と女騎士の目の前で、騒動の張本人らしき者が突然の死を迎えたからである。

いわずとしれた海辺の埋め立て地。人気のデート＆レジャースポット。

お台場海浜公園の駅でモノレールを降り、護堂とリリアナはにぎやかな界かい隈わいをめざした。

やはり若い男女の来客が目立つ、ショッピングモール。

そこではすでに、例の怪異が起きていた。サンタの『灰色化』。その場に存在する全てのサンタクロースの意い匠しようが灰色に染まり、赤の華はなやかさが消失している。

個々の『灰色化』をいちいち確認する気など、すでにない。

護堂が目くばせすると、リリアナはブタのぬいぐるみをポケットから取り出した。例の使い魔——大地の獣けものだという『豚』の

霊だ。

　女主人はぬいぐるみを地面に下ろすと、言こと霊だまをささやきかける。

「貪どん欲よくなる獣よ、あやかしの匂いを追え！」

　ブタがすべるように地面を移動していく。

　地図上を動いていたときとちがい、ネズミのようにすばやい。一方、リリアナの方はすぐに目をつぶり、『魔女の目』で視覚を飛ばす。『目』でブタのあとを追いかけるためだ。

　だが、護堂はまだ核心的な情報を得られるとは思っていなかった。

　この事件、すぐに決着がつくほどイージーでもないだろうと。しかし――

「草くさ薙なぎ護堂……妙な輩やからを見つけました」

　リリアナが報告してくれた。そして一〇分後。

　お台場の人ごみのなかに〝それ〟が入りこんでいるのを護堂は見み出いだした。怪異の匂いを追うブタと、リリアナの『目』が導みちびいてくれた成果だった。

　行き交う人々――ただの人間たちは、誰も〝それ〟に気づかない。

　怪異と相対しながら、正常に認識できないのだ。只ただ人びとにとってはよくあることで、そこは驚くに値あたいしない。だが、護堂はとまどった。

　人ごみのなかを通行人のように歩く〝それ〟。

　周囲の人間たちに、その存在をまったく気づかれていない〝それ〟。

　一応、人型をしていた。二本の足で歩き、二本の手を持ち、頭と胴がある。だが、その体は毛布のような灰色のボロ布ですっぽり被おおわれていて、素肌も顔も一切見えなかった。

「あれは何だ？　神様でも神獣でもないようだけど」

「魔術師でもないですし、あらゆる意味で人間の範はん疇ちゅうには入らないでしょう。もしかすると妖精か、精霊の類たぐいかもしれません」

　リリアナのささやきに、護堂は目をみはった。

「神様以外に、そんな連中まで地上をうろついていたのかよ!?」

「地上にはおりません。彼らは基本的にアストラル界の住人で、ごく稀まれにこちらへやってくることがあるという程度で」

　徘はい徊かいする灰色の者を凝ぎよう視ししながら、リリアナは語った。

「ただロスのジョン・プルートー・スミスさまは、妖精王オーベロンから簒さん奪だつした権能でアストラル界へ移動したり、あちらの住人を一時的に呼びよせたりできるらしいですが」

「そういえば、あいつどこかでそんなことをしてたな……」

　北米のカンピオーネの名を聞いて、護堂は眉まゆをひそめた。

　あの男とはどこで出会い、いっしょに何をしたのだったか？

「とにかく、灰色のヤツと接触してみるか。話——できるといいんだけどな」

　相手が神であれば、どんな外見であれ会話はたいてい成立する。

　まあ、意思の疎通コミュニケーションができるかは微妙なときもあるが……。しかし、あの灰色の者。あれは会話自体が可能かどうかもあやしく思えた。

　やがて、灰色の者は人ごみから離れていった。

　人ひと気けのない海沿いの道を歩いていく。このままちがう土地へとさまよっていくつもりだろうか？　その前にと、護堂とリリアナは灰色の者に近づいていった。

　すると、向こうも足を止める。ふたりを待ち受ける格好だ。

意外と平和的にコンタクトできるか――護堂が期待したときだった。

追跡対象は予想外の行動に出た。おもむろに右手をあげ、手のひらを開く。手刀の形にしたのである。次の瞬間だった。

灰色の者は自みずからの手刀を自らの頸けい部ぶに当て――自分の手で自分の頸くびを刎はねたのである。

頭にあたる部分のボロ布が宙を飛ぶ。

「って、まさか自殺!?」

あわてて足を速めた。ボロをまとった灰色の者は前のめりに倒れこんでいく。

屍しかばね（？）に取りすがって、護堂はすぐにボロ布をはぎ取った。なかには形だけは人間そっくりの体があった。

逞たくましい青年のような筋肉質の肉体。ただし黒い。

まるで炭で造られたように黒く、質感も黒こく炭たんのようだった。しかも、空気にふれた黒炭の肉体はボロボロと砂の城さながらに崩れ、海風に乗って空へと飛散していく。

「こちらの頭も崩れてしまいました……」

一方、灰色の者が自ら刎ねた頸部を確認して、リリアナが言った。

彼女もボロ布をはだけて、その中身――頭部や顔があるべき部位を見たのだ。

「本当に何だったんだ、こいつは……」

自じ刎ふんを遂とげた、大地の霊らしき謎の者。

その死に様に立ち合って、護堂はただ首をかしげるしかなかった。

「人でも神でもない、サンタ嫌いの謎存在が自殺――。解釈に苦し

む事件ですねェ」

　携帯電話で呼びよせた甘あま粕かすは、しみじみとつぶやいた。

　さっきの自殺現場には灰色のボロ布と、わずかな黒い灰が落ちている。

「ふつうに考えたらサンタの『灰色化』事件はこれで収束するはず……ではあるのですが。まあ、すこし様子を見てましょう。とにかくおふたりとも、ご協力に大感謝です」

「……微妙にうれしそうだな、甘粕冬とう馬ま？」

「うれしいですとも。私、仕事でラクできるのがいちばんの幸せですから」

　ちょっと皮肉っぽいリリアナの問いかけに、剽ひょうげて答える甘粕だった。

　ともあれ、後始末は正せい史し編へん纂さん委員会がやってくれるという。護堂とリリアナがこの場でやるべきことはもうない。暇ひまになってしまった。

　ひとまずショッピングモールの方にもどってきた。

「ちょっと待っててくれ」

　リリアナに断ってから、護堂はクレープの店に向かった。

　買いこんだのは、フランベしたリンゴをクリームと合わせたものと、塩バターキャラメルのクリームにオレンジソースを合わせたもの。

　真冬にしてはあたたかい日だが、さすがにここは海辺の街。

　海から吹く風のせいで結構冷える。アイス類を注文するのはやめておいた。

「リリアナはどっちがいい？　好きなのを選んでくれ」

「どういうおつもりですか？　今回ご協力したのは、あくまでカンピオーネに要請されたからです。リリアナ・クラニチャールにはあ

なたの禄ろくを食はむつもりなどございませんが」

　試すような顔で女騎士は言う。だが、護堂は落ち着いて切り返した。

「何を言ってんだ。俺に王様の自覚がないって言ってるのはリリアナだろう？　だから、ちょっと心を入れ替えたんだ」

「と、おっしゃいますと？」

「功績をあげた騎士に褒ほう美びを取らせるのは王様のつとめ。遠慮なく受け取ってくれ」

　そう言って、護堂はふたつのクレープを差し出した。

　本当は探たん索さくにつきあってくれたこと、さっきの昼食のことなど、いろいろひっくるめてのお礼代わりであったが、そこはくだくだ言わない。

　ちょっと冗談めかしてうながすと、リリアナもすこし芝居がかった感じで一礼する。

「そうでしたか。では、騎士として遠慮なく」

　と、リンゴのクレープの方を受け取った。

　そのまま、ふたりそろって甘いクレープに舌した鼓つづみを打つ。決して甘党ではない護堂だが、べつにスイーツは嫌いではない。

　だが意外にも、今回は甘味をじっくり味わうことができなかった。

　隣にいる連れのせいである。銀髪の白人少女。それも妖精めいた雰ふん囲い気きと美び貌ぼうで、ことのほか注目を集めてしまう娘。

　若い女性の多いお台場でも、格段に目立ってしまう。

　食べている途中で気づいたが、道ゆく人たちの注目を自然と集めるのだ。

もっとも、リリアナの方に視線を気にする様子はない。ふつうに自然体だ。おそらく、注目を浴びるのは『自分が外人だから』程度にしか思っていないのだろう。

このあたりが、己おのれの美貌に意識的なエリカと大きくちがうところだった。

護堂は落ち着かない気分を持てあました。

なにしろ『彼女の隣にいる＝彼氏』と見なされるわけで……。リリアナの相方にふさわしい容姿・器量の持ち主だと認識される自信など、草薙護堂が持っているはずもない。

なので食べ終えたら、こう言おうかと考える。

『じゃあ、俺はそろそろ行くよ。今日は本当にありがとうな――』とか。

そりゃもちろん、ご近所同士なんだから同じ電車で帰ってもかまわないだろう。いっしょにいる時間を延長するための理由はいくらでも思いつけるのだが……。

そのとき、一組のカップルが目の前を通りすぎていった。

若い大学生風の男女。女の子は大きなクマのぬいぐるみをかかえていた。両手でかかえなければ持ちきれないサイズで、しかも結構かわいい。

オモチャ屋でもあって、そこで買ったのだろうか？

と思い、ふとカップルが出てきた店を見たら、大きなゲームセンターだった。

「……前に入ったのと、同じような施設ですね」

リリアナがぼそりと言った。護堂はちょうどクレープを食べ終えたところだった。

「よくある系列店のゲーセンだからな。前のところもそうだったし」

「つまり、狩りの機会があるのも同じだと……。それにさきほど見

たクマ、なかなかの大物でした。わたしの寝室にはいないタイプの子です……」

　何かを思案するようなつぶやき。

　リリアナはぬいぐるみ類を『この子』とか呼ぶタイプだったのだなーとうなずきつつ、護堂はわざと熱意にとぼしい口調で言った。

「クレーンゲームの景品かはわからないぞ。もしそうだとしても、ああいうでかいのは相当取りにくい設定にしてそうだ」

　あの業界の内部事情を護堂はよく知らないが、ありそうな話だ。

「それこそ店で買うのと変わらない額を投資しても、ダメかもしれないし。今日のところはおとなしく帰ってもいいんじゃないか」

「どんな状況でも勝利を求める方らしくない、消極的なご意見ですね」

　やや皮肉っぽくリリアナは言った。

　しかもコホンとせき払い。それからちょっと恥ずかしそうに切り出す。

「ああいう場所での作法や必勝法には、残念ですがリリアナ・クラニチャールは明るくありません。……然しかるべき見識を持つ先せん達だつに導みちびいてほしいと思うのですが」

　やたらと大おお仰ぎような言葉ばかりだが、つまり。

『ゲーセンに寄ってかない？』と誘われて、護堂は躊ちゅう躇ちょした。

「俺だって見識とかあるって言えるほど、ああいう場所には行かないぞ。それこそ、うちのクラスの名な波なみとか反そり町まちの方がだいぶくわしそうだ」

　アーケードゲーム、コンシューマーゲーム、ＰＣゲームの差異。

　そんなことすら、護堂はぼんやりとしかわかっていない。だから、これは何ら無理のない断り方、ごく自然な話の流れであるはずだ。たぶん。

だが、この程度の牽けん制せいでリリアナは怯ひるむことなく、くすりと微笑ほほえんで言った。

「一〇分くらい、いいではないですか。それにわたしの報酬は、クレープ一枚で支払えるほど安いものではありませんよ？」

しかし結局、一〇分の予定は四〇分にのびた。また、その釣ちよう果かときたら――。

「でかいのはやっぱり取れなかったな」

ゲームセンターを出たところで、護堂は言った。

この店舗には、例のクマを景品に用意したクレーンゲームがなんと四台もあった。しかも、それぞれ大きさがちがう。携帯ストラップでもある極小サイズ、手のひらに乗る小サイズ、ラグビーボールほどの中サイズ。

そして、さっきカップルが持っていた特大サイズであった。

いちばんの大物がもちろんリリアナの狙ねらう獲え物もの。しかし、キャッチャーのアームは力が異様に弱く、どうにもつかめなかった。

護堂も助っ人に駆り出されたが、まったくの役立たず。

あのカップル、よくも上う手まいこと手に入れたなと感心させられた。

さんざん小銭と時間を使ったあとで、ようやくふたりはあきらめた。せめてゆきがけの駄だ賃ちんにと、かわりにゲットしたのは――

「まあ、男の子と女の子をペアで捕ほ獲かくできたことですし、よしとしましょう」

店内では結構熱くなっていたくせに、今はすまし顔のリリアナが言う。

彼女の手にはクマの携帯ストラップがふたつある。このクマ、実

は男の子と女の子の二種類があり、微妙に造形がちがった。女の子はリボン付きで顔もやさしい。

　ちなみに護堂が無ぶ粋すいに『オス・メス』と言ったら、同伴者に訂正を強しいられたのだが。

「……そうだ。こちらはあなたに差しあげましょう」

　不意にリリアナが携帯ストラップを差し出す。

　オス、ではなく男の子クマの方だ。護堂は首をかしげた。

「いいのか？　せっかくだから男の子と女の子をカップルでそろえたいって、結構がんばってたじゃないか」

「ええ。男女の一対は連理の枝、比ひ翼よくの鳥であるべき。引き裂くべきではないでしょう」

　堅い言葉遣づかいでリリアナが信念を語る。

「ですが、これはあなたと分かち合いたいとも思います。なぜかはわかりませんが、不思議とそうしたくなったのです。……今日の記念にいかがですか？」

　フッと女騎士の顔がほころび、唇を微笑があたたかくいろどる。

　そのせいか、護堂はすんなりと男の子クマを受け取った。正直、理由は自分でもよくわからない。とにかく大事にしてみようと思う。

　ただ、妙にファンシーな小物なので、なんとも照れくさくはあった。

「俺の持ち物としてはちょっとアレだけど、受け取らせてもらうよ。あとでうちの妹にやったりとかは……うん、たぶんしないと思う」

「差しあげた品をどうあつかうかは自由ですが……。そうされた場合、草薙護堂という方についての考えをあらためなくてはいけませんね」

　リリアナにため息をつかれながら、ならんで駅に向かう。

結局、根津に着くまでの間、ずっといっしょだった。



第３章　媛巫女に願いを

1

　お台だい場ばを訪ねた日の夜、護ご堂どうはなんとなく教科書を開いてみた。

　すでに二学期の期末テストは終了している。だが、この試験で草くさ薙なぎ護堂の点数は中の上ランクだった今までよりもやや下方向に推すい移いしていた。

　まあ、神様がらみの事件に追われて、何かといそがしい身の上だ。

　準備不足になりやすいと言いわけはできる。だが、神殺しとか魔王である前に高校生である以上、やはり勉学にも励はげんでおきたい。

　特に城じよう楠なん学がく院いんでは、冬休み明けの一月に実力テストなるイベントが催もよおされる。

　というわけで、護堂は持ち前のまじめさと律りち儀ぎさを発揮し、自室の書き物机に教科書とノートを広げていたのだが。

「あれ？　そういや期末試験の前って、どんな神様と戦ってたっけ？」

　ふと、物忘れしている自分に気づいたりもした。

　その翌日。冬休み前の半日授業のあと、護堂は図書館に寄った。

　静かな場所で二学期の内容を復習し、飽あきたらヒマつぶしに本

を物色してみたり。とはいえ、無限に時間があるわけではない。暗くなる前に帰ることにした。

　——実は昨日から、食事当番なのだ。

　祖父不在の草薙家では、静しず花かと護堂が何日か置きに交代で食事当番をしている。

　昼は各自勝手に調達。朝と夜を作る。帰宅した護堂は台所へ向かった。

（尚、この当番表に母の名は当然のように入ってない。夕食時に帰ってくる方が稀まれだから等の理由はある。しかし、いちばんの要因は『母だから』であった）

　今日は鍋なべにするつもりだった。たっぷりの野菜と豚肉、そしてキムチを豪快（適当ともいう）に投入するのだ。ちなみに、昨夜はちゃんこ風の寄せ鍋だった。

　材料を切って下準備して、炊飯器のタイマーもセット。

　一段落ついたところで脇わきに置いた携帯電話をふと見たら、新着メールが来ていた。

「誰からだ？」

　何気なく確認して、護堂は首をかしげた。意味不明だったからだ。

　差出人の名はなしで、送信元はフリーのメールアドレス。本文はこうだった。

『中間報告。例の件、復活は冬とう至じの日。気をつけられたし。鷹たかより』

　以上である。一応は警告らしいが、短いうえに簡かん潔けつすぎる。

　危険な敵地に潜入している工作員が、監視の目をかいくぐって送る報告書のようだ。

「冬至って、あれだよな？　一年でいちばん夜の長い」

　一年でいちばん夜の長い日。つまり、地球が太陽から最も遠ざかる日。

　それが冬至だ。一二月の二一・二二日あたりが例年、該当日となる。冬至の日にはゆず湯に入るのが日本の伝統。カボチャを食べたりもする。

　今年の冬至は二二日だったはず。ちなみに今日は一二月一九日。

　復活の日とやらは三日後になるわけだが……。

「でも鷹って誰だ？　それに復活か」

　護堂は考えこんだ。復活――何のことだったろう？

　記憶の巣をつついてみたが、出てくるものはなかった。思い出せないことは重要ではないのだろう。忘れてもいいのでは？

「でも、サンタのときだって、調べてもらったら変なヤツが見つかったもんな」

　すぐに思い直す。しかし、誰を頼りにすればいいのか？

　またリリアナか、それとも甘あま粕かすか。きっとどちらでもダメだろう。曖あい昧まいなキーワードがひとつあるだけなのだ。千せん里り眼がんの持ち主でもなければ、答えなど出せるはずない……。

　いや待て。千里眼の主なら、ごく身近にひとりいる！

　静花とふたりでの夕食後、片づけを終えて護堂は自室にもどった。

　あいかわらず殺風景な部屋だった。六畳じようの和室に書き物机と座ざ椅い子す、和だんすと本棚。ここに収められない持ち物は、全すべて押し入れにしまってある。

　だから、護堂の部屋はひどくすっきりとしていた。

　余計な品は置いてない。生活感はあるのに、殺風景なほど物がな

い。

　昔から物を貯ためこまない性格なので、自然とこうなった。よほど欲しいと思うか、絶対に必要という品物以外は、手もとになくとも気にしない性分なのだ。

　――大量の物にかこまれていると、逆にわずらわしく思えてくる。

　――必要最小限の物をいくつか持っているだけでいい。その方が身軽でいられる。フットワーク軽く、あちこちへ動ける。

　この殺風景さを、護堂はむしろ気に入っていたのだが。

「俺の部屋、こんなにさびしかったかな？」

　物はなくとも、最近はべつの何かで満たされ、にぎやかだったような――。

　唐とう突とつにそんな気がして、護堂は物足りなさを覚えた。

　自分にはどうしても必要なものがいくつかあり、今はそれが失われている……ように思えてしまう。名めい状じようしがたい喪そう失しつ感と寂せき寥りよう感があった。

「やっぱり、何か噛かみ合ってない感じだ……。あの連中とも上う手まくいってないし」

　身近な女子たちとの人間関係もふくめ、懸けん案あん事項は多かった。

　リリアナとの距離は結構縮ちぢまった気もする。だが、継続させなければ意味がない。

　エリカとの仲はあいかわらず。しかも、あの女はあまり学校に来ないうえ、あのとおりの曲くせ者ものだ。そして祐ゆ理り――。

　千里眼に比すべき、霊視能力の持ち主。

　この分野ではリリアナも、あのプリンセス・アリスさえも超えるという。

「今の俺には、たぶん万ま里り谷やの力が必要なんだろうけど」

　深しん窓そうの大やまと和なでし撫子こである祐理に、どうやって協力をお願いしよう？

　声をかけても遠慮され、長く話しこめない媛ひめ巫み女こなのだ。

「あれ？　そうだったっけ？」

　違和感があった。たしかに祐理はお嬢さま。おしとやかだし慎つつしみ深い。ひかえめだし上品だ。男子と接するときはかなり消極的で、進んで接点を持とうとしない。

　だが、もっとべつの一面もあったような。

　そう。おだやかな衆しゆ生じよう救済の観かん音のん菩ぼ薩さつが憤ふん怒ぬ相そうの不ふ動どう明みよう王おうに転身するかのように。

「試してみる……か？」

　それは邪じや念ねんというべき、不ふ謹きん慎しんな思いつきだった。

　護堂は頭を振って、そのアイデアを捨てようとした。いくらなんでも冗談がすぎる。カンピオーネである自分がやったら洒落しやれにならない。

　だが、これがきっかけで祐理との関係が変化するかもしれない……。

　二分だけ悩んだあと、護堂は携帯電話を取り出した。短いメールを作成し、送信。早ければ明日の朝にはリアクションがありそうだ。

「リスクを冒おかさなければ前進はないって、どこの監督の言葉だっけ？」

　非常時には非常の行動を取るべし。

　あまり大っぴらには公言できない信念に基もとづいて、虎こ穴け

つに踏みこむ護堂であった。

　一夜明けて、一二月の二〇日がはじまる。

　この朝もひきつづき、草薙家の食事当番は護堂だった。

　まず味み噌そ汁しるという名の『ダシ入り味噌のお湯溶きスープ、ジャガイモも入れて』をでっちあげた。無む洗せん米まいと炊飯器で『地球と自分にやさしいエコ炊飯』を最低限の労力で完かん遂すい。キュウリとナスも浅漬けの素もとに一五分ほど漬けてある。

「あとは蒸むし野菜でも作ってみよう」

「切った野菜をレンジでチンするシリコンの蒸し器に入れて五分待つだけなのに、料理でもするみたいに言うのはどうかと思うよ、お兄ちゃん」

「いいじゃないか。かんたんなのに栄養もばっちりなんだぞ」

　妹と心あたたまる会話をしながら、護堂は冷蔵庫を開ける。

　納豆と生卵を出して、味あじ海の苔りといっしょに居間のテーブルへ運んだ。あとはこれらをバイキング形式で取り、兄妹それぞれのおかずとすればいい。

　……兄のズボラ飯はあっても、クッキング・ブラザーは不在の草薙家だった。

「お兄ちゃん、たまに作るときはそこそこ料理らしいこともするのに、毎日になると途端に手を抜きだすよね」

「いや、でも料理上手い人だって結構そんな感じだぞ」

「上手い人は手を抜いても、ちゃんと料理らしい料理に仕上げられるの。お兄ちゃんの場合、手を抜いたら料理以前のやっつけ仕事になるでしょ！」

　前に見たリリアナの手て際ぎわを思い出して言ったら、妹からの逆襲。

ピンポーンと玄関のチャイムが鳴ったのは、この直後であった。まさか！

「こんなに早く、誰だろ？」

静しず花かが腰を上げ、玄関に向かう。護堂もあとに続いた。もしかしたらという疑念があったからだ。はたして静花が玄関の引き戸を開けると、制服姿の麗うるわしき女子が立っていた。

「ま、万里谷さん!?」

そういえば、妹と彼女は茶道部で先輩後輩の仲だった。

万里谷祐理はしとやかに頭を下げてから、びっくりする後輩に告げた。

「朝早くからお邪魔して、申し訳ありません。実はお兄さまと取りいそぎお話ししたいことがあり、ぶしつけを承知でうかがったのです」

「お兄さま……って、うちの兄ですか!?」

「はい。よろしいでしょうか、草薙さん？　おつきあいいただけますか？」

静花のうしろに立つ草薙護堂をまっすぐ見つめながら。

万里谷祐理は凛りん然ぜんたる厳しい面おも差ざしで罪人を裁く、高貴な姫君のように言った。

神殺しの魔王を相手に、この厳しさと迫力。いつものひかえめなお嬢さまぶりとは大ちがいだ。護堂は自分の勘かんが正しかったことを知った。

本来ひかえめな祐理を、勇ゆう敢かんで能動的な女の子に変えるための引き金。

自分はそれを引くことに成功したのだ！

だが、胸に広がる『やっちまった』感はどうだろう？　虎こ児じを得るため虎穴に入ったのはいいが、調子に乗って虎とらの尾まで踏んづけた……みたいな。

　自らの手で状況を動かそうとした代だい償しようは、思いのほか大きかった気がする。

　が、こうなったらやるしかない。護堂は覚悟して、姫の召し出しに応じることにした。

2

　静しず花かといっしょの食事は中止。自分の朝食は夜に食べることにする。

　幸い、着がえはもうすませてある。学ランの上着とコートを身につけるだけ。通学用のカバンを持つと、護ご堂どうはすぐに家を出た。

　静花の困惑と怒り（なぜ？）が渾こん然ぜん一いつ体たいとなった声を聞きながら――。

「おおお兄ちゃんっ。よりにもよって、あの万ま里り谷やさんが家にまで訪ねてくるなんて、どういうことっ!?　まさか、おじいちゃんから受け継いだ血がついに覚かく醒せいしたとでもいうの!?　あとでくわしく説明してよね！」

　いや、きちんと説明できることではない。なんとかしてごまかそう。

　不届きな決心をする兄は、玄関の外で待っていてくれた媛ひめ巫み女こに言った。

「悪い。待たせたな」

「私が勝手にお邪じや魔まして、無理を言ったんです。これくらい何でもありません」

　丁てい寧ねいに答えてから、祐理は歩きだした。護堂もその隣を歩く。

　それにしても、今の言葉。いつものやわらかな丁寧さで言ってく

れたなら、たぶん護堂の心にはじんわりとしたぬくもりが広がり、隣にいる少女への慕したわしさとまぶしさで気恥ずかしくなったことだろう。

　だが、今の祐理の物言いには、冬の女王を思わせる威い厳げんがあった。

　この威厳がさらに威力を増すのは、ちょうど根ね津づ三丁目の商店街を抜けた頃だった。

「それで草くさ薙なぎさん。昨日のおたよりはどういうことでしょう？」

　いきなり問われて、護堂は首をすくめた。

　まさか、諸事情があってチャレンジ精神を刺激されたとは言えない。

「いや、ちょっと思うところがあったというか……」

「あなたのお立場で、いくらなんでもこれはありません！」

　祐理が突き出したのは彼女の携帯電話だった。昨夜送ったメールが表示されている。

　Title：相談がある

『今日、ある人から相談された。あぶない神様に狙ねらわれて困っているらしい。

　俺は力になりたくて「なんなら、その神様シメてやりますよ」と言ってやった。そうしたら神様のやつ、俺に喧けん嘩かを売ってきたから、ちょっと悩んでる。

　半殺しにしたあと、東京湾と駿する河が湾のどっちに沈めてやるべきだろう？』

　祐理の優等生気質、そして媛巫女としての使命感を刺激してみた

らどうか？

　それが護堂の狙ねらいだった。だから、彼女が遺い憾かんの意を示しそうな頭の悪い文章をつづってみたら、一発だった。やはり万里谷祐理はやさしいだけの女の子ではなかった。

　芯しんが強くて、高貴で、説教癖へきがあって、口うるさい。

　彼女の剣幕にたじろぎながらも、護堂は深い充足感を味わっていた。やっぱり、こうでなくちゃ万里谷じゃないよな、と。

「あなたは『まつろわぬ神』をわざわざ日本に呼びよせ、また破壊の限りを尽くすおつもりなのですか!?　周囲への配慮が足らなさすぎです！」

「ま、待ってくれ、万里谷」

　護堂はたじたじになりながら、言葉を返した。

「メールに書いたこと、全部ウソなんだ」

「うそ？」

「あ、ああ。どうしてもそうする必要があって、あえてそうしたというか」

　すると、祐理は唐とう突とつに微笑ほほえんだ。すごく上品なのに、見た者が底冷えのする恐怖を覚えそうな微笑。美しき姫君が遺憾の意を表明するときの顔だ。

「そのようなこと、どうしてなさったのですか？」

「いや、ほら。万里谷とはいつも、じっくり話できないだろ？　こうしたら、おたがい肚はらを割って話をするきっかけになるんじゃないかと」

　変な言いわけをしても仕方ない。直球勝負で頭を下げよう。

　覚悟を決めた護堂は誠心誠意、本音でぶつかってみることにした。

「ふつうに声をかけても、万里谷は俺のことを避けるだろうと思っ

てさ」

「そうですか。私は今、草薙さんのように無責任で虚きよ言げん癖へきのある方とは、以後永遠に縁を切らせていただくべきではないかと検討中です」

　媛巫女の冷たい微笑と宣告が、さらにプレッシャーをあおる。

　だが、追いつめられた護堂は「万里谷」と呼んで、大きく一歩を踏み出した。

　祐理との距離をぐっと詰め、彼女の目をまっすぐ見つめる。今まで相手の美しさと女らしさに気き後おくれして、どうしてもできなかったことだ。

「く、草薙さん⁉」

「ウソをついたことは何度でもあやまるよ。でも、これだけは聞いてほしいんだ」

　できるかぎりの誠意を込めて、護堂は言った。

「勝手な希望かもしれないけどさ。万里谷にはうやうやしいけど他人行儀に敬うやまわれるより、俺のことを遠慮なく怒鳴りつけたり、たしなめたりしてほしいって思うんだ。だから、悪いとは思ったんだけど、こんなことをしちまった」

「…………」

「もしよかったらだけど。これからも俺がまずいことをしたら、今みたいな調子で叱しかりとばしてほしいんだ。たぶん、俺とかサルバトーレ・ドニのバカみたいな人間には、そういう誰かが必要なんだよ」

　いくらカンピオーネがその権けん能のうゆえに横おう暴ぼうを許される魔王であっても。

　誰はばかることなく自由を謳おう歌かするような生き方が、人間としてまっとうなはずない。

「で、その誰かを選ばせてもらえるなら、俺は万里谷にそうしてほしいと思うんだ。もちろん、万里谷がイヤなら強制とかできないけ

ど……どうかな？」

「草薙さ――護堂さん……」

　ふと。ごく自然に護堂の呼び方をあらためた、祐理のささやき。

　不思議だった。唐突な変化だったのに、護堂には新しい呼びかけがひどくしっくりきた。耳になじむというか、聞き慣れているというか。

　そして祐理は無言のまま、こくりとうなずいてくれた。

　よほど恥ずかしいことがあるのか、いつのまにか羞しゆう恥ちで首筋まで真っ赤にしている。

　ここで護堂はようやく気づいた。祐理との距離が近すぎる。
ちょっと顔を近づければキスできる近さ。まるで抱ほう擁ようを交わす恋人同士ではないか。

　しかし、ともあれ祐理は承諾のうなずきで応えてくれた。

　そのことを護堂はよろこび、そして麗うるわしき媛巫女との近さにどぎまぎして離れようとしたとき、唐突にささやかれた。

「それが王の仰おおせ――いえ、護堂さんのお望みなら、私もできるかぎり応えたいと思います。でも、それはそれとして、申し上げたいことが」

　護堂の背を冷や汗が伝う。危険の兆ちよう候こうを察知したのだ。

　案の定、祐理はいきなりため息をこぼした。そして、上うわ目め遣づかいの悲しい瞳ひとみで護堂を見つめ、さびしげにつぶやいた。

「私、護堂さんにうそをつかれるとは思っていませんでした」

「え!?」

「どんなときでも護堂さんは私に誠意と真心を尽くしてくださる方と、なぜか勝手に思いこんでおりました。だからでしょうか。冷静に考えればおかしなところばかりのおたよりでしたのに、無条件に

信じこんでしまいました」

　祐理のささやきは糾きゅう弾だんではなく、慨がい嘆たんであった。

　その静かさ・切なさが逆に護堂の罪悪感をめいっぱい刺激する。

「そ、それについては、重ねがさね申し訳ないというか……」

「信用を築くには長い年月が必要だといいます。でも、失うのは一瞬でいいとも……。護堂さんが今回されたことは、それと同じようにも思えます」

「お、俺にできる謝罪であれば、土ど下げ座ざでも何でもさせてもらうから！」

　このいたたまれなさ、叱られるよりもつらい。

　痛感した護堂は、思わず最大級の謝罪を申し出た。そのまま伝でん家かの宝ほう刀とうを抜くべく、膝ひざを道路につける。すると祐理はさびしげにフッと微笑んで、

「そこまでしていただかなくとも結構です。私はただ、護堂さんに今の気持ちをお伝えしたかっただけですから……」

　と、待ったをかける。中途半端に腰を落としたまま、護堂は思った。

　嗚あ呼あ。二度と万里谷にはウソをつくまいと——。しかも。

「さ、澤さわさん、今の聞いた……!?　万里谷さんと……五組の草薙くん？　俺のそばにいてくれとかウソをつかれたとか、ふたりで言ってたよね。これってまさか……」

「もちろん、宮みや間まが思ったとおりでしょうね。まるで離婚の危機を迎え、それを乗り越えようとする夫婦のような会話。その意味するところは……」

「草薙くん、万里谷さんとおつきあいしてて、しかも浮気までしたんだ……!?」

「あんな男子がうちの学校にもいたとはね。五組の草薙、覚えてお

くわ」

　胡う乱ろんなひそひそ話が断片的に聞こえてくる。

　ちらりと見たら、ちょっと離れた場所に女生徒がふたりいた。たしか祐理と同じクラスで、メガネをかけた方が澤さん、小こ柄がらな方が宮間さんだ。

　ここはそういえば天下の往来、しかも城じよう楠なん学がく院いんへ続く通学路でもあった。

　澤さん＆宮間さん以外にも、こちらを遠巻きに見つめる学院生は幾人もいる！　その危機的状況に気づいて、思わず護堂は叫んだ。

「万里谷！　向こうに行こう！」

「は、はい！」

　いつのまにか根ね津づ神社の前まで歩いてきていた。あわてて神社の境けい内だいを避難場所に選び、祐理とともに駆けこむ護堂であった。

3

　根ね津づ神社の広い境けい内だいを、護ご堂どうと祐ゆ理りは連れ立って歩く。

　さっきの一幕から五分ほど経たっていたが、いつのまにかふたりの間の空気は和なごみ、妙に居い心ごこ地ちいいものになっていた。

　護堂はひそかに首をかしげた。さっき自分のウソを巡めぐって揉もめたばかりだ。

　しかも昨日の朝と同じく、護堂と祐理はたいして話をしていないのに。だが、ふとした拍ひよう子しに目が合えば、祐理は初うい々ういしくうつむいたり、ひかえめに微笑ほほえんだりしてくれる。護堂の方も無理に世間話をしようとか考えず、自然体でいられた。

　今までのぎくしゃくぶりがウソのように、ふたりでいることになじんでいた。

「護堂さん。実は先ほど気づいたのですが」

　ぶらぶら歩いていると、制服姿の媛ひめ巫み女こが唐とう突とつに言った。

「私……いえ私たちは、とても大切なことを忘れている気がしませんか？」

「万里谷もか!?」

　護堂は驚いた。まさか、祐理まで自分と同じとは。

「最近、俺も大きな物忘れしてるみたいで落ち着かないんだ。クリスマスのあたりに予定があったような気がしてさ」

「クリスマス、ですか？」

「ああ。あと知らない相手から、何かの復活が冬とう至じの日だから気をつけろとかメールが来たり。わからないことばかりでもやもやするよ」

　あのメールの送信元には、相手の素す性じようを訊たずねる旨むねしたためて返信ずみだ。だが、レスポンスは今のところない。答える気がないのだろうか。

　それにしても——祐理と話しながら護堂は思う。こういうとき、草くさ薙なぎ護堂の足りない部分を埋めてくれる何かがあったように感じて仕方がない。

　今の祐理のように。そして、ほかの誰かたちのように——？

　背中をあずけ、肩をならべ、ケンカもし、意見もされ、諫かん言げんもされ、困惑させられ、振りまわされ、いっしょに遊びもするし、いざとなったらみごとに連携もできる仲間たち……？

　定かでない記憶を揺り起こそうと、必死に考える。

　だがダメだ。まだダメだ。もうすこしきっかけが何かあれば……！

そして護堂は、祐理の声による託たく宣せんを聞いた。

「冬至節は古来、豊ほう穣じょうの神を迎える大祭の時。民たみは秋の実りに感謝し、冬至の到来に浮かれ、春のはじまりを言こと祝ほぐもの。御おん身みも力をたくわえあそばしませ」

——⁉　護堂はとっさに隣を見る。

祐理はきょとんとした顔で、こちらを見返した。

「どうかしましたか、護堂さん？」

今のは、やはり霊視のお告げか。さすがだった。

意識に残らずとも、折にふれて有益な助言を授けてくれるほどの異能。わけのわからない今の状況も、彼女の力があれば——。

進むべき道を照らしてくれる光の出現に、護堂は深くうなずく。

止まっていた時計の針が、カタリと大きく動いたような気がした。

結局、護堂と祐理は共に学校まで歩き、登校をすませた。

校内をいっしょに歩くのはさすがに難易度が高い。ふたりは玄関口で上うわ履ばきにはきかえたところで別れ、それぞれの教室に向かった。

明日はもう終業式。明後日あさつての二二日からは冬休みである。

そのせいか、校内は浮うわついた雰ふん囲い気きだった。すでに授業も終了していて、今日は全校生徒による校内の清掃——つまり大掃除のみ。その影響もあるのだろう。

ちなみに、この日はエリカも来ていた。

理科室の掃除を担当する班になったらしい。班の仲間であるクラスメイト数人をひきいて、早速そちらに向かっていった。もちろんエリカのことだ。自みずからは勤勉さを発揮せず、人に指示を出し

て効率よく清掃作業を終わらせるのだろうが……。

　ちなみに護堂は、校庭の掃除を担当する班だった。

　リリアナは自分たちの教室——一年五組の清掃班になっていた。

　護堂がときどき教室に帰ると、銀髪の女騎士はとがめるような目つきでこちらをにらんでいたような気もしたが。

　しかし、にらまれる覚えはない。気のせいだと割り切って、掃除に精を出す。

　やがて清掃の時間も終わり、放課後となった。

　帰り支度をしていると、名な波なみ・反そり町まち・高たか木ぎの三人組が寄ってきた。

「草薙よ。おまえについての、妙なうわさを聞いた」

「ウソだと思うが、念のため確認したい。万里谷さん——なでしこ部門では我わが校ぶっちぎりのナンバーワン女子とつきあっているというのは、本当か？」

「し、しかも、ふたりは結婚を約束した仲でありながら、おまえの浮気で万里谷さんが悲しんでいるというじゃないか！」

　護堂は「は？」とつぶやいて、眉まゆをひそめた。

「そのバカげたうわさがどこから出たのかは知らんけど……事実無根にもほどがあるぞ。そんなデマが広まったら、俺はともかく万里谷に迷惑がかかるじゃないか」

　憤ふん慨がいのあまり、不ふ機き嫌げんな口調になってしまった。

　すると、三バカたちはホッとした表情でうなずき、笑顔になった。

「ははは。だよなあ」

「おまえと万里谷さんのカップリングなんて、絶対ウソだと思ったんだ」

「ふたりが今朝、登校中に言い争いをしたなんて目撃情報や、でも結局仲直りして仲良く登校したって怪情報まで飛びかっててな。オレたちとしたことがつい不確定情報に踊らされて、おまえを疑っちまったぜ」

「あ、いや。言い争いとか、いっしょに学校まで来たのは本当だけど」

「「「な・ん・だ・と」」」

　事実を申告したら、なぜか三バカが目の色を変えた。

「俺と万里谷がちょっとだけ揉めたのを見て、誰かがバカなことを言いだしたんだな。なんでもそういう関係だって決めつけないでほしいよ、ほんと。――そうだ。ちょうど名波に頼みがあったんだけどさ」

　愕がく然ぜんとした顔で凍りついた友人たちへ、護堂は言った。

「借りてるゲーム、なかなか終わりそうにないから、まだ借りててもいいか？」

「あ、ああ。一年でも二年でも貸しといてやる。心ゆくまでやるといい。それより草薙、おまえのこと……信じてもいいよな？」

「は？」

「だから、まだおまえを信じても――オレたちの同志、クリスマスには孤独をかかえながら空虚な現実と雄お々おしく戦う男のひとりだと、信じてもいいのか!?」

「いや、クリスマスに誰かと戦う予定なんか、どこにもな……ん？」

　予定はない。言い切ろうとして、護堂はなぜか躊ちゆう躇ちよした。

　まるで、自分のなかの何かが待ったをかけたような感覚だった。

　その後、家路についた護ご堂どうは、近所のスーパーへ寄った。

　食事当番の責務をまっとうするためだ。昼はコンビニのおにぎりですませた。

　さあ、夜はどうしよう？　食べなかった朝食が手つかずで残っているが、それだけでは足りない。いそがしい朝とちがって、時間の余裕もある。

　護堂はすくないレパートリーを吟ぎん味みしはじめたのだが。

　ある問題を思い出した。そのことを考慮すると、今夜の晩ばん餐さんをいろどるメニューは慎しん重ちように選んだ方がいい。どうしたものか？

　スーパーの野菜コーナーで迷っていると、声をかけられた。

「珍しいところで、珍しいことをされていますね」

　振り向くと、すぐそこにリリアナが立っていた。制服姿でカバンも持っている。彼女も学校帰りなのだろう。

「あなたがこんな店でお買い物とは珍しい」

「今、じいちゃんがいないからだよ。今日は俺が夕飯を作るんだ。リリアナも買い物に来たのか？」

　メイドのカレンはイタリア本国に帰省中。ひとり暮らし中のリリアナが買い出しに来ても不思議ではない。だが、彼女はかぶりを振った。

「いいえ。実は確認したいことがあって、お逢あいしに来たのです」

「確認？」

「あなたが万ま里り谷や祐ゆ理りを――日本の媛ひめ巫み女こを無惨に手た折おり、我わが物とし、しかも浮気までしたあげく捨てようとしたと聞きました！　どういうおつもりなのですか!?」

「へ……手折り？」

　リリアナは唐とう突とつにぐわっとまくしたて、護堂はきょとんと目をみはった。

「今度という今度は、あなたを見み損そこないました！　ええ、戦場ではどんなに危険で大おお雑ざつ把ぱ、怪物的だろうと、ふだんの生活ではそれなりにまじめで」

「そ、それなり？」

「一応は社会生活にも適応していますし、ツッコミどころが多いなりに常識家としての顔もどうにかギリギリ保っている——そういう人なのだなと。困ったところが多いけれども、愛すべきところも何だかんだである人なのだなと思っていたんです、私は！」

「リリアナは俺をそんなふうに見てたのか……」

「だというのに万里谷祐理への仕打ち、あまりにひどい。男らしくないうえに、人としての義にも欠けています。あなたを見そこないました！」

「いや、どこでどんなうわさを聞いたのか、見当はつくけど」

　リリアナの剣幕に対して、護堂は冷めた声で意見した。

「その情報、ちゃんと事実関係を確認したうえで、俺のところに来たんだよな？　なんなら万里谷に電話をかけてみたらどうだ？
きっと事実無根だって否定されるぞ」

「え……？」

　いきなりリリアナの勢いが弱まった。

　そして考えこむ。沈ちん思し黙もつ考こうする。『しまった！』と言いたげな顔になる。

「じゃあ、あらためて訊きこう。リリアナも買い物に来たのか？」

「そ、そういうことで結構です。草薙護堂」

　コホンとせき払いして、リリアナは言った。

　赤面しつつも、どうにかまじめな表情を取りつくろっている。

「申し訳ありません。うわさを耳にしたとき、なぜか『草薙護堂はとてつもない色好みで、ちょっと目をはなすといつのまにか新しい女性と関係を持っている』みたいなイメージが浮かんできて、自然と信じこめてしまったのです」

「そっちの方こそ事実無根じゃないか！」

　結局、ふたりはならんで食材を見ることになった。

　生鮮食品コーナーを吟ぎん味みする魔王と騎士。ある意味、冗談のような光景だ。

「白状すると、今夜のメニューで悩んでるんだ」

「セールで安い食材を買って、それを使った料理でいいではありませんか」

　リリアナが必勝法を授けてくれる。だが、護堂は首を横に振った。

「実は、昨日も一昨日もそうしたんだ。ほら、肉や魚とか野菜を適当に切って、まとめて鍋に放りこめば、勝手に美う味まくなってくれるだろ？　たいていの食い物は煮こめばほどほど食える味になる……はずだし」

　護堂は語る。『なる』と言い切れない自分を不思議に思いつつ。

「その線で一昨日の夜はちゃんこ鍋にした。鍋の残りは捨てずにそのまま残して、昨日の朝は煮込みうどんを作った。で、昨日の夜はキムチ鍋にしたら、静花がだんだん不ふ機き嫌げんになってきたんだ。さすがに今朝は、ちょっと料理っぽいこともしたんだけどな」

　まだ不満そうだった妹を思い出し、護堂は悩ましい気分になった。

　女の子というのはめんどくさいものだなー、とも思う。

「というわけで、今夜のメニュー選びは慎重にやりたい。でも、女の子受けする料理なんて何も知らないから困ってた」

　ここで、なぜかリリアナがため息をついた。

　護堂は首をすくめた。『世話の焼ける人ですね！』と言われた気がしたのだ。

「とりあえず家庭生活という名の戦場では、あなたが決して勝者になれない不ぶ精しよう者ものであることは理解できました」

　この指摘に護堂は恐きよう縮しゆくする。まったく反論しようがない。

「だから申し上げたんです。メイドか執しつ事じでも用意すべきだと」

「そんなもの、昨日の今日で用意できるもんじゃないだろ。まあ、五年経たったって用意する気はないけど」

「でしたら、仕方ありません。次善の策で対応されるしかないでしょうね」

　聞いた瞬間に、護堂は目をぱちくりさせた。

　次善策？　リリアナの言わんとするところは、まさか——。

　それから約一時間。

　銀髪の妖精めいた白人少女は草薙家の台所で、みごとな手て際ぎわを見せてくれた。

　大根・キュウリ・にんじん・セロリなどを棒状に切ったスティックサラダ。これに付けるためのクリームチーズとサーモンのディップ。

　さらに素す揚あげしたカボチャ、サツマイモ、レンコン。海え老びとアボカドの生なま春はる巻まき。

　短い時間で何品も作ってくれたのである。

　また、護堂が朝でっちあげた味み噌そ汁しるもどきにはガラムマサラを入れ、ベーコン・レタス・トマトの具材をプラス、味噌カ

レー風味のＢＬＴスープに変身させてしまった。

　その組み合わせ、最初はどうかとも思ったのだが。

　味見してみると、しっかり洋風の美味に変わっていた。なるほど、料理のセンスとはこういうものかと感心させられる手際だった。

「手早く作れるものばかりで申し訳ないのですが」

　ひととおり料理を終えて、リリアナは言った。

「すくなくとも、あなたがご自分で用意されるものよりは悪くない出来だと思います」

「本当にそうだな……。やってる作業の量はそんなに変わらない感じなのに」

「おそらく、あなたが『食べられるものができればいい』くらいの適当さで料理されるからでしょう。『料理は愛情』というくらいですし、ある程度の熱意は必要だと思います」

「う……」

　草薙護堂の大雑把さを指摘するとき、リリアナは歯に衣きぬ着きせない人になるらしい。

　これも身から出たサビかと、恐縮する護堂だった。

「と、とにかく助かった。ありがとう。よかったらリリアナも夕飯を食べていくか？」

「今日は特に予定もないのですが……ご家族の団らんにお邪じゃ魔まするのも恐縮ですし、ご遠慮させていただきます」

　護堂の誘いを、リリアナは無難な理由で断った。

　まあ、いきなり他人の家で夕食を共にするのはたしかに抵抗があるだろう。実際、護堂とリリアナはそれほど親密な仲ではないのだから……。

　護堂はうなずきながら思った。それよりも不思議なことがある。

　我が家の台所に立つリリアナを見て、なぜかなつかしくなっていたのだ。

　制服のうえにエプロンを身につけ、包丁を使い、鍋を火にかけるリリアナ——。

　古い日本家か屋おくには不似合いなはずの白人少女。だが、不思議なほど違和感なく草薙家の風景に溶けこみ、護堂をなつかしくさせていた。

「なあ。リリアナって、うちに来たのは今日が初めて……だったか？」

「え？　ええ……そのはずです。あ、いえ——あれ？」

　護堂が訊たずねると、リリアナは不審そうに首をかしげた。

「たしか今日が初めて、でしたよね？」

「だと思うんだけどな……」

　ふたりして向き合い、見つめ合いながら考える。

　そのはずなのだが、何かがおかしい。疑念にまかせて、護堂はじっとリリアナの白い美び貌ぼうを直視してしまった。するとリリアナは恥ずかしげに目を伏せ、きょろきょろと落ち着きなく台所のあちこちを見まわす。

「そ、そんなふうにご覧にならないでください。恥ずかしい……です」

「わ、悪い。そんなつもりはなかったんだけど」

　あわてて視線をそらすと、銀髪の少女は話題をそらすように言いだした。

「草薙護堂。ここ数日、あまり掃除をされてないのではありませんか？　隅の方がだいぶ汚れています」

「あー……一応はやってるつもりなんだけどなあ」

「いつもの大雑把さで適当に、ですね。わかりました。今日お邪魔

したのも何かの縁」

　リリアナはいきなり廊ろう下かへ歩いていった。納なん戸どのひとつを開け、しまってあった掃除機・ハタキ・雑ぞう巾きんなどを引っぱり出す。

　そこに掃除用具があると承知していたかのようなスムーズさだった。

「って、掃除までしてくれるつもりなのか⁉」

「はい。この家の汚れ具合、見て見ぬふりをするのも心苦しいですし。あなたはご自分の部屋で休んでいてください」

　言うや否いなや、リリアナはてきぱきと作業を開始した。

　廊下・床などを散らかしていた物を片づけていく。このあとはもちろんハタキ・掃除機の出番だろう。水みず拭ぶき等も抜かりなくやりそうな気配だ。

「い、いや、そこまで迷惑はかけられないよ」

「かまいません。どうせついでです」

　制服＋エプロン姿のリリアナは、かいがいしく掃除に取りかかる。

　その慣れた様子には、家事を取り仕切る新にい妻づまめいた雰囲気があり、それが制服姿とミスマッチで、護堂をひどくドキリとさせた。

　ともかく、彼女ひとりに掃除させるわけにもいかない。

　結局、護堂も手伝って草薙家のあちこちをきれいにしていくことになった。まあ護堂はといえば、体てい裁さいだけ『王への要請』という形の指示をリリアナから受け、そのとおりに動いていただけであったが。

　たまの休日、家にいたら妻を手伝って掃除する羽目になった夫――。

　そんな気分をたっぷり味わう護堂だった。

　ともあれ一時間ほどで掃除をひととおり終えて、リリアナは帰っていった。

「そういえば、日本では年の終わりに家を徹底的にきれいにするのでしたね……」

　などと最後につぶやいてから。

　草薙家の一、二階をざっと清掃した程度では、まだまだ物足りない。

　そう言いたげな口調だったのは気になるが、護堂はきれいになった我が家でリリアナの心づくしである晩ばん餐さんとともに、静花の帰りを待った。

　そして、ついに夜を迎え——。

「お兄ちゃん……今朝の万里谷さんだけでも大問題なのに、また女の子が家に来たの!?　とぼけたって無駄だからね！　この晩御飯といい、ピカピカになった家のなかといい、お兄ちゃんの仕し業わざじゃないのは一目でわかるんだから！　誰を連れこんだの？　やっぱり万里谷さん？　それともべつの女の子？　さっさと白状した方が身のためだよ！」

　その夜、妹と交わした兄妹愛あふれる会話の内容であった。

　静花いわく。護堂のそばにはこのところ『女』の影がちらついているらしい。バカを言うな、俺はじいちゃんとちがうなどと反撃を重ね、どうにか離脱。

　自分の部屋にもどって、護堂はふぅと一息ついた。

　そこで携帯電話に着信があった。祐理からの電話だ。すぐ通話にする。

「もしもし、万里谷か？」

『はい。夜分に申し訳ありません。お時間よろしいでしょうか？』

　かしこまったエクスキューズとともに、会話がはじまる。

　この丁てい寧ねいさ、律りち儀ぎさは祐理ならではのものだ。彼女とこんなふうに話せることを護堂はひそかによろこんだのだが。

　電話越しの声を聞いて、すぐに気を引きしめた。

『この間まで続いていたという事件についての、ご報告ですが』

「サンタが灰色になるあれか？」

『はい。あの現象が今日の夕方、都内の七箇所で確認されたそうです。四よつ谷や、目め白じろ、中なか野の、代よ々よ木ぎ、六ろつ本ぽん木ぎ、中なか目め黒ぐろ、有ゆう楽らく町ちよう……今、甘あま粕かすさんが調査に向かっています』

「またかよ!?」

　お台だい場ばで〝自殺〟した灰色の者。結局、あの一幕で事件は収束しなかったのだ。

　しかも、ここ何日かの遅れを取りもどすような勢いで再発とは。

「どういうカラクリなのか、なんとかして突きとめたいな。甘粕さん、何か手がかりをつかんでくれればいいんだけど……」

『そちらについてですが、心当たりがあります』

「え!?」

　いきなりの祐理の告白に、護堂は驚いた。

『この話を聞いてすぐに、霊れい視しの啓けい示じが降りて参りました。なんとなく感じたことで、当たっていないかもしれませんが……エリカさんです』

「って、あいつか。どうして？」

　まさかエリカが真犯人のはずもない。どういう意味なのか？

「ずるがしこいところもあるけど、こんなイタズラをするヤツじゃないぞ」

「私もそう思います。ただ、なぜか強く感じるんです。この事件を解とき明かすための決め手——すくなくとも、そのひとつをエリカ

さんはお持ちであると」

　エリカ・ブランデッリ。

　護堂が知るかぎり最も華麗な、才気あふれる美少女。

　はたして彼女は何をつかんでいるのか？　見当もつかないまま、護堂はうなずいた。毒を食らわば皿まで——ではないが、こうなったらとことん最後まで突き進んでやろうと。

第４章　真冬に来たる神の名は？

1

　祐ゆ理りからの連絡を受けた十数分後、護ご堂どうはある人物に連絡を入れた。

　実はリリアナに『また灰色化が起きた！』と報しらせ、例の使い魔で犯人を捜してもらうことも考えはしたのだが。

　なんともいえない据すわりの悪さを感じて、やめた。

　草くさ薙なぎ護堂は野球のチームでいえば、やはり四番打者であり捕手だろう。子供の頃から慣れ親しんだ役割。攻撃では塁るい上じようにたまったランナーを長打で帰き還かんさせる。守備では投手と野手たちに指示を出して牽けん引いんし、こちらではべつに目立たなくてもかまわない。

　だが今回は、なぜか四番打者が送りバントをしているような。

　扇おうぎの要かなめに腰を据え、司令塔となるべき捕手が外野でボールを追いかけているような。

　そういう具合の悪さを感じるのである。

　噛かみ合ってない。適材適所とは程遠い。甘あま粕かすも言っていたではないか。「われわれ委員会が駆けまわって解決すればいい事件」みたいに。他人に面倒事を押しつける気などないが、たしかに向いてない役目をわざわざしなくてもいいはずだ。

　なぜ今回はそうなのか。適材適所の人材配置になっていないのか。

その気持ち悪さをしみじみと噛かみしめて——。

護堂はその人物への連絡を決めたのである。こういうとき、彼……ではなく彼女はまちがいなく当てにできるはずだから、と。

そして一二月二〇日、午後二一時すぎ。

静しず花かに見つからないよう、護堂はこっそり家を出た。

言こと問とい通どおりで甘粕冬とう馬まの運転する乗用車に拾ってもらい、向かったのは千ち代よ田だ区く三さん番ばん町ちよう。ここの裏通りに、幽霊屋敷めいた洋館がひっそり隠れるように建っている。

正せい史し編へん纂さん委員会の東京分室責任者が住まいとする館やかただった。

美少女というには中性的すぎる。美少年というには線が細すぎる。ついでに女たらしで口くち八はつ丁ちよう手て八はつ丁ちよう、しかも策略家という問題人物が……。

「ようこそのお越しに感謝いたします、王よ。沙さ耶やの宮みや馨かおる、本日は非才なる身の全力をもって草薙護堂にお仕つかえする所存です」

玄関口で迎えてくれた馨は、フォーマルな黒の執しつ事じ服ふく姿だった。

選んだ言葉は大おお仰ぎようなくせに、彼女の言いまわしは軽妙そのもの。

おどけてはいるが気品ある仕草で一礼し、くすりと微笑ほほえむ。生きつ粋すいの洒しやれ落者ものらしい、馨のふざけたあいさつだった。

「俺なんかに気を遣つかっていただく必要は全然ないですけど……その格好は？」

「草薙さん直じき々じきのご来らい臨りんですから、ちょっと洒落てみたんですよ。ひとまず、なかへお入りください。もう祐理もリ

リアナさんも来ていますよ」

　完かん璧ぺき以上の洒しゃ脱だつさで紳士服を着こなす少女は、軽やかにウインクしてみせた。

　うながされて館に入ると、ロビーで旧知のふたりと再会した。

「護堂さん、お待ちしておりました」

「例の現象がまた起きているそうですね」

　正式な委員会の任務になりそうだからか巫み女こ装しよう束ぞくをまとっている祐理と、青のダウンベストに黒のダックパンツといういでたちのリリアナだった。

　護堂はふたりといっしょに、広々とした書しよ斎さいへ入る。

　馨の執務室でもあり、しばしば『まつろわぬ神』対策会議の会場となる部屋だ。護堂はソファに腰かけた。すると、右隣にリリアナもすわる。

　本当にさりげない、ここに収まるのが当然のような動きで。

　視線が合う。リリアナが目くばせしてきたので、護堂は軽くうなずいた。いよいよ真相究きゆう明めいも本格的になってきた。ここからが正念場だ。

「…………」

「？　どうかしたのか、万ま里り谷や？」

　ふと見れば、祐理がなぜか硬い表情で護堂とリリアナを注視していた。

　訊たずねると媛ひめ巫み女こはハッとして、あわてて腰を下ろす。護堂の左隣に、である。

「な、なんでもありませんっ。ところで護堂さん。いつのまにかリリアナさんとご親密になられていたのですね……？」

「親密――うん、まあ、前よりも仲良くなってはいるか。なあリリアナ？」

「そう、ですね……。ところで草薙護堂。いつのまにか万里谷祐理と前よりも打ちとけているのですね。なるほど、うわさが出まわった理由はそれですか」

　皮肉っぽくリリアナに言われて、護堂は「それ？」と首をかしげた。

「はい、それです。空いている席がほかにあるにもかかわらず、万里谷祐理はためらわずにあなたの隣へ腰かけた……。今までからは考えられない行動です」

「——!?　こ、これはただ、護堂さんと事件のことをくわしく話すためですっ」

　いきなりの指摘に狼ろう狽ばいしつつ、祐理は答えた。

「それに、そういうことをおっしゃるリリアナさんの方こそ先に……」

「わ、わたしも今回の件では草薙護堂に協力してきた身。王の相談役として、ふさわしい場所にすわっただけだ。それにしても、いつのまにか呼び方まで変わっていて……」

　リリアナの発言、後半はぶつぶつというつぶやきでよく聞こえなかった。

　いずれにせよ女子ふたりにはさまれ、ちょっと微妙な空気。

　護堂はふと思った。みんなと仲良くできてきたのはいい。だが、もしかして前の方がいろいろ気楽だったかも……？

「へえ。なるほどなるほど」

　一方、執事姿でひかえている馨は面白そうに笑い、うなずいている。

　今の人間模様を眺めての反応らしい。一体、何が「なるほど」なのか。胡う乱ろんに思いながらも、護堂は馨に感謝した。この場のセッティングは、全すべて彼女の差配だ。

　この混こん沌とんとした状況。祐理の霊視。そしてエリカが持つという謎なぞの決め手。

　これらを手っとり早く整理し、総そう括かつしてくれる最適任者は馨だと思えたのだ。

　というわけで馨の携帯に連絡。一時間後には折りかえしの電話があった。そこで馨は「緊急会議の場を設けましたので、今からおいでください。エリカさんもいらっしゃいます」と、さわやかに報告してくれたのである。

　あいかわらずの有能さと手て際ぎわよさ。沙耶宮馨は世が世なら『宰さい相しよう』か『司教』にまで登りつめる器うつわの持ち主——。これは誰が口にした評だったろう？

「みなさん、お待たせしたようね」

　そして、主役のごとく最後に到着した少女。

　彼女は紅くれないのネックコートに黒のショートパンツとタイツという服装で、いつもどおり『紅と黒ロツソネロ』のコーディネイトを遵じゆん守しゆしていた。

「馨さんから連絡をいただいて、それらしきものをアリアンナに探してもらったわ。彼女が家中を走りまわって、三〇分で見つけたのがこれよ。うちの助手兼メイドの手際もなかなかだと思わない？」

　書斎に入るなり、あざやかな声音で語る。自分は何もしてないと悪びれずに告げるあたり、まさにエリカ・ブランデッリの真しん骨こつ頂ちようといえる大らかさである。

　エリカがかかげる発見物。それは素そ朴ぼくな木箱だった。

　手のひらに乗るサイズでふた付き。色はかなり黒ずみ、だいぶ古そうだ。

　ぱかりとエリカがふたを取る。なかには、カラカラに干ひ涸からびた乾かん果かが二、三粒入っているだけ。ピンポン玉くらいの大きさだった。

　何のドライフルーツかは、もう見当もつかない。

「わたしが日本に持ちこんだ魔術関係の品に、こんなものはなかったわ。ミラノに頼んで送ってもらった品にもなかったはず。でも、なぜかわたしのマンションにまぎれこんでいた。なかなか興味深い

現象よね」

　木箱のなかをのぞきながら、エリカは微笑む。

　獲え物ものを前にした雌めす獅じ子しの獰どう猛もうさがにじみ出ている。不敵な笑みだった。

「箱に付いていた覚え書きを信じるなら、この果実はかつて——一〇〇年以上前、トルコに顕現した『まつろわぬ神』が地上に持ちこんだものらしいわ。最近、奇妙な事件がいろいろ起きているそうね。その内容と、この神の名は偶然とは思えないほど符ふ合ごうするわよ」

「……勿もつ体たいぶるな。神の名前とやらを早く言え」

　口をはさんだのはリリアナだった。

「これくらいの演出はいいじゃない、リリィ？　見せ場を決して逃さないことは、誰もが知るエリカ・ブランデッリの特技よ」

　軽やかに言ってから、エリカは不意に告げた。

「その神の御名はサトゥルヌス。かつてローマ帝国で信仰された農耕の神。民たみに作物の実りをもたらす者。そして、クリスマスの起源でもある祝典の神よ」

　リリアナが軽くうなずいた。納得のいく名前だったらしい。

　サトゥルヌス。はじめて聞く名前——か？　護堂にはかすかな違和感があった。

　だが、今は目先の疑問を問いただす必要がある。

「クリスマスの起源だって？」

「古代ローマでは一年の終わり、毎年一二月にサトゥルヌスの大祭を催もよおしたというわ。人々は歌い踊り、飲み、騒ぎ、とにかく羽目をはずして楽しんだの」

　いつもの明めい晰せきさでエリカが語っていく。

「農耕の神の名のもと、その年の収穫を感謝し、来年の豊作を祈る

祭事。この祭りでは、木の枝や木の実を人に贈る風習もあったそうよ。これがキリスト教の普及以後もヨーロッパ各地に残り、『一年の終わりに祭りを催し、贈り物をする』慣習になるの」

「先日、聖ニコラスが作物の実りをもたらす聖人だとお話ししましたが、サトゥルヌスはキリスト教の聖人たちよりも古い農耕神です」

　補足するようにリリアナも言い足した。

「キリスト教が全ヨーロッパに広まるのは一一世紀頃。それよりも前、欧州の人々はサトゥルヌスやクロノス、フレイ、ダグザなど、土ど着ちやくの農耕神たちを崇あがめていました。しかし、キリスト教の普及でそうした古くからの神々は聖ニコラスに取ってかわられ、冬の大祭の風習もイエス・キリストの降こう誕たん祭さいという形に置きかえられたのです」

「今の暦こよみでいう一二月頃に収穫祭を行うのは、農耕を行っていた文化圏なら珍しくもないことだわ。それこそ古代エジプトでも行われた祝典ですし」

「エリカさん……そちら、よろしいでしょうか？」

　意外な知識を語るエリカに、祐理がおずおずと言った。

　彼女のまなざしは、金髪の少女が持つ小箱の中身に注がれている。

「ええ。祐理の力があれば、わたしたちには視みえない何かが視えるかもしれない。是非お願いしたいわ」

　祐理がソファから立ちあがり、エリカのもとへ歩く。

　手をのばし、木箱のなかに白魚のような人差し指と中指を差し入れ、からからに干涸らびた一〇〇年物の乾果におずおずとさわる。

　すると、いきなり祐理がハッと顔をこわばらせた。

　かなり明確なイメージの霊視が得られたらしい。だが、それをよろこぶより先に、護堂は不安になった。祐理の表情があまりに硬かったからだ。

「もしかして、悪い報せなのか？」

　心配したのかリリアナが問うと、祐理は不安そうに答えた。

「は、はい。この木の実にかかわる強大な力がおそらく東京湾のどこか、それもかなり都市部の近くに存在するように視えました」

2

　霊視でかいま見たイメージを祐ゆ理りが語ると、馨かおるは軽く目くばせ。

　これを受けたのは、もちろん腹心の甘あま粕かすだった。

　勤務態度は昼ひる行あん灯どんでも、エージェントとしての有能さは疑いようがない。よれた背広から取り出した携帯電話でどこかと交渉をはじめ、手早く話をまとめてしまった。

　そして一時間半後。護ご堂どうたちは東京湾を進む高速艇の上にいた。

　どういう〝コネ〟を使ったのかは不明だが、海上保安庁の巡視艇を正せい史し編へん纂さん委員会は確保して、草くさ薙なぎ護堂らを乗せる『足』にしてくれたのである。

「さすがに夜の海は冷えるな……」

「本当にそうですね……」

　護堂がつぶやくと、祐理もあいづちを打つ。

　海原を行く船の甲かん板ぱんにいる以上、冷え切った海風にさらされるのは避けようもない。

　吹き抜ける風がゆきがけの駄だ賃ちんにと、容よう赦しやなく体温を奪っていく。しかも、今は夜。太陽の恵みもない闇やみの刻こく限げん。冷え込みにいっそう拍車がかかる。

「万ま里り谷やもその格好じゃ寒すぎるだろ……。そうだ。船のな

かに備品っぽいジャケットがあったから、借りてこよう。上に羽織るといい」

　祐理は白衣に袴はかまという、いつもの巫み女こ装しよう束ぞくである。

　冬ならば陸地でも寒いはずの薄着なのに、こんな船の上。事実、海風にさらされる祐理の美び貌ぼうは青ざめていた。

「いえ。あまり厚着をして、感覚が鈍にぶるといけません。このままで大丈夫です」

　夜の海を吹く寒風で、まちがいなく体の芯しんまで冷え切っているだろう。

　しかし、祐理は寒さで身を丸めるでもなく、手に息を吹きかけてあたためるでもなく、毅き然ぜんと顔を上げて背筋をのばし、凜りんとたたずんでいた。

「感覚って霊視のか？」

「それもありますし、あとは精神感応の方も。今、私は感応力の触しよく手しゆをまわりにのばして、神の霊気を探っているんです。微妙な加減が必要な力ですので、逆に寒さで気が引きしまっている方がやりやすいと申しますか」

　巡視艇の甲板にいるのは今、祐理と護堂だけ。

　媛ひめ巫み女こはそのたぐいまれな能力を駆使して、さっき得た霊視のイメージに該当する場所を探してくれているのだ。尚、護堂の方はただのつきそいだ。

「あー……たしかに寒いときとか集中しやすいもんな」

　護堂は体育会系の思考でうなずいた。

　冬場の朝練、武道などの寒かん稽げい古こ。ああいうときの方がかえってアドレナリンが吹き出て、コンセントレーションも高まる。運動嫌いにはおそらく理解されない趣味だろう。

「実は媛巫女の修行で、毎日のように真冬の滝に打たれたこともあります」

「すごいな。なんか『巫女さん』って感じだ」

「はい。いっしょに修行した巫女見習いの方々と、みんなでやせ我が慢まんしていました」

「やせ我慢？」

「やっぱり、寒いものは寒いですから」

　珍しい、媛巫女の冗談めかした物言い。護堂は苦笑し、祐理もくすりと桜の花がほころぶように微笑ほほえむ。いつもはない微量の悪戯いたずらっぽさが新鮮だった。

「じゃあ、今もやせ我慢してるのか？」

「白状しますと、そうです。指先なんて感覚がないくらいに冷え切ってます……」

　困ったように祐理は微笑み、白い手をかざす。

　それでも指先を震わせたりせず、やわらかな表情も物腰も常と変わらない。媛巫女たちのやせ我慢は筋金入りらしい。

　しかし『感覚がない』とまで言われ、さすがに護堂も心配になった。

「本当か？　……ああ、たしかに。ちょっとだけでもあっためた方がいいかもな」

　つぶやいて、何の気もなしに祐理の手をつかむ。

　冷たい。彼女の手が『氷よりはまし』というほどに冷えているのを確認してから、護堂は気づいた。俺は今、何をした？　祐理と視線が合う。

　今まで、みごとなやせ我慢ぶりを見せてきた媛巫女。

　その美しく整った面おも差ざしが見る間に真っ赤になり、うつむいてしまった。

　原因はまちがいなく、護堂の手のなかに彼女の華きや奢しやな手があるからで――。

「わ、悪い！　これは変なつもりじゃ全然なくて！」

　護堂は即座にあやまる。不思議だった。

　ごく自然に手がのびたのだ。祐理とはもう何度か手を重ねたことがあって、それゆえの気安さから、つい自分の手で確認しようとした――。そんな感覚だった。

　ここは「何をするのですか!?」と、一いつ喝かつされるべき場面だろう。

　媛巫女の正当な怒りを予想して、護堂は甘んじて受ける覚悟を固めた。

　だが、祐理は目を伏せたまま恥ずかしげにつぶやいた。

「わ、わかっています。すこしあたたかくなってきましたから……」

　そういえば、まだ護堂は祐理の手をにぎったままだった。

　うかつにも放すのを忘れていたのだ。しかし、そのおかげで護堂の手のぬくもりが祐理の冷え切った手に移り、すこしだけあたたかみが増していた。

　やはり、手足の末まつ端たんなどは男より女性の方が冷えやすいのだろう。

　護堂は氷みたいな手をこのままにするのが申し訳なくなり、つい言ってしまった。

「も、もうすこしあったためた方がいいか……？」

「は、はい。そうですね。あまりこうしていると感覚が鈍ってしまいますから、本当にもうすこしだけ……あと一分、いえ三〇秒だけでも……」

　祐理の返答に応こたえて、護堂は彼女の手をさする。

　三〇秒、いや一分はすぐにすぎた。だが、あとすこしあたためてやりたいと思い、ゆっくりとさすり続ける。

　そして、祐理と護堂の視線が合った。ふたりともすぐに目を伏せてしまう。



　祐理からあって然しかるべき「もう大丈夫です」のストップはなく、護堂が言うべき「そろそろやめようか」の申し出もできないままだったとき。

「そのようなことをしていて、探索の方は大丈夫なのか？」

　冷静な声につっこまれた。あわてて護堂と祐理は手を放し、声の主を見る。

　ちょうどリリアナが近づいてくるところだった。うしろにエリカもいる。

「インスタントだがコーヒーがあったので作ってきた。万里谷祐理が偵察役で寒い思いをしているだろうと、申し訳なく思って——」

「そ、そうでしたか！　でも大丈夫ですっ。すこし寒い方が感覚も研とぎすまされますし！」

　魔ま法ほう瓶びんをかざすリリアナに、祐理がらしくない早口で答える。

「というわりに、あなたの体温はそこそこ高いように見えるな……。ついでに言うと、草薙護堂の方も」

　赤面した祐理と護堂を眺めて、リリアナは皮肉っぽくコメントする。

　これにはふたりとも反論できない。下を見て、恥ずかしさを堪こらえるのみであった。

「まあ、ちょうどいい休憩のタイミングじゃないかしら。祐理、一息つきなさい。あなたのように替えの効かない人材は休むことも仕事のうちよ」

　面白がるようにエリカが口をはさんできた。

　しかも、くすくすと上品に含み笑いをしながら旧友兼ライバルに言う。

「リリィも悔しいのはわかるけど、あまり祐理をいじめないであげて。女の嫉しつ妬とに狂うのって、あなたには似合わない役どころ

よ」

「し、嫉妬!?」

　エリカの言いぐさに、リリアナが目をみはった。

「ええ。実は最近、あなたたちに関する変な情報を得て、バカげた作り話だと思っていたのよね。でも、こうして自分の目で見て、理解したわ。情報にあやまりはないって」

「ど、どういう情報を聞いてたんだよ、エリカ？」

　いやな予感がしたので、護堂は訊たずねた。

　すると、『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』の異い名みようを持つ少女は金髪を王冠のようにかかげ、魔王への叛はん意いと批判精神を瞳ひとみにひらめかせた。

「それはもちろん、あなたたちの三角関係のことよ！」

「な!?」「えっ!?」「三角関係!?」

　護堂・祐理・リリアナはそろって絶句した。しかも、さらにエリカは言いつのる。

「草薙護堂とリリアナ・クラニチャールの両名は明らかに不適切な関係で、最近おたがいの自宅を頻ひん繁ぱんに行き来しているらしい……。そして、草薙護堂はほかに親しい女性がいることを万里谷祐理に知られ、土下座までして謝罪していた……」

「そ、そうだったんですか、護堂さん!?」

「うわさは本当だったと!?　く、この前のあれは巧こう妙みような言いのがれ……！」

　大体のアウトラインは事実だが、微妙に事実誤認のまざったエリカ発の情報。

　これに祐理はおののき、驚きよう愕がくのまなざしを護堂に向けてきた。

　リリアナはといえば、責めるような目でキッとにらみつける始

末。

「状況証拠しかないとはいえ、裁判員の心証はかなり悪いわよね。ただ、わたしは思っていたの。いくらなんでも、草薙護堂にそんな甲か斐い性しようあるはずない。祐理とリリィだって頭のいい娘こたちだから、あんな男にだまされたりはしないって」

　さりげなく護堂をこきおろしつつ、エリカは語る。

「でも、わたしもまだまだ甘かったわ。祐理とリリィったら、すっかり『女』の顔になってしまってて。よほど上う手まい手て管くだでふたりをたらしこんだようね、草薙護堂？」

「誤解だ！　たらしこむなんてしてない。そうだろ、ふたりとも!?」

「は、はいっ。すくなくとも、私にはそのようなことをされていませんっ」

「そうだ。すくなくとも、わたしには偽いつわりの愛をささやくような真ま似ねはしていないっ」

　護堂に訊かれて、ふたりの女子は微妙な言いまわしを使った。

　そして、祐理はちらちらと護堂＆リリアナを、リリアナは探るように護堂＆祐理を見つめ、どちらも憂ゆう鬱うつそうに表情を暗くしたのである。

　護堂は参った。まさか、こんな展開になってしまうとは。

　だが、とにかくエリカの登場で、女子たちの一体感は増したようだ。

　やはり、この少女がいると全てが変わる。よくも悪くもメンバーの中心となり、新たなアイデアでチームの動きにアクセントを加えてくれる。

　そのことを再確認しつつ、護堂たちは一杯ずつコーヒーを飲み、体をあたためた。

　そして、祐理はふたたび集中を研ぎすますためか、護堂たちから離れていって両目を閉ざした。精神感応の触しよく手しゆを広げ

て、近くの海域を探査するのだろう。

「精霊の方を追いかけてる甘粕さんは、どうなったのかしらね？」

「まあ、サンタクロースを灰色に塗りかえるだけのイタズラ者だ。妙なことにはなっていないと思いたいが……」

　集中する祐理を眺めながら、紅と青の騎士たちが話し合う。

　出航前、リリアナに例の使い魔でまた大地の霊気を検知してもらっていた。

　現在の最優先事項は祐理の霊視した『門』だが、あちらも放置できない。そこで甘粕が現地に向かったのである。

　一方、護堂は妙な感覚を味わっていた。落ち着かないのだ。

　戦いともなれば勝手に集中力が高まり、ベストコンディションになっていく。『まつろわぬ神』が近くにいれば心身が昂たかぶり、戦うための力が込みあげてくる。

　それが神殺し・カンピオーネの肉体。

　今はそういう感覚が一切ない。いかにも危険そうな場所に近づいているのに。

　その理由を護堂が考えこんだとき、ついに祐理が目を開き、こちらへもどってきた。

　このあとに起きた活劇について、実は多くを語る必要はあまりない。というのは激しい戦闘になるでもなく、あっさりと終結したからだ。

　葛か西さい沿岸部の海域で、祐理の精神感応が発見したもの。

　それは巨大な石造りの紋もん章しようだった。大理石のごとき素材を彫り上げた石細工で、両翼を大きく広げた『鳥』の形に見えなくもない。

　だが異様なことに、鳥の紋章は海の上に浮かんでいた。

　しかも、まるで〝根づいている〟ようだった。沖合の強い波にさらされているが、ぷかぷか揺れたりしない。どっしりと大地に根を下ろしたように固定され、微動だにしなかった。

「…………？」

　海面の紋章を巡視艇の縁へりから見て、リリアナが不思議そうな顔をした。

　その手には例の使い魔――ブタのぬいぐるみが握られている。

「どうかしたのか？」

「この子が大地の霊気を感じていないのです。サトゥルヌスの木の実にかかわる力なら、てっきり地の豊ほう穣じようにまつわる徴しるしだと思ったのですが……」

　経緯を考えると、そう予測するのが自然だ。

　護堂は思わず祐理を見た。リリアナ以上の霊視力を持つ彼女なら、何かわかるのではないか。そう考えたのだ。すると、媛巫女は申し訳なさそうに言った。

「すいません。あれがいかなる力を秘めているのか、私にも視みえかねます。あの徴のまわりに、灰色の靄もやがかかっているようにも視えるのですが」

「靄だって？」

「はい。まるで何者かが真の姿を隠そうとしているように……」

　ささやいてから祐理はハッとして、紋章を見つめなおした。

「今、あの徴から『地の神』にまつわる力が生まれて、芽吹きつつあります。もしかしたら護堂さんが近づいたことで刺激を受けたのかもしれません」

「正体不明の徴から生まれる、大地の神格か……」

「どうやら、一ひと筋すじ縄なわではいかない相手みたいね！」

　リリアナがつぶやき、エリカは高らかに言い放つ。

　騎士たちの視線も海面の紋章に注そそがれていた。一方、目の前で膨ぼう大だいな呪じゆ力りよくが生まれつつあることに護堂も気づいていた。

　やはり、神殺しと神に属する者は反発し合うということか。

　気を引きしめたとき、神力が爆発的にふくれあがった。

　同時に石造りの紋章から木が生えてきた。常緑樹のヤドリギに似た太い幹みきが、枝が、緑に生いしげる葉が生まれ、ぐんぐんと成長していく！

　最初は若木だったのが、すぐ大木に、さらに樹齢数百年かと見まごうほどに。

　結局、ほんの十数秒でヤドリギ似の大樹が東京湾のまっただなかに誕生してしまった。高さ三〇メートル以上。枝ぶりもそれに比例した壮そう麗れいさだ。

　樹齢でいえば、まちがいなく一〇〇〇年を超すであろう巨大さだった。

　カンピオーネの直感が教えてくれる。これは『まつろわぬ神』ではない。だが、それに連なるもの、神の力を宿す大樹にちがいない。

「生物の姿をした眷けん属ぞくが神獣だから、これはさしずめ神樹か神木かしらね！」

　エリカが上う手まいことを言った。

　一方、いきなり成長した神木はわさわさと枝を揺らし、葉を揺らし、その全身から荘そう厳ごんな呪力を放出させはじめた。

　まるで戦いを前にして、猛り狂っているかのように。

「こいつ、木のくせに俺と戦うつもりかよ！」

　神木の発する闘気と戦意は、まちがいなく己おのれに向けられたもの。

　戦士たるカンピオーネの直感で、護堂はそれを肌で感じた。形状

が木とはいえ、やはり神に連なるもの。神殺しには敵対的なようだ。しかし。

　さっきエリカは神獣と比した。つまり、強さもその程度にすぎない。

　カンピオーネからすれば、さほど難敵でないのも明らかで——。

「護堂さん！」「草薙護堂、あれを！」

　そのとき、媛巫女と魔女がそろって警告してくれた。

　何か霊視できたのか。彼女たちが見つめる先、指さす先は神木のとある太い枝の上。そこにひっそりと立っているのは、灰色の者——！

　数日ぶりに見る、灰色のボロ布で全身をおおいかくした姿。

　あとで確認したところ、この数分前まで都内の青あお山やま近辺で甘粕は灰色の者の姿を捕ほ捉そくし、追いかけていたのだという。だが、護堂たちの前に灰色の者が顕あらわれたのとちょうど同じ頃、追跡目標は唐突に消え失せたのだとか。

「この間のやつが甦よみがえったのか、うりふたつのやつが出てきたのか、どっちだろうな……」

　つぶやきながら、護堂が正体を詮せん索さくしていると。

　灰色の者は枝の上を歩いていって、神木の幹にふれた。すると、ボロ布につつまれた手が木の表皮にめり込んでいく！

　やがて手首までが幹に埋まり、そして肘ひじ、肩までもが埋まってしまう。

　ついには頭も胴も、二本の足も残った腕も神木のなかに入った。灰色の者は神木と同化を遂とげたのだ。そして、護堂は気づいた。

「枯れていく……？」

　今までみずみずしく生いしげっていた巨大な神木。

　その青々としていた葉が見る間に枯れていく。枝や幹の表面から

は水気が失せ、乾き、しなびていく。やがて次々と小枝が落ちはじめ、海面にぶつかり、しぶきを上げる。

　そして、前に灰色の者が自じ刎ふんしたときのように——。

　神木はボロボロと砂の城さながらに崩れ、海風に乗って空へと飛散していったのである。

　あとに残ったのは、海上に浮かぶ鳥の紋もん章しようのみ。あいかわらず波にも揺れず、地に根づくようにして海面に固定されていた。

「あの灰色の地霊、今度は神木を〝殺した〟とでもいうのか……？」

「カンピオーネとの遭遇で活性化した同どう朋ほうをわざわざ？　行動原理が読めないわね」

　リリアナとエリカが不ふ審しんそうに言うそばで、護堂は祐理に訊たずねてみた。

「万里谷はどう思う？　これで騒ぎが収まると思うか？」

「ど、どうでしょう……？　ただ、胸騒ぎがします。このままだと、また同じことの繰りかえし——いえ、もっと悪いことになるような気が」

　おずおずと申告されて、護堂は「だよなあ」とうなずいた。

　あの巨大な神木がもし襲ってきたなら、たぶん『猪いのしし』でも呼んで返り討ちにすることはたやすかったはずだ。だが、そうするまでもなく連中は自みずから姿を消した。

　もしかしたら、ここが鍵かぎなのかもしれない——。

3

　予想外の東京湾ナイトクルージングを終えて、護ご堂どうは深夜

一時に帰宅した。

　しかし、すぐには眠らない。布ふ団とんの上であぐらをかいて、二時間ほど考え事を続けた。

　そして迎えた翌朝。護堂は六時に起床した。

　朝食は要いらないとメモに書きのこし、静しず花かが起きるのを待たずに家を出る。

　そのまま人ひと気けのない教室に潜もぐりこんで、考え事の続きをはじめた。昨夜から気になっていた懸けん案あん事項。ホームルームの開始まで一五分というところで、どうにか答えを見み出いだし、護堂は大きく息を吐き出した。

　——つまり、こういうことではないか？　なかなか納得のいく解答だった。

　あとで静花に「朝、何であんなに早く家を出たの⁉　隠れて悪いことしてたら承知しないんだからね！」なんて言われるリスクを冒おかして、ひとりで沈ちん思し黙もつ考こうした甲か斐いがあった。

　ここからはいつもどおり。

　登校してきたリリアナと軽く言葉を交わし、エリカからは優美なあいさつと冷笑のセットを受け取り、名な波なみたち三バカからは「メイド喫茶はもう古い。今度いきつけのメイドかき氷屋で冬限定特大氷イチゴを堪たん能のうしようぜ！」と誘われた。

　そうこうするうちにホームルーム開始。

　今日は一二月二一日。終業式だった。つつがなく式も終わり、護堂は放課後を迎えた。

　晴れて冬休みの開幕。当然、クラスも校内も活気づいている。

　このまま遊びに行こうとする生徒もいれば、休み中の予定を相談しているグループもいる。だが、護堂はその手の騒ぎには加わらない。

　すぐに教室を出て、まだ隣のクラスにいた祐ゆ理りをつかまえ

る。

　そして、昨夜の件の『事後処理』について教えてくれと頼みこんだ。

「委員会の方々があの徴しるしを封印できないか検討中らしいのですが……。ただ、あれはおそらく神の造り給たまいし神具。人の手でどうにかできる可能性は低いと思われます……」

　とは、祐理の予想だった。

　情報に礼を言ってから、護堂はグラウンドに向かった。

「こんなところに呼び出して、どういうつもり？」

　やってきたエリカは、ツンとした口調で言った。

　皮肉の棘とげを込めた丁てい寧ねいさか、妙にツンケンした物腰か。最近のエリカが草くさ薙なぎ護堂に見せるのは、そのどちらかである。いや、最近より前もずっとそうだった気はするが……。

　要するに、親しく語らうつもりがないのだろう。

　だが、護堂は今、エリカと話をしたかった。とはいえ、まともに話題を振ってもいつもの優美なそっけなさで避けられそうな気がする。

　というわけで一計を案じ、メールで呼び出しをかけた。

　終業式が終わったらグラウンドで待つ。追つい伸しん、逃げるなよと——。

「最近、運動不足だったんだ。ちょっと体を動かす気になった」

　学院高等部の野球用グラウンド。

　そのホームベース上で護堂は言った。足もとには体育倉庫から持ち出したバットとグラブ、ボールが転がっている。

「つきあってくれ。前に授業でやってたから、大丈夫だろ？」

　グラブとボールを取りあげて、護堂は言った。

「おまえが相手でも、絶対打たれない球を投げてやる」

「大きく出たわね。エリカ・ブランデッリは剣だけの女じゃないと知ってるでしょう？　わたしの召めし使つかい役をよろこばない武器は、めったにないのよ」

　安い挑発だが、戦意を刺激されたらしい。

　くすりと微笑ほほえんでから、バットを拾いあげる。これだけの所しょ作さなのに、ダンスの一部のように軽やかで、絵になる動きだった。

　持って生まれた運動神経、運動センス、ラテンのリズム感などの賜たま物ものか。

「最近、リリィや祐理に変なちょっかいを出してるあなたに相応の報むくいをあたえなきゃと思っていたの。あなたの方からプライドを折られに来てくれて、うれしいわ」

「む、報いって、おい」

　やけにあっさり挑発に乗ったのは、そういう理由か。護堂はうめいた。

「ちょっかいなんて出してないっ。ただ仲良くなっただけだ！」

「ただ仲がいいだけで三角関係？　いつのまにか発展的になったのね。野や暮ぼで無ぶ粋すいで朴ぼく念ねん仁じん、気が利きかなくて女の子にはひっこみ思案、そのうえここぞというときはいつも大おお雑ざつ把ぱなのが草薙護堂の個性だったはずだけど」

「み、見てきたように俺の人格を語るな！」

「見てきたわよ。わたし、いつだってあなたのことを――あら？」

　エリカが不ふ審しんそうに小首をかしげた。護堂も違和感を覚えた。

　今の言葉のキャッチボール。そのなかに何か、ふたりの間でもつれた糸を切るためのハサミがあったような……。

「まあいいわ。早速お手並みを見せていただきましょうか！」

　エリカは躊ちゆう躇ちよを振り切るように言うと、制服のスカートに手をかけた。

　惜おしげもなく引き裂き、両りよう脇わきにスリットを入れる。動きやすくしたのだ。そして、バットのヘッドを斜め上の空に向ける。予告ホームランの構えだ。



　おそらく知らずにやったのだろう。絵になりそうなポーズをなんとなく思いついて。

　だが、そのポーズには華はながある。強打者特有の雰ふん囲い気きまで漂ただよってくる。

　ひさしぶりにエリカの才気とセンスを見た気がして、護堂は不思議とうれしくなった。こうでなくては、やはり彼女じゃない。

　口元がほころぶのを自覚しながら、マウンドに向かう。

「とりあえず五球投げるか。ひとつでも前に飛ばせたら、おまえの勝ちだ」

「あら？　そんなに有利な条件をもらっていいの？」

「ああ。今回はそれでいい。じゃあ、いくぞ」

　そして、護堂は立てつづけに五球を投げた。

　エリカのバットはかすりすらしない。いや、彼女は一回もスイングさえしなかった。

「ねえ護堂……あなたが今投げたボール、野球というスポーツの前提を無視するものじゃないかしら？」

　皮肉を込めて、紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソはささやいた。

「わたしの前にボールを投げて、それが打たれるか打たれないかで試合の展開が変わるスポーツでしょう？　なのに、全部わたしの上か横を素通りして」

　エリカの言うとおり、投球は全すべて大暴投だった。

　金髪の美少女が立つバッターボックス。護堂が投げた球はその横、あるいは上をひょろひょろと通過していったのだ。エリカのリーチとバットの長さも考えて、決して届かない場所に投げる念の入れようで。

「これでいいんだよ。『打たせない』ってことだけが目的なんだから。フェアに勝負しようとか考えちゃいないんだ」

　やはり、野球などマイナースポーツにすぎないイタリア生まれ。

　博識なエリカも敬遠の概念を知らなかったようだ。護堂は敬遠球の意図を語った。

「……でだ。今回、俺がやられてるのは、たぶんこれと同じだ」

「同じ？」

「つまり、まともに勝負させないのが目的なんだろうな」

　これだけの説明で、エリカの瞳ひとみに理解の色が広がる。

　すばらしく話がしやすい。俺とこいつはどうして仲がよくないんだろう？

　不思議に思いつつも、護堂はさらに語る。

「あの御ご神しん木ぼくとか灰色の変なヤツ。あいつらの親玉はたぶん俺を戦わせたくないんだと思う。だから、俺が近づくと手下に自殺させたりするんじゃないか？」

　東京湾での神木崩壊からずっと——。

　灰色の者たちの不審さを思いかえし、理由を考えつづけた。そして出した結論。これについて、エリカの意見を聞きたかった。理由はわからない。

　単に頭の切れる人間を頼りたいなら、馨かおるでもいい。魔術に長たけた騎士という点なら、リリアナの方がより柔軟性に富む。祐理などはそれこそ異様な霊感の持ち主で、相談相手としてはどんな占い師も凌りよう駕がする。

　だが、それでもエリカと意見を交換し合いたかった。

　なぜだろう？　多くの死闘を切り抜けてきたはずの草薙護堂。だが、その戦いを常に支えてくれたピースのひとつ——それもかなり大切な部分をエリカが持っているような。

　わけもなく、そう思えたのだ。

「だとすれば、そうする理由はひとつだわ」

　意見を聞くなり、エリカは力強く言った。

　その声のあざやかさが、護堂には奇妙なほど頼もしかった。

「時間稼ぎ。それ以外の生産的な目的は考えづらいわね」

「そうなのか？」

「ええ。つまり籠ろう城じようと同じよ。大軍にかこまれた城の兵が必死にたてこもり、防戦に励む。そうする理由は、友軍の救援をひたすら待つためだもの」

　エリカの語る戦術論に、護堂は「なるほど」とうなずいた。

　何のために時間稼ぎするのかは不明だが、たしかにそれなら筋は通る。

「ただ、あくまで生産的な理由付けを考えるなら、だけど」

「……非生産的な理由もありうるかも、と？」

「ええ。たとえば籠城のときって、追いつめられて正常な判断力を失っていることも多そうよね。援軍なんて来ないのにひたすら粘ねばろうとしたり。あと今回のケースだと、あの一団が取る奇妙な行動……何かの宗教儀礼にもとづいた儀式って線も十分ありそうよ」

「うっ」

　なるほど、論理的な理由がないという可能性もあったか。

　エリカの着眼点を聞いて、護堂は目からウロコが落ちた気分になった。

「とはいえ、あなたの気づいたことは問題の核心を突いているかもしれない。そう言える程度には興味深いものだわ」

「そりゃどうも」

　素直に誉ほめればいいのに、なんでいちいち言いまわしに凝こるのか。

　だが、これでこそエリカという気がして、護堂は苦笑した。

「貴婦人のはしくれとしては、奮闘した騎士にごほうびの花でもあげるべきよね。もうしばらくわたしの相手をしなさい」

　と言って、エリカは地面に手をのばす。野球の道具を置いたところだ。

　彼女が今度拾ったのは、グラブとボールの方だった。

「今度こそまともな勝負で、あなたのプライドをズタズタにしてあげる」

「ちょっと待て。褒ほう美びをやるって言ったのに、なんで俺を負かす気なんだよ？」

「エリカ・ブランデッリと勝負のひとときを共有できるだけで、十分な報ほう償しようよ。それに勝利が欲しければ、自分の手で勝ち取るのが男の子ってものでしょう？」

　不敵に微笑んでエリカが言う。いかにも彼女らしい雌めす獅じ子しの笑みだった。

　やってやろうじゃないか。護堂もにやりとした。一応、男の子のはしくれとしては、ここで引き下がるわけにはいかない。

　今度、護堂が拾うのはバットの方だ。

　かくしてふたりは、『とにかく打ち取ればエリカの勝ち、とにかく打ち砕けば護堂の勝ち』という曖あい昧まいすぎるルールのもと、勝負というより球遊びに興じるのだった。

4

　ふたりの球遊びは結局、陽ひが傾きだす頃まで続いた。

　夕焼けのオレンジ色に染まった根ね津づの街を、護ご堂どうは歩く。隣にはエリカもいた。学校からここまでいっしょに歩いてきたのだ。

　護堂の側の理由は『なんとなく』である。

　勝かち負まけなしに落ち着いた球遊びを終え、道具を片づけ、「じゃあ、そろそろ帰るか」と歩きだしたら、ごく自然な足取りでエリカもついてきた。同行をこばもうと思えば、いくらでも何か言えただろうが、なんとなく『これでいいや』という気分になった。

　エリカはなぜくっついてくるのだろう？

　もしかしたら、こいつの方も『なんとなく』だろうか。そのあたりを訊きく代わりに、

「結構動いたから、腹が減ったな」

　と、動物的欲求を口にした。べつにエリカがいて困ることはないのだ。

　くっついてくる理由など、まったく気にならなかった。

「同感だわ。まだ晩の食事まで間があることだし、どこかに寄っていこうかしら」

「あいかわらず、ダイエットとか気にしないやつだなー」

「その分、毎日カロリーを消費しているもの。その辺の収支計算に抜かりはないわよ」

　軽口とともに根津三丁目の商店街を歩く。護堂の家までほんの数分だ。

　そろそろ別れ時かと思った瞬間、エリカは唐とう突とつに足を止めた。

「実は前々から気になっていたのよね。歳さい月げつの重みに耐えてきた風格があるというか、なんともいえない〝味〟がにじみ出ているというか……」

　エリカが見つめるのは、護堂も知る中華料理店である。

　有あり体ていに言えば、オンボロという表現が適切な店だった。いかにも『町の中華屋』という風ふ情ぜいの、昭しよう和わからそのままとおぼしき店構え。あちこち油っぽくて、汚れ放題。

　十代の女子なら、即座に敬遠しそうな外観だ。

　だが、むしろエリカはその古さ・汚さに惹ひかれるようだ。そういえば無個性な店と料理より、まずくても特徴的な味を尊そん重ちょうするのがエリカ的食生活であったか。

「あそこか。まあ、エリカなら大丈夫かな」

　護堂は言った。何しろ地元だ。どういう店かはよく知っている。

　出入り口のガラス戸に『泥どろワンタン・泥だんご・泥ラーメンあり升ます』と、挑発的な貼り紙をしてある。ふつうの中華料理を供する気など皆かい無むの店なのだ。

「面白い店だから、俺は好きだぞ。じゃ、またな」

「ちょっと待ちなさい、護堂」

　あいさつして別れようとしたら、エリカに腕をつかまれた。

「エリカ・ブランデッリの期待をあおるだけあおっておいて、先に帰るつもり？」

　腕を護堂の体ごと引きよせ、エリカは不敵な口調で言う。

「あなたが保証したほど面白くなかった場合、責任を取ってもらうわ。だから、もうすこしつきあいなさい。いいわね？」

「ええっ!?」

　もうすぐ我が家なのに、なぜ俺まで。護堂は遺い憾かんの意を表明した。

　だが、筋力強化の魔術を使ったエリカに力でかなうはずもない。結局ずるずると引っぱられ、いっしょに入店することになった。

　そして、一時間後。

「なるほどね……泥くさい川魚の料理ばかりの店だったのね」

　テーブルの料理をあらかた味わったところで、感心したようにエ

リカは言った。

　雷らい魚ぎよと芹チン菜ツアイのワンタン。繰りかえし油をかけて丸揚げにした鯉こい。ウナギと豆腐の蒸むし物もの。そして『ナマズの泥団子、甘あま酢ず餡あんかけ』と命名された一皿をつくづくと眺める。

「これなんか、そもそも料理としての存在意義が疑わしいわよ。わざわざすりつぶした川魚の身に香こう辛しん料りようを混ぜこんだのは、異様な泥くささをごまかそうとしたのよね。全然ごまかせてないけど。だから、やたらと甘い餡をさらにかけたんだわ！」

「おまえ、やっぱりまずい料理とかゲテモノな味、かなり好きだろ……」

　活いき活いきと味を分析するエリカに、しみじみと護堂は言った。

　店のメニューを眺めた彼女が何皿も注文するのを見て、すぐに家での夕食はあきらめた。静しず花かに電話して『夕飯は外で食べてくる』と連絡ずみだ。

　だから、心おきなく護堂も箸はしをのばせる。

　鯉の揚げ物を噛かみしめると、さくさくに揚がった皮の食感が心地よい。

　べつにゲテモノだけではない、川魚中華料理の専門店なのである。

「ここの親父さん、昔、修業で中国に行って、長ちよう江こうとかで捕れる川魚の料理にはまったらしいんだ。一応、本格的に広カン東トン料理の修業をしたって言ってたぞ。ここの味がちゃんと広東風なのかはわからないけど」

　ちょくちょく店主の創作料理っぽい皿を出す店だ。

　特にナマズ団子など、中国に実在するかはかなり疑わしい。それゆえに断りを入れた護堂に、エリカはさらりと言った。

「だったら、そのうち陸りく鷹よう化かでも呼んで、味見させてみたら。あの子は香ホン港コン……広東料理の本場生まれだし。香港

陸家は広東料理のお店だって経営してるはずよ」

「え？　鷹化？」

　その名に護堂はドキリとした。たしかに聞き覚えがある。

　なのに、今までなぜか忘れていた姓名。陸鷹化。鷹たかの名を持つ歳とし下したの……友人？　彼とはどういう縁で知り合ったのだったか？

　そして今、それと同じくらい重要なことは。

　彼はその名に『鷹』の字をたしかに持っていた。謎なぞの警告メール。その差出人と同じ、鷹の一字を——。単なる偶然で片づけていいのか？

「あいつ、今どこで何やってんだろうな……？」

「あら？　そういえば彼、どこに行ってるのかしらね……？」

　エリカが首をかしげている。身近な重要人物については、誰か人でも使ってるのか情報収集をおこたらず、常に動向を把は握あくしている彼女が。

　そのらしくない反応に、護堂は思わず箸を止め、考えこんだ。

「よかったら、うちに寄ってくか？　お茶くらい出すぞ」

　中華料理屋を出たところで、護堂は言った。なぜかエリカと別れがたかった。

　そして、彼女も同じ気持ちではないか。ごく自然にそう思えた。

「そう、ね。あなたのように野や暮ぼな人とこれ以上いっしょにいられない……なんて本当は言いたいところだけど。それもいいかもしれないわね」

　エリカの憎まれ口にも、いつもの歯切れよさがない。

　胸の裡うちで起きている不可解な心の動きに、とまどいを覚えているようにも見えた。

「でも、やめておくわ。ちょっと行きたいところができたの。たぶん、あなたのお誘いよりも大切なこと」

　それだけ言うと、エリカはさっさと去っていった。

　護堂はため息をついた。この数時間でかなり打ちとけた気もしたが、勘かんちがいだったか。まあ、仕方ない。それに、護堂の方にも考えておきたいことはあった。

　さっきエリカが口にした名前、陸鷹化。

　そして、何かの復活が冬とう至じの日だと報しらせるメール。差出人は鷹。

　鷹とは、やはり陸鷹化なのか。そして、復活するものとは一体——？

「お兄ちゃん！　今度はうちのご近所で金髪の留学生と晩御飯デートってどういうこと!?　とぼけても無駄なんだからね。店にふたりでいるところを見たって人がたくさん報せてくれたんだから！」

　考えながら帰宅したら、いきなり静しず花かが食ってかかってきた。

　これをスルーして二階の自室にもどる。どこに行けば陸鷹化と会えただろう？　携帯電話のアドレス帳を探さぐれば、彼の番号もアドレスも登録ずみだった。

　すぐに電話をかけてみた。が、一向につながらない。

　護堂はもどかしく思った。ここに来て強く感じるのは閉へい塞そく感かんだった。

　迷路に閉じこめられたような気分なのだ。

　だが、この迷路の造り、かなりずさんなようだった。ここまで来たら、壁ごと叩たたきこわして出ていけないか？　もう一押し何かあれば、あっさりやれそうな気がするのに！

　イライラと考えていたとき、携帯に電話の着信があった。

　液晶には『清せい秋しゆう院いん恵え那な』と着信者の名が表示

されている。たしか太た刀ちの媛ひめ巫み女こ。祐ゆ理りの友達で、何度か顔を合わせたこともあった。

　だが、個人的に連絡を取り合う関係ではなかった……はず？

　記憶が曖あい昧まいだ。細かく思い出せない。とにかく出ようと通話ボタンを押す。

『あ、王様？　ひさしぶり～。今、三みつ峯みねの御山に入ってるんだけどさ。ちょっと用事があって実家にもどってきてんだ。あのパーティー、結局どこでやるのか決まった？　また山へもどるから、その前に教えてよ』

　電話越しの声はとにかく気さくで、明めい朗ろう快かい活かつだった。

　そのフランクさにとまどいながらも、護堂は訊ききかえした。

「パーティーって何だ……？」

『あれだよ。クリスマスのあれ。恵那さ、この時期はいつも山に行ってたから、そういうの実は初めてなんだよねえ。みんなで丸ごとの鳥を食べるんでしょ？　知り合いのじいちゃんに頼んで何か分けてもらうから、そっちに持ってくよ』

「クリスマスのパーティー……？」

　はじめて聞くイベントだ。いや、本当にそうか？　前にみんなで話していなかったか。

　——僭せん越えつながら、わたしが幹事役をつとめます。

　——まあ、たまには内輪のパーティーもいいものよね。

　——でも、巫み女こさんってふつうにクリスマスとかしていいのか？

　——さすがにそこまで窮きゆう屈くつじゃありません。それに……。

　——この時期は毎年、馨かおるさんがすごいんだ。二〇日あたりから毎日女の子とデートなんだって。えらい人がそんなだから、う

るさいお年寄りも問題にできないんだよねー。

『今年は王様にすすめられたとおり、クリスマス前までに山やま籠ごもりをすませるからさ。しばらくそっちにいられるよ。みんなで初日の出とか見に行きたいなー。富ふ士じ山さんとか登る？』

　やけに鮮明な会話の記憶と、電話の声がかぶさる。

「俺がすすめた……」

『そうだよー。忘れちゃってた？　あ、そういえば向こうはどうだった？　教主さまと逢あいに行ってたんでしょ。今生きてるってことは、無事だったんだよね？』

「…………」

　記憶にないことを次々と言われて、護堂はとまどった。

　すると、電話の向こうで清秋院恵那は「今日は変だよ、王様？」とつぶやいて、

『ん、何？　へえ……そうか。そういうことになってんだ』

　いきなり胡う乱ろんなことを言いだした。

「そういうことって、どういうことだ……？」

『今、天あまの叢むら雲くもがさ。最近の事情ってやつを教えてくれたんだ。なんか込みいったことになってるみたいだけど、大丈夫。王様が本気で戦う気になるか、天叢雲に一声かければ、その程度の呪じゅ詛そはかんたんに解けるはずだから』

「呪詛だって!?」

『うん。あー……そろそろ充電が切れるみたい。とりあえず、恵那もすぐに東京へ行くよ。やっぱり王様のそばにいると退屈しなくていいよね！』

　明るい言葉を残して、唐突に電話は切れてしまった。

　そういえば、恵那の携帯電話は慢性的なバッテリー不足に悩まされていた。そして、彼女は携帯を媒ばい介かいにして守護神たちと

交信できたはず。

　たとえばスサノオと。今回はおそらく、護堂の右腕に宿る天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎと！

「——そうだよ！　俺と清秋院はこいつをいっしょに使ってたじゃないか！」

　太刀の媛巫女との絆きずなを、ついに護堂は思い出した。

　そして、恵那の言った意味を理解する。天叢雲劍は草薙護堂が所有する神刀。刃物として使うことはほとんどないが、この劍のさまざまな異能は重宝していた。

　そのひとつが破魔の力。

　神々やカンピオーネが本気で使うような権けん能のうには効かない。だが、それより弱い魔術や呪じゅ力りょくはたやすく吸収し、無力化できるのだ。

　護堂は右腕に意識を向け、そこに眠る劍へ『起きろ！』と念じた。

　戦闘以外には興味を持たない、純血の《鋼はがね》。それゆえ天叢雲劍は『いざ鎌かま倉くら！』というときをのぞけば、自みずからを休眠させている。

　恵那はこの状態の劍とも意思を疎そ通つうできるようだが、護堂には無理だった。

　——呼んだか、王よ。

　横おう柄へいな応答を聞いてすぐ、護堂はある指示を出した。

「変な状況だって気づいてたなら、ちゃんと警告しろよ！」

『前に言っただろう。己オレは剣神の性さがに忠実なる者ぞ。おぬしが戦う気にならぬ以上、しゃしゃり出るような真ま似ねはせぬよ』

「戦う気になったら、どんどんお節せつ介かいを焼くくせにな……」

　右腕に宿る天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎと話しながら、護堂は根津駅へと急ぐ。

　幸い、すっかり夜も更ふけている。午後二〇時すぎ。根津界かい隈わいの人通りはすくなく、奇異の目で見られることもなかった。

「なあ。俺の立場をおかしくするために、みんなの記憶を狂わせた呪のろいってやつ。俺以外の人間にかかったのも切れるのか？」

　さっきの指示。俺をおかしくしている呪いってヤツを、すぐに消してくれ。

　その効果は著いちじるしく、すでに護堂はいつもの状態にもどっていた。

　草薙護堂、東京在住のカンピオーネ。その仲間はエリカ・ブランデッリ、万ま里り谷や祐理、リリアナ・クラニチャール、清秋院恵那――。

　だが今、護堂のそばにいるのは右腕の鋼のみだった。

『己オレの前にいる者ならばな。ただ、意味はなかろうが』

「どうしてさ？」

『この呪じゆ詛そはまつろわぬ豊ほう穣じようの神……否いな、そやつの新生をもくろむ祭さい司しが仕掛けたもの。祭司役が健在である以上、呪詛を切ってもかけ直されるだけよ。もとを断たねば意味はない』

「にしても、俺の周囲全部を巻きこむ呪いなんてなあ……」

『あたりまえだ。これは民たみをひきいる祭司の呪力ぞ。群衆の心を操るための力、都のひとつやふたつ呑のみこめずしてどうする？』

　精神操作というより、群衆操作というべき能力らしい。

　護堂はウルスラグナの化身『山や羊ぎ』を思い出した。人々の心

を束ねる祭司の力。その精神感応は東京の日ひ比び谷や一帯、それに日につ光こう一帯を包みこんだ。

　そういえば、祐理の使う精神感応もかなり広範囲におよぶ能力だ。

「要するに、この手の力は影響の出る範囲がすごく大きいんだな……」

　なんて傍はた迷めい惑わくな力を持ってるんだ、俺たち。

　護堂は自らもふくめて、デタラメすぎる超能力の存在を憂うれえた。

「まあ、それでも都内までが限界ってのはよかったよ」

　だから、秩ちち父ぶの深山にいた恵那は影響をまぬがれたのだ。

　今回の呪じゆ縛ばくは、草薙護堂という個人を標的にしかけられたものだった。

　カンピオーネである護堂自身と、その仲間たちの関係を疎そ遠えんにすることで効率的に動けなくさせる。そうやって〝やつら〟はエリカが見抜いたとおり、時間稼ぎに徹していたのだ。

　まつろわぬ大地の神、サトゥルヌスの復活を待つために！

「ようやく突破口を作れたんだ。どうにかして、お返ししないと……」

『くくく。よいぞ王よ。その調子で闘志をみなぎらせ、心の赴おもむくままに戦うがいい』

「ば、バカ！　相手が戦わずに撤退してくれるなら、それがいちばんいいだろ。なんでもかんでも荒っぽいことに結びつけるな！」

　胸にみなぎる戦意を見抜かれ、あわててごまかしつつ。

　護堂は電車に飛びのり、新しん宿じゆくをめざす。早く陸鷹化と――ある役目を頼んでおいた義理の甥おいと連絡を取らなくては。

　途中で地下鉄からＪＲに乗りかえ、新宿駅へ到着。

広い駅構内をなかば走るようにして抜け出て、夜の街へ。めざすのは歌か舞ぶ伎き町ちよう、高校生が出入りすべきでない最大級の繁はん華か街がいだった。

陸鷹化が若き大幹部としてひきいる香ホン港コン陸りく家け——。

秋あき葉は原ばらでメイドビルなども運営しているが、あれはあくまで実験的なもの。再開発いちじるしい電気街への進出拠点として、ためしに作ってみたらしい。

いわゆるチャイニーズマフィアの一種で、香港に本拠地を持つ侠きよう客かく集団。

それが香港陸家である。日本ではむしろ新宿・池いけ袋ぶくろあたりが本来の勢力圏らしい。護堂はしばらく前、『日本での寝床でもある』と鷹化が言う新宿事務所を訪ねていた。

記憶をたよりに歌舞伎町の雑ざつ踏とうをすり抜けていく。

やってきたのは、とある汚い雑居ビル。中華料理店、マッサージ店、雀ジヤン荘そう、鍼しん灸きゆう院いんなどのテナントが入ったビルの階段を駆けのぼり、最上階へ。

そこの看板も表札もない事務所に入るなり、護堂は言った。

「すいません。こちらの若わか頭がしら——でいいのかな？　陸鷹化と話がしたいので、連絡を取ってもらえますか？　ご存じかもしれませんが、俺は草薙護堂といいます」

安っぽい業務用の机やイスがならぶ、事務所スペース。

一見、どこかの中小企業の事務所と見えなくもない。だが、そこに詰めていたのは『身長二メートルはありそうなスキンヘッドの大男、こめかみに刺いれ青ずみ入り』や『あからさまに堅かた気ぎじゃないホスト風の派手な背広のイケメン』。

さらに『どう見てもインチキ占い師っぽい、筮ぜい竹ちくを持ったナマズひげの小男』や『ちょうど化粧道具を広げて身み支じ度たくしていたおネエなお兄さん』など。

ある意味、一種の梁りよう山ざん泊ぱくといえなくもない曲くせ

者ものぞろいの面メン子ツであった。

　彼らはいずれも香港陸家日本支部の重じゆう鎮ちんたち……のはず。その協力を仰あおぐことが、護堂の反撃の第一歩であった。

第５章　事の始めと全ての元凶

1

　そもそも一二月がはじまったばかりの頃――。

　草くさ薙なぎ護ご堂どうの周囲はとことん平和であった。槍やりの軍神ランスロットとの激闘を終え、すべて世は事もなし。一二月三日には妹・静しず花かの誕生日をのほほんと迎えた。期末テストがあったのはこの頃だが、神様や魔王連中との戦いにくらべれば、何てことはない。

　まあ、多少は波風も起きたりしたが。

　静花の誕生日から四日後、祖父がブータンへ旅立ったからだ。

「今日からしばらくは俺が食事当番なんだよな。何を作ろうか？」

　高等部の中庭での昼食中、雑談をしながら護堂は言った。

　まわりにはいつもの面メン子ツがそろっている。エリカ・ブランデッリ、万ま里り谷や祐ゆ理り、リリアナ・クラニチャールの三名が。

「そういえば護堂さん、前にいろいろ作られてましたね。ああいうもので全然かまわないと思いますよ」

　やわらかな微笑とともに祐理が言ってくれた。日につ光こうでのことを覚えていたのだろう。

　だが、実は護堂にはそうしづらい理由があった。

「問題はそこなんだ……。たまに作るくらいなら大丈夫だけど、たぶん毎日のルーチンワークになったら、ああいうのを作りつづける甲か斐い性しようは俺にはないと思う」

「そういうことを、戦っているときのような顔でおっしゃらないでください」

　静かな自信を込めて言い切ったら、リリアナにあきれ顔をされてしまった。

　だが仕方ない。草薙護堂はまじめで律りち儀ぎな性格だと、自分でも思う。

　しかし、専業主夫ができるほど家事が好きでもないし、弁当男子になれるほど料理が苦にならない性格ではないのだから。

「こういうときは、やっぱりカレーあたりでごまかすか。でかい鍋なべいっぱいに作れば三日か四日はしのげるし、かんたんでいいもんな」

「「「…………」」」

　女子たちの反応はこのとき、全すべて微妙なものであった。

　祐理はひかえめに無言だったが、やや悲しげな瞳ひとみには『それはいかがなものでしょう？』と問題提起をうながす意思がかいま見えた。

　リリアナは『だから、あなたという人は……』と言いたげに悩ましく頭を振り、憂ゆう鬱うつそうな吐息をハァとこぼした。

　そして最後のひとり、エリカはもごもごとサンドイッチを食べ終えてから、

「ねえ護堂。もしあなたが我が家に来て、そういう粗そ雑ざつな晩ばん餐さんを何日も振る舞ったりしたら……たぶん二日目にして王への叛はん逆ぎやくを決意するでしょうね、わたしなら」

　と、つまらなそうに言った。

「せめてもうすこし、趣向を凝こらせないものかしら。全然面白くないわ」

「おまえが面白がれるような冒険料理にチャレンジする気は端はなからないっ。かんたんに作れて、そこそこ美う味まくて栄養があれば、俺には十分だ！」

「だとしても、あまりに華はながない。生活の基本は食からというではありませんか」

「静花さんが悲しまれるかもしれませんね……」

　エリカのコメントに反論すれば、リリアナが意見し、祐理はそっと目を伏せた。

　護堂がこのとき感じたのは、男女の間に横たわるカルチャーギャップである。割とがさつな体育会系男子・草薙護堂にとって『三日間、朝昼晩カレーライス』という食生活は何ら不自然なものではない。

　だが、もしかしたら女子はちがうのだろうか？

　解けない命題にぶつかった気分で昼食を終え、午後の授業をこなし、下校する。

　家にカバンを置いてから夕食の買い出し、さあ本当に何を作ろう……と悩みつつ家まで帰ってきたら。なんとリリアナが玄関で待っていた。

　草薙家は根ね津づ三丁目の商店街にある。

　一階がかつて古書店だった関係で、玄関は商店街の通りに面している。つまり、そこにたたずむ銀髪の白人美少女は、通行人とご近所さんから大注目を浴びることになる。

　だが、リリアナはそれらの視線を自然体で受け流しながら、護堂にあいさつした。

「お待ちしていました、草薙護堂」

「どうしたんだよ、こんなところで？　とりあえず上がるか？」

「いえ、その前に夕食の買い物へ行ってまいります」

　決然とリリアナに言われて、護堂は「買い物？」と首をかしげ

た。

「あなたという主あるじに日々の食事を作る甲斐性がないのであれば、それを補佐するのは第一の騎士として当然のこと。今晩の夕食は、わたしにおまかせください！」

「え!?」

「大体、みずくさいではありませんか。たった一言、『今晩の食事を頼む』とか言ってくだされぱいいのに、ご自分だけでなんとかしようと……」

　リリアナの訴えはなじるようでもあった。護堂はあわてて手を振り、

「い、いや。だって俺の家のことだし」

「お忘れですね？　リリアナ・クラニチャールはあなたの私事を取り仕切る者。当然、厨ちゆう房ぼうのことも担当範囲となります。……今晩、食べたいものはありますか？」

　結局、断りきれずに護堂はリリアナとともに商店街を歩きまわった。

　精肉店、青果店、鮮魚店、スーパーなど。

　会計のとき護堂がサイフを出したら、リリアナに「家計の管理もわたしの仕事です！」と言いはられた。仕方ないのでサイフをあずけて、支払いをまかせる形になった（まさかこんなことで立て替えさせるわけにもいかない）。

　そして帰宅。リリアナは持参した愛用のエプロンを制服の上にまとい、料理開始。

　手伝おうとすると断られるので、護堂が所在なく見守るしなかったとき。

　玄関がガシャンと開き、妹・静花が怒声とともに駆け込んできた。

「お兄ちゃん、ご近所でうわさになってるよ！　今日、リリアナさんらしき女の子とお兄ちゃんが買い物デートをわざわざこの商店街

でしてたって。しかもサイフまであずけて、婚約中のカップルか新婚夫婦みたいだったたって！」

　まあ、その後も一ひと悶もん着ちやくあったが、あえて語るほどでもないだろう。

　むしろ、翌朝に起きた出来事の方が問題だった。

　早朝の六時半。護堂が身支度をしていると、玄関のベルが鳴ったのだ。

　ドアを開けると、なんと制服姿の祐理が立っていた。丁てい寧ねいにつつんだ風ふ呂ろ敷しき包づつみを手に持ち、もじもじと恥ずかしげにしていた。

「朝早くにすいません。護堂さんにどうしてもお話があって……」

「いつもとっくに起きてる時間だから全然かまわないけど、どうしたんだ？」

　突然の早朝訪問に、護堂は気を引きしめた。

「もしかして、どこかに神様が出たとか？」

「いいえ。そういうご相談ではありません。実は甘あま粕かすさんが報しらせてくださいました。昨日の夜、リリアナさんが護堂さんのお宅でお夕食を作っていかれたと」

「あ、あの人は昨日の今日でそのことを何で知ってんだ!?」

　甘粕冬とう馬まは忍びの末まつ裔えい。情報収集などお手のものではあるのだろうが……。

　思わぬ情報を聞いてぼやくと、祐理がわずかに表情を硬くした。

「では、本当のことなのですね？」

「あ、ああ。リリアナが『そういうことも自分の仕事だ』みたいに言って」

「あの、いくらリリアナさんが第一の騎士を以もつて任じる方とはいえ、その厚意に全面的に甘えてしまうのも、いかがなものでしょ

うか？　特に今回は、護堂さんが当番として家のことをされるというお話ですし」

「やっぱりそうだよなあ……」

　真しん摯しな忠言に、護堂はうなだれた。

「みんなで昼に食べ物を持ちよるとかとは、話がちがうもんな。昨日はリリアナの親切に甘えさせてもらったけど、やっぱりこういうのはよくないよな」

　祐理に正論を説とかれて、護堂はむしろすがすがしい気分になった。

「うん。ありがとう、万里谷。言ってくれて助かった。こういうことはちゃんとしなきゃ、やっぱりダメだよな」

「あ、いえ。私の方こそ出すぎたことを申し上げてしまいました」

　護堂が礼を言うと、たおやかなお嬢さまはあわててあやまってくれた。

「基本的に護堂さんは節度ある方ですし、よほどのことがなければ我われを忘れてしまうような真ま似ねはされないとも考えたのですが、一応申し上げておこうと思いまして……」

　祐理は恥ずかしげに目を伏せながら、そっと手荷物を差し出してくれた。

　さっきからずっと手に持っていた、風呂敷包みである。

「あの……よろしければ、こちらをどうぞ」

「これは？」

「おにぎりを作って参りました。朝ご飯にでもしていただければ……」

「ええとさ。こういうとき、人の厚意に全面的に甘えてしまうのもどうかと思うんだ。特に今回は、俺が当番として家のことをする話なわけだし」

　説かれたばかりの正論を語ると、祐理はハッと顔を上げた。

「そ、それはもちろんです！　ですから節度を持って、けじめをつけるべきところはきちんとしてくださいねという意味で申し上げたんです！」

「だったらやっぱり……」

「そのあたりが気になっただけで、慣れない家事でお困りの護堂さんをお手伝いしたい気持ちは、あなたに近しい者として私も当然持っています。というわけで、よろしければ……」

　ふたたび祐理はおずおずと包みを差し出してくれた。

　護堂は微妙に首をかしげつつもありがたく受け取り、祐理がそのまま学校に行こうとしたので「ちょっと寄っていってくれよ」と呼び止めた。

　――差し入れのおにぎりは鮭さけ、梅、おかかの三種類が三個ずつ。

　お重じゅうのなかで整然とならんでいた。基本をはずさぬ定じょう石せきぶりがうれしい。じゃあ俺は味み噌そ汁しるでも作ろうと一いち念ねん発ほつ起きしたら、祐理が手伝いを申し出てくれた。護堂の役どころは途中から、万里谷家の味噌汁作りを実演する彼女の助手になってしまったが。

「お兄ちゃん……昨日はリリアナさんで今日は万里谷さんってどういうこと？　それも朝っぱらから～！」

　これはもちろん、朝の台所にやってきた妹の第一声である。

　ちなみに、この日の放課後は。

　祐理とリリアナが学校帰りの買い物につきあってくれた。

「これはあくまで草薙家の問題、護堂さんが主体性を持って取り組むべきだと思います」

「王を助けるのは家臣のつとめ。むしろ彼には悠然と腰を据すえて、わたしの仕事ぶりを見守っていてほしいところだぞ」

　買い物中、ふたりの主張は平行線をたどるように見えたのだが。

　途中、リリアナが曲想を得た作曲家、詩作にふける詩人のような遠い目になった。

「……いや待て。たしかにその方がいろいろと……新婚夫婦が暮らす新居。台所で夕食作りにいそしむ新にい妻づま。慣れない手つきで夫は手伝おうとする。ふとした拍ひよう子しに視線はまじわり、初うい々ういしくスキンシップ……これだ！」

　ムニャムニャつぶやいてからコホンとせき払い。祐理の主張を「そ、それもいいかもしれないな」と唐とう突とつに受けいれたのである。

　かくして三人で草薙家に到着。ふたりの『手伝い』に助けられて夕食作りが開始。

　途中で帰ってきた静花がまたしても不ふ機き嫌げんになったりした。

　さらに翌日の夕方。

　話を聞いて面白がったエリカが、ブランデッリ家の台所をあずかるアリアンナ謹きん製せいの手作りミートパイを持参してくれた。しかも、フーテンの旅人よろしく恵え那ながフラッとやってきて、玄げん米まいと味噌を一〇キロずつ差し入れしてくれた。

　そこに祐理とリリアナも連れ立って現れて――。

　静花は亡くなった祖母の遺い影えいと位い牌はいを、居間のテーブルにならべはじめた。

「ちょっとここに来て正座してよ、お兄ちゃん。胸に手を当てて、ここ最近の自分をかえりみて、反省の念を新たにして。そしたら、死んだおばあちゃんの霊に心からお詫わびを――あ、こら。まだ話は終わってない！」

　身に覚えのない不行状を悔い改めよと迫られ、護堂は二階の自室に避難した。

　ほかの四人も着いてくる。エリカはくすくすと笑い、祐理は困り顔、リリアナはいつもの生き真ま面じ目めさで、恵那はあっけらか

んとしながら——。

「静花のヤツ、最近やけに怒りっぽいよな」

「この問題をそれですませる護堂だって、相当な曲くせ者ものよ」

　しみじみと愚ぐ痴ちったら、エリカにそうコメントされてしまったが。

　ともあれ、ひょんなことから護堂の部屋にいつもの仲間がはじめて全員集合したのである。物がすくない殺風景な部屋なので、五人そろっても意外とせま苦しい印象はない。

　人数分の座ざ布ぶ団とんもしくはクッションを畳たたみにならべ、適当にすわる。

「で、王様は結局、料理上う手まくなったの？」

「さすがに一日か二日じゃ無理だなー」

　護堂の苦笑を誘った質問は、清せい秋しゆう院いん恵那のものだった。

　神しん祖そグィネヴィアとの戦いで傷ついた体を恢かい復ふくさせ、すこし前に東京へ出てきたのだ。自身も料理修業中だという恵那は、にこやかに言った。

「じゃあ、ちょうどいいや。王様、今日も祐理たちに料理習うんでしょ？　恵那もつきあって、いっしょに修業するよ」

　一応、食事当番の役割はまっとうせねばと、護堂はささやかに決意していた。

　手伝ってくれる祐理やリリアナに『おんぶに抱っこ』はよしとせず、ふたりには「俺に料理を教える感じで頼む」とお願いしてあった。

　ただ、現実的にはスキル不足の足あし枷かせがある。護堂がもたつく間に、女子たちがそのほかの作業をほとんど片づけてしまうことは多かった。

「そうだな。クリスマスも近いことだし、なんか鶏とり肉にくの料

理でも教えてもらうか」

「その時期の予定はおきまりですか？　静花さんやお母さまとごいっしょとか？」

　深く考えずに護堂が言うと、リリアナが訊たずねてきた。

「いや。特に予定はないなー。まあ、毎年なんとなくうちにいて、静花といっしょってのが多いけど。そういや、名な波なみたちは男だけで朝まで騒ぐとか言ってたっけ。つきあってみるのも悪くないかもな」

「朝まで、ですか？　なんだか楽しそうですね」

「万里谷祐理。そんなことを言ったら、草薙護堂は本当にそちらへ参加してしまうぞ」

「ええ。この集まりで今のを本気で言えるあたりが、この人の業ごう深ぶかさよね」

　微笑んでいた祐理に、リリアナとエリカがため息まじりに言った。

　そして、銀髪の女騎士はコホンとせき払いして、おもむろに呼びかけた。

「提案があります。僭せん越えつながら、わたしが幹事役をつとめますのでクリスマスにパーティーを催もよおすというのはいかがでしょう？」

「パーティーか……。そういや最近は平和だし、いいかもなあ」

　唐突な提案だったが、護堂は大きくうなずいた。

　もっとも、この日は一二月九日。ランスロット戦から半月ほどしか経たっていない。この平和がどこまで続くか、微妙なものではあったが。

「まあ、たまには内輪のパーティーもいいものよね」

　エリカもウインクしながらコメントする。

　フォーマルなパーティーにも慣れた彼女らしい言いぐさだった。

「あ。でも、巫み女こさんってふつうにクリスマスとかしていいのか？」

「さすがにそこまで窮きゆう屈くつじゃありません。それに……」

　護堂の確認に祐理は苦笑し、それからちょっと言いにくそうにした。

「それに？」

「この時期は毎年、馨かおるさんがすごいんだ。二〇日あたりから毎日女の子とデートなんだって。えらい人がそんなだから、うるさいお年寄りも問題にできないんだよねー」

　友人のあとを継ついで、恵那が説明する。

　馨のことだ。相手の女性はまちがいなく日替わりだろう。一日で三人ずつとクリスマスデートなんて荒技もやりかねない。護堂はつぶやいた。

「じゃあ、あの人を呼ぶのはやめておくか……」

「にぎやかなのが好きな人だから、ちょっとだけでも顔を出しに来ると思うよ。むしろ、問題は恵那の方かなー。毎年その時期は山に入って、そのまま年を越しちゃうんだ」

「なあ清秋院。その山やま籠ごもり、今から前倒しで行くんじゃダメなのか？」

　訊ねると、恵那は「あ、そうか」と手を打った。

　遊び慣れてない太た刀ちの媛ひめ巫み女こらしい迂う闊かつさに、思わず護堂は苦笑した。

　それを見て祐理も上品に微笑み、エリカは貴婦人らしい鷹おう揚ようさで一同を見守っていた。リリアナは面倒な幹事＆主催者役に、むしろ上機嫌になっていた。

　このように、一二月上旬の護堂たちは実に平和なものだった。

　そこに暗雲をもたらしたのは、武ぶ侠きよう・陸りく鷹よう化か——ではなく。彼がこの世で最も恐れ、最も腰を低くして接する至し上じよう至し尊そんの覇は者しやその人であった。

2

「師し父ふからの伝言があるんですよ……」

　秋あき葉は原ばらのメイド喫茶『國こく士し無む双そう』のＶＩＰルーム。

　ここで護ご堂どうと顔をあわすなり、陸りく鷹よう化かは憂ゆう鬱うつそうに言った。

　齢よわい一四。さほど背は高くなく、細身の美少年だ。しかし、その眉み間けんと表情には隠しきれない狷けん介かいさが取れない隈くまのようにこびりついている。

　室内には護堂のほかに沙さ耶やの宮みや馨かおると甘あま粕かす冬とう馬まも居合わせた。

　こちらの両名は、カードゲーム用の卓でバカラを楽しんでいたところだ。

「姐ねえさんから？　珍しいな」

　思いもかけなかった報しらせに、護堂は目を輝かせた。

　女子たちとパーティーの話をした九日の、二二時すぎだった。みんなでにぎやかな夕食を終えたあと、陸鷹化から「さきほど帰ってきました」と電話があったのだ。

　何か用事があって、香ホン港コンに帰国していたらしい。

　秋葉原にいると聞いて、ひさしぶりに会おうと来てみれば。

「考えてみたら、ずっと連絡取ってなかったもんな」

　義ぎ姉きよう弟だいの契ちぎりを結んだ羅ら翠すい蓮れん。字あ

ざなは濠ごう。人呼んで羅ら濠ごう教きよう主しゅ。

　五ご嶽がく聖せい教きようの教主にして、陸鷹化の師である。君くん子しの交まじわりは水のごとし——を人づきあいの基本スタンスとしている。義姉弟といえどもマメに連絡を取ったりしない。というより日につ光こうで別れて以来、はじめての音信であった。

「この間、廬ろ山ざんの庵いおりを訪ねたら師父がいきなり言うんですよ」

　峨が々がたる高山霊れい峰ほうの一隅より、夜空の月を見あげ。

　月げつ精せいもかくやというに足る佳か人じんは、琴ことの音ねのごとき美声で告げたという。

『われら義姉弟、たまには水入らずで月見に興きようじるのもよいかもしれませんね。鷹よう児じ、おまえに使いを命じます。よくつとめをはたすように』

　魔教教主の発言を弟子が伝えると、馨と甘粕は顔を見合わせた。

「シチュエーションだけ聞くと、ちょっと深くていい話に聞こえるけど」

「あの教主さまが相手ですからね。本当にただの月見で終わりますかねェ……」

「バカを言わないでくださいよ。そりゃ街中で野放しにしたら絶対ダメな人でしょうけど、あれでやさしいところもちゃんとありますし——え、もしかしてちがうのか？」

　年長の正せい史し編へん纂さん委員たちに、護堂が苦笑まじりに反論していると。

　そばにいた陸鷹化がむずかしい顔をして、ふるふるとかぶりを振ったのだ。

「いえね、叔お父じ上うえ。これが最後の別れから五年、一〇年経たってりゃ、それくらい言うかもしれません。でも、まだ二カ月ぽっちですよ。うちの師父に限って、なつかしさを感じて義弟に逢あいたがるなんて絶対ありません！」

　断言だった。重い実感がこもっていた。

「誓って申し上げますけど、絶対に何か裏がありますね」

「絶対かあ……」

「とりあえず、こいつをお渡ししておきます。次の満月の晩に飲めとのお達しです」

　陸鷹化が差し出したのは、水銀色の液体が入った小ビンだった。

「……飲むとどうなる？」

「いろいろ厄やつ介かいな感じに。ひきかえに師父の待つ廬山へヒュンと飛んでけます」

　解釈の余地が大きな説明に、護堂は肩をすくめた。

　まあ、さすがに死にはしないだろう——と思いたい。受け取りながら訊たずねた。

「次の満月って、いつだ？」

「これがちょうど明日なんですねえ……」

　今日の夜、ちょっと中国で姐さんと逢ってくる——。

　護堂が昼休みに報告したら、エリカは「ただの面会……じゃないわよね、たぶん」とため息をこぼした。祐ゆ理りは「無事にお帰りくださいね」と真剣な表情で訴えた。リリアナは「万一のときは、静しず花かさんのことはおまかせください」と請うけあってくれた。

　山に籠こもるため秩ちち父ぶへ帰った恵え那なにもメールで報せてみたら、

『みやげ話きかせて。でも、いちばんいいのは死なないことかな』

　たぶん、軽口とか冗談ではない返信があった。

　ともあれ、その反応にうなずける部分は護堂にもあった。

「人間の格好をした虎とらより、姐さんの方が一万倍は怖いからな……」

　つぶやきながら、夕刻の新しん宿じゅく歌か舞ぶ伎き町ちょうを歩く。

　こんな繁はん華か街がいを制服で歩くわけにもいかないから、もちろん私服に着替えてあった。教えられていた住所の雑居ビルを訪ねる。ここの最上階は香ホン港コン陸りく家けの事務所で、鷹化が寝起きする部屋も奥にあるらしい。

　だが、今日の目当てはこのビルの屋上だった。

　そこで陸鷹化が待っていた。そして、甥おいの部下である男たちが屋上の床に白いチョークで幾き何か学がく的てきな図形や漢字を多々書きこんでいた。

「ようこそおいでくださいました、叔父上。今、方ほう陣じんの用意をさせてたところです」

　陸鷹化の抱ほう拳けん礼れいに護堂はうなずきで応こたえ、それから待つこと十数分。

　ついに方陣は完成し、夕焼けの太陽も沈んで本格的に夜となる。陣の中心に護堂が立つと、ひとり鷹化だけがそばに残った。

　意を決して、前に渡された水銀色の液体を小ビンから飲みほす。

　まず単純にまずかった。アリアンナのもつ煮込みにも匹敵する、名めい状じょうしがたい味。しかも、ドロリとした流動体を飲みくだした瞬間、腹のなかにすさまじい熱さが広がる。

　この液体には、すさまじい効能があるらしい。

　遠く離れた護堂に、義姉・羅ら翠すい蓮れんが廬山から方術をかけるための媒ばい介かいとなるそうなのだ。

　喉のどのまずさと腹の熱さに、護堂が思わずビルの屋上で膝ひざをついた瞬間。

　それが来た。今まで歌舞伎町のビル屋上だった周囲の情景がうすれ、どこともしれない場所にうずくまっていたのである。

『ひさしぶりですね、我わが弟よ』

「姐さんか……」

　なつかしい美声を聞いて、護堂はうめいた。

　喉と腹の不快さに難なん儀ぎしながら立ちあがり、まわりを見まわす。

　なんとそこは、来たことはもちろん見たこともない山のなかだった。しかも、ふもとや中腹あたりに放り出されたのではない。

　峨々たる高山の、それもかなり標高の高い場所にいる。

　というのも、そこは物見台のように盛りあがった岩場で、まわりを見渡せば近隣の山々と下界が一望できるのである。

　山々の尾根や緑、さらに山頂付近をいろどる雪の白さなどが遠くに見える。

　また視線を上に向ければ、満天の星々がまたたいていた。

「姿が見えないけど、どこにいるんだ？」

「叔父上。師父は遠くから声だけ送ってきてるんですよ」

　羅翠蓮の姿を求めて護堂がきょろきょろすると、陸鷹化が教えてくれた。

　甥はそのままサッと膝をつき、抱拳礼をする。

「英えい明めいなる師父におかれましては、その武ぶ威いにますますの輝きが加わり、天上の太陽にも斉ひとしき明みよう徳とくを得られたとお見受けいたします。弟子陸鷹化は帰還のご報告とともに、智ち勇ゆう双そう全ぜんなる師父に千せん秋しゆう万ばん歳ざいのおよろこびを言ごん上じよういたしたく存じます」

　ここまで大おお仰ぎような誉ほめ言葉、よくとっさに出るなと護堂が感心していると。

　また羅翠蓮の声だけが美しく響いた。ただし、内容はとびきり冷酷だったが。

『鷹児。使いの役目、御苦労。このまま練れん功こうに入りなさい。おまえにふさわしき相手を下に放っております。一日で倒せばよし、二日ならば及きゅう第だい、三日かかるのであれば……ふふ、身を以もつて学ばせるだけのこと。語るにはおよびませんね』

　羅翠蓮は今のささやきにある力を込めていた。『竜りゅう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう』である。

　声を衝撃波の風に変える権けん能のう。前にさんざん喰くらったおかげで、護堂にはすぐわかった。ただし、今回は直じき弟で子しを吹きとばすための風だったが。

　おそらく、軽自動車が突っこんでくる程度の威力だったのではないか。

「――！」

　見えざる衝撃波にさらされて、陸鷹化はとっさに大きく後方へ跳んだ。両腕を『×』の字にして体もガード。このあたり、さすがは武ぶ林りんの麒き麟りん児じか。

　それで威力を逃がした代わりに、山の夜空へ飛び出す形になってしまったが。

　しかも、衝撃の魔風にあおられて、空中でどんどん流されていく。

「うわあああああぁぁぁぁぁぁぁ…………」

　傲ごう岸がん不ふ遜そんな甥の悲鳴を、はじめて護堂は聞いた。

　陸鷹化の体は糸の切れた凧たこのように風に飛ばされ、山々の峰のどこかに落ちていく。

「姐さん。鷹化のヤツ、えらいことになったけど……」

『案ずるにはおよびません。あの子が着地するであろう場所には、すでに然しかるべき敵手を呼びよせてあります。暫しばし放っておきましょう』

　護堂のコメントに、羅翠蓮の声が噛かみ合わない答えを返す。

　今の一幕、この師弟には日常的な一コマなのか。何だかんだで瞬時に対応していた弟子といい、予想ずみだと言い切る師し匠しょうといい、どちらもまともじゃない。

　ぅぅぅぅぅぅぉぉぉぉぅぅぅぉぉぉぉ…………。

　遥はるか彼方かなたに魔獣の咆ほう哮こうっぽい声を聞いた気がして、護堂は言った。

「もしかして、今のが鷹化の相手とか？」

『ええ。ふふ……先ほどは二日で及第と申しましたが、わたくしの見立てでは四日かけて狩り立てられれば及第の難敵。さて、鷹児はどこまでやるでしょう』

　厳しいとかスパルタを超越した物言いで、魔ま教きよう教きよう主しゆはのたまった。

　やっぱりこういう人だよなあと護堂はうなずき、鷹化の無事を天に祈った。

『では弟よ。そのまま道を降りてきなさい。姉はあなたを待ちかねております』

　義姉の声にうながされ、護堂は物見台のような岩から降りた。

　そのまま山道を進む。おそらく中ちゆう国ごく江こう西せい省しよう・廬山国立公園のどこかなのだろう。見あげれば雲ひとつなく、満天の星々。おそろしく清せい澄ちような夜空であった。

　くすんだ都会では決して手に入らない、きらびやかな星の天幕だった。

「月を見るって言ってたけど、雲とかなくてよかったよ」

『先ほど祈き祷とうをかけ、払っておきました。雲隠れする月を追うのもまた一興。ですが、今こ宵よいはわれら義姉弟が数カ月ぶりにまみえる再会の席。やはり名月の下が望ましい。たまには無ぶ粋すいに雲を払うのもよいでしょう』

　素そ朴ぼくな感想を言ったら、とんでもないことを教えられた。

　さすが、こちらが考えるよりも遥かに人間離れしている……。義姉の声と語らいながら、しみじみと護堂は思う。やがて、小さな四阿あずまやが見えてきた。

　山の開けた場所に、壁のない屋根だけの小屋が建っていたのだ。

　そして、四阿の前にたたずむ佳人こそ、武林の至し尊そんたるカンピオーネ。

「よく参りました、我が弟・草くさ薙なぎ護ご堂どうよ！」

　かくして、義姉と義弟は二カ月ぶりに対面したのである。

3

　姓は羅ら、名は翠すい蓮れん、字あざなは濠ごう。

　二〇〇を超す齢よわいながら、容よう貌ぼうと美しさは十代後半の処女おとめである。羞しゅう花か閉へい月げつにして傾けい国こく傾けい城せいのかんばせは、まさしく絶世と呼ぶに足る。

　今こ宵よい、身にまとうのは天てん女によを思わせる漢かん服ふくであった。

　長い袖そでと裾すそがひるがえる衣装の趣おもむきは、天帝の宮殿もかくやと錯覚させてくれる。

　しかし、彼女は武の至し極ごくたる武ぶ侠きようにして、道どう家けの頂点たる道どう姑こなのだ。その身に刻みこんだ技芸と見識は、ほかの全てのカンピオーネを凌りよう駕がする。

「おまえも好きにくつろぎなさい。すわるもよし、寝るもよし。月を愛めでるのにあきれば、夜のささやきに耳をかたむけるのもよいでしょう。ふふ、淮わい海かいの武丘山にて清風を楽しんだ七しち賢けんの故事に、魔王たるわれらが倣ならうのも趣向というものです」

　と羅翠蓮は告げ、自みずから腰を下ろした。

四阿あずまやのなかにしいてあった、白びやつ虎こ（！）の毛皮の上にである。

見れば、同じものがもう一枚しいてあった。義弟のために用意してくれたのだろう。このとき、護堂は冬用のコートを着ていた。だが、所しよ詮せんは東京用の上着である。こんな標高の高い山で頼りになるはずがない。

高山の冷気がしんしんと染しみいり、容よう赦しやなく体を冷やす。

正直、この毛皮はありがたい。護堂はすぐに腰を下ろし、あぐらをかいた。しばらくすれば腰と足もすこしはあたたまってくるだろう。

ついでに白虎の縞しま模も様ようを撫なでてみる。極上のなめらかさだった。

「これ、やっぱり本物から剥はいだとか……？」

「さて？　いつのまにか聖教の信徒より献上されていた品です。どのようないわくがあるかは、わかりかねますね」

義姉の答えで、護堂は逆に確信した。絶対に本物だと。

羅ら濠ごう教きよう主しゆにレプリカ品を献上する愚おろか者ものが配下にいるとは、とても思えない。

「空腹であれば、こちらをつまみなさい。おまえを招くにあたって、ひさしぶりに姉も厨ちゆう房ぼうに立ち、庖ほう丁ちようの技を振るってみました」

「え？　姐ねえさんの手料理!?」

愕がく然ぜんとする護堂の前で、羅翠蓮は軽く手を振ってみせた。

直後、ふたりの間に忽こつ然ぜんと数枚の大皿が顕あらわれる。盛りつけられているのは、彩いろどりもあざやかな三品の中華料理だった。

一皿目は豚ぶたとおぼしき厚切り肉を菜なっ葉ぱの上に盛りつけ

た料理。

　二皿目は三角形に積みあげた十数本の春巻き、ただし皮がなぜか紅あかい。

　三皿目は透明な湯スープ。そこに浮かぶ雲ワン呑タンまで皮が透明にすきとおっていて、なかには野菜や肉を刻んだとおぼしき具材が入っている。この中身がなんと赤・橙だいだい・黄・緑・青・藍あい・紫むらさきと虹のごとき七色で、万まん華げ鏡きようにも似た輝きを放つ。

「……実は料理とかできる人だったんだなあ、姐さん」

　護堂はしみじみとつぶやき、感嘆した。どの皿も驚くほど美しい。

　味だけでなく見た目まで芸術的に彩いろどろうとする一流シェフの創作料理。そんな雰ふん囲い気きと極上の匂においが抜群の美味を期待させてくれる。

「羅翠蓮にこのような心得があること、決して他言してはなりませんよ。かつては羅家の娘として女人の身にふさわしき教えも受けましたが、今のわたくしは武ぶ林りんの至し尊そん。厨房にて腕を振るうなど、身分にふさわしくありません」

　義弟の賛さん嘆たんを受けて、羅翠蓮は満足げに微笑ほほえんでいた。

「只ひとりの義弟を歓待するため、あえて節を曲げたのです。ふふふ、あまりにひさしぶりすぎて多少手間取りましたが、存外とよい出来映えです」

　不思議な料理を前にして、護堂は遠慮なく箸はしを取った。まず厚切り肉をつまむ。

　驚いた。数ミリほどの薄さに削そぎ取った豚肉を何十層もミルフィーユ状に重ねたものだったのだ。口のなかで淡雪よりもあっさり溶けながら、濃厚な肉の旨うま味みを振りまく。

　次は紅い春巻き。さくさくの紅い皮から人参の甘味を感じた。

　中身は甘いソース。甘い芋いも類るいを何種類もすりつぶして混

ぜ、さらにとろみを加えたものだ。複雑玄げん妙みような甘味が舌を心地よく包みこむ。それでいて甘さがまったくしつこくない。

　そして、透明な湯スープと虹色の輝きを秘める雲呑。

　スープをふくむと、絶妙な清涼感と酸味が口をさっぱりしてくれる。虹色の雲呑を噛かみしめれば肉と魚の旨味、野菜の滋じ味みなどが幾種類ものハーモニーを舌の上で奏かなではじめる。この一品については、もはや護堂ごときでは食材も調理方法もまったく見当がつかない。

「うん。どれもめちゃくちゃ美う味まいよ。すごいな」

　お世せ辞じ抜きで護堂は絶賛し、急ピッチで箸と口を動かしていく。

「もしかして、ときどき鷹よう化かにも作ってやったりするとか？」

「とんでもない。師のために弟子が日々の食事を作るのは修業の一環でしょう。が、その逆は師弟の間であってはならないこと。今宵、わたくしは七〇年ぶりに厨房へ入ったのです」

「……そっか」

　なるほど、こういう日々が『甥おい』を鬱うつ屈くつさせていったのか。

　絶品料理とともに、微妙な気分まで味わう護堂だった。それにしても、今食べているのがハレー彗すい星せいと似たような頻ひん度どでしか遭遇できない幻まぼろしの料理だとは……。

　ともかく、護堂が義姉の心づくしを食べ終えた頃。

　羅翠蓮はかたわらに置いてあった月げつ琴きんを何気なく取りあげた。

　軽やかにつまびく。澄んだ大気に満ちるのは、天上の雅が楽がくにも等しい調べ。清明にしてのびやかなる謡も、琴の音色を追うように響きわたる。

琴を置く、曲きよく几きの上

慵ものうく坐ざし、但ただ情を含む

何ぞ故ことさらに揮き弄ろうを煩わずらわさん

風ふう弦げん、自おのずから声有り



　べつに芸を披露するつもりなどなく、興が乗っただけだろう。

　俗人が鼻歌を口ずさむように楽器をつまびき、詩を吟ぎんじる。ただ、羅翠蓮はこの道においても天てん上じよう天てん下げにならぶ者なき名手。

　唯ゆい一いつの聴き手としては、嫋じよう々じようたる音の遊びに陶とう然ぜんと聞き入りたいところだが。

　そろそろ訊きいておくべきだろう。彼女の弟子が『絶対』とまで言い切った懸けん案あんのことを。

「姐さん。もしかして、俺に何か話があるんじゃ？」

　護堂が水を向けると、義姉は演奏の手を止めた。

「そういえば、そのつもりでおりました。ひとつ昔話をしたいと思うのです」

「昔話？」

「ええ。もう一五〇年ほど昔でしょうか。当時、わたくしはすでに武ぶ林りんの至し尊そんとして江こう湖こに君臨する身でしたが、所用あって土ト耳ル古コ国を旅しておりました」

「そういや、この間もわざわざ日本に来たもんな」

「かの地でわたくしは、世にも稀まれなる神具と巡りあいました。ええ、『まつろわぬ神』を生み出し、世に解きはなつという非常に珍しき品に」

「——神様を生み出す神具!?」

　神具とは、天上の叡えい智ちや聖なる呪じゆ術じゆつの法則を刻みつけた魔導書のようなもの。

　不ふ朽きゆう不ふ滅めつの属性を持つものも珍しくなく、世に出てきたら最後、きわめてあつかいに困る代しろ物ものだ。護堂も何度となく手を焼かされた。

「紆う余よ曲きょく折せつの末、わたくしは顕あらわれた神を倒し、神具の力も封じこめました」

「ああ……そりゃよかった」

　かつての勝利を義姉が淡々と語ったので、護堂はホッとしたのだが。

「このとき、封じた神具も念のため持ち帰り、保管しておいたのですが」

　話がいやな方向に向かっていくような。

「つい先日、いつのまにか力を回復させた神具がふたたび『まつろわぬ神』を生み出そうとしていることに気づきました」

「そのあからさまに危険な神具ごと、すぐ始末したんだよな⁉」

　いや。こういうとき羅翠蓮が言いそうな文句も、実は思いついていた。

　しかし、内心の不安を無視して、護堂は勢いこんで訊たずねた。いくら破は天てん荒こうな義姉とはいえ、さすがにそこまではすまいと——。

　すると麗うるわしき魔教教主は、一〇〇万の禁きん軍ぐんをひきいる大だい元げん帥すいのごとく顔を鋭くした。

「まさか。あの時点ではまだ、神具が生み出すのは『まつろわぬ神』の芽にすぎませんでした。そのような弱敵に、羅濠の掌しようを受ける資格などあるはずもなし。相手になどしては、我が誉ほまれに傷がつきます」

　不安を的中させてくれた義姉は、さらにこんなことまで言う。

「護堂。おまえもまだ王としての見識が足りぬようですね。猛省しなさい」

「い、いや。それよりも問題はさ。姐さんがスルーした『まつろわぬ神』未満か？　そいつを生み出した神具の方だろ！　そのあと、どうなったんだよ⁉」

「ふふふ。姉に抜かりはありません。もちろん手は打ちました」

　義姉が不敵にほくそ笑む。

　だが、いやな予感は晴れない。むしろ増大していく。こういうときの羅翠蓮は絶対に期待を裏切ると、経験則で知っているからか——。

「あの神具はわたくしに復ふく讐しゆうを遂とげようとしておりました。ですが、あのような者どもを返り討ちにしては羅濠の名折れ。そこで伝えたのです」

　嗚あ呼あ。ということは、やはり。

「倭わ国こくの都・東とう京けいに我が義弟・草くさ薙なぎ護ご堂どうあり。羅濠との再戦を望むのであれば、まず弟を斃たおし、汝なんじらの力を証あかし立だてせよ。全てはそれからである、と」

「やっぱりか……。せめて事前に相談してくれ」

　うなだれる護堂に、義姉はやさしく微笑みかけてくれた。

「これは姉の大いなる愛、大だい慈じ大だい悲ひの心より出た、おまえへの試練です。この戦いで武ぶ勲くんを重ね、英雄・大だい侠きようへの道を進むのですよ」

「まあ、そんな状況だとやるしかないし、やるけどさ」

　我ながら、なんと順応性が高い。自分の対応力に感心しつつ、護堂は言った。

「俺は姐さんが倒した神様の名前をふたつしか知らなかったけど、やっぱりほかにもいろいろ戦ってたんだな」

　護堂の知る羅翠蓮の戦績は、阿あ吽うん一いつ対ついの金こん剛ごう力りき士しと女神ガーヤトリーのみ。

　まあ、この義姉である。あちこちでいろいろな神様と戦ってそうだとは思っていたが。

「ええ。わたくしが一五〇年前に斃した神の名はサトゥルヌス。羅馬ローマ帝国の神でした。大地に属する豊ほう穣じようの神。そし

て――」

「そして？」

「まだいろいろといわくがあったようにも思うのですが、覚えておりませんね」

　自みずからの戦歴を語ってから、きっぱりと羅翠蓮は言った。

　このあたり、昔のことだから記憶が曖あい昧まいというより、過去の戦いを振りかえる気など皆かい無むであるために見える。

　姐さんらしいと肩をすくめてから、護堂はいちばんの疑問を口にした。

「神具が復讐しようとしてた……。姐さん、さっきそう言ったよな？」

「そのとおりです。あの神具『サトゥルナリアの冠かんむり』は命なき器物でありながら会話し、いくばくかの神性すら宿す存在。聖なる器うつわに意思と知覚が宿ったか、何らかの精霊が取とり憑つきでもしたのでしょう」

「天あまの叢むら雲くもの同類か！」

　まあ、劍けんであり神でもある天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの方が遥はるかに格上ではあろう。

　しかし、厄やつ介かいな代物であろうことは疑いようがなかった。

　その後、護堂はふたたび〝あの薬〟を渡された。

　義姉が手ずから調合したという、水銀色の秘薬である。

　飲めば東京に送りかえせるというから、仕方なく飲みくだす。直後、魔教教主は『縮しゆく地ち神しん功こう』なる瞬間転移の術をかけ、護堂は歌か舞ぶ伎き町ちようの雑居ビル屋上でうずくまっていた。

もちろん陸鷹化はいない。廬ろ山ざんで特訓（？）中だ。

帰京した護堂は家に帰らず、すぐにいつもの仲間たちと連絡を取った。厄介な敵が草薙護堂を倒すため、東京に来るらしい——と。

「というより、すでに来てるんじゃないですかねェ……」

護堂が東京と廬山を往復した日の深夜。沙さ耶やの宮みや家別邸での緊急会議中。

苦い口調で言ったのは甘あま粕かすだった。恵え那なは山やま籠ごもり中で不在だが、エリカ、祐ゆ理り、リリアナも駆けつけており、もちろん馨かおるもいる。

「たしかに。それだけの移動時間は十分にあっただろうしね」

部下の意見に、馨がうなずいた。

「でも、祐理は神の気配を感じ取ってないのよね？」

「はい。最近、そのような感覚は何もありませんでした」

エリカに確認されて、媛ひめ巫み女こはきっぱりと言った。

「神具が生み出したのは、まだ神でないもの——『まつろわぬ神』未満だと、教主はおっしゃったのですね？」

これはリリアナの確認だ。護堂はうなずき、そしてぼやく。

「ああ、たしかに。くそ、向こうで姐さんに細かく訊きいとくんだったか」

「どうかしら？　ああいう御方だし、護堂があれこれ訊いたところで、こちらの知りたいことをちゃんと教えてくださったとは思えないわ」

「たしかに。陸鷹化などは、その辺をそこそこやれるようですが」

紅と青の騎士たちのコメントに、護堂はうなずいた。

とはいえ、魔教教主を最も深く知る少年でさえ、『そこそこ』が限界なのだが。

「まつろわぬサトゥルヌスのことは、別方面から調査してみましょう」

　気持ちを切りかえるように、エリカが提案した。

「一五〇年前とはいえ、『まつろわぬ神』とカンピオーネが対決したのよ。現地近くにいた当時の魔術関係者が記録を残していた可能性は高いわ。ミラノの《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》に連絡を取って、大至急調べてもらいましょう」

「そうか。トルコなら、結構イタリアから近いもんな」

　ヨーロッパとアジアの境目といわれる土地柄のことを、護堂は思い出した。

　その夜の会議は終わり、翌日。

　甘あま粕かすはじめ正せい史し編へん纂さん委員会の面々が東京都内を走りまわり、神具『サトゥルナリアの冠』とやらを捜索してみたが収穫はなく。

　何かの霊視が降りてくればと、祐理も瞑めい想そうにふけったが天てん啓けいはなく。

　リリアナも魔女術で探たん索さくしてみたが、成果はなく。

　しかし、ほかの朗報はあった。護堂の携帯に陸鷹化から電話がかかってきたのだ。

「無事だったのか、鷹化！」

『ええ、どうにか。ま、師し父ふがどこからか調達した窮きゆう奇きなんてバケモノを追ったり追われたりして、さんざん山を駆けまわってクタクタですがね。今は廬山のふもとでちょっとサボり……じゃなかった、休憩中です』

　破格の天才児という器を持ちながら、このしたたかさと小こ狡ずるさ。

　こいつらしいなと苦笑する護堂に、陸鷹化は言った。

『師父はあんなことを言ってましたけどね。ありゃ無理に倒しに

いったら、手痛いしっぺ返しを喰くうのはまちがいないバケモノです。安全運転でじっくりしとめますよ』

　師が師なら弟子も弟子か――。師父の虚きよ言げんをなんとなく見抜いているようだ。

　その鋭さに感心してから、しかし、護堂はこんなことを訊いた。

「なあ鷹化。相手はどんなバケモノなんだ？」

『ええと、体つきは虎とらと牛の中間ぽい感じで、翼があって、ハリネズミみたいな毛並みなんですよ。吠ほえる声は犬っぽいですかね。人間なんか、頭からバクっと丸まる呑のみにしちまいます。虎を狩るようにはなかなかいきませんねえ……』

　ちょっと想像しがたい獣けものの描写に、聞き捨てならない発言が付け加わる。

　きっと素す手ででの虎狩りだったのだろう。ひそかに確信する護堂へ、鷹化は言った。

『とにかく凶暴なうえに頭もいい、厄介な曲くせ者ものです。こいつが何か？』

「一日でも早くぶっ倒して、姐さんのところに最短で帰ってくれ」

　ひどい指示を出してるなと自覚しながら、護堂は言った。

　そして、今起きているサトゥルヌスの問題について手短に語る。

「おまえなら姐さんに上う手まいこと言って、一五〇年前に起きた事件のあらましとか、その神様の性質とかも聞き出せるんじゃないか？　こっちはすこしでも情報が欲しいところなんだ。悪いとは思うけど、おまえにしか頼めない」

『も、もちろん叔お父じ上うえの御命令とあらば、死力を尽くしましょう』

　遥か遠方の廬山にいる甥おいは、声をひきつらせた。

『いろんな意味でむずかしいですけどね。獲物を狩るのもですが、狩ったあとも。いや、あとの方が三倍は厄介だな……。ですが、ま

あ、なんとかしてみます』

「頼む」

『ただ、師父の庵いおりがあるあたりは廬山の奥地ってだけじゃなくて、師父の結界で封じられた禁足地でもあります。ネットもなければ携帯の電波も通じません。というか、電気ガス水道まるごとないところです。しばらく音信不通になりますが、そこはご勘かん弁べんを』

　たしかに、日本でいえば屋や久く島しまか白しら神かみ山地を彷ほう彿ふつさせる大自然のなかだった。

　義姉と再会した場所を思い出して、護堂は納得した。

『なにしろ、ヒマつぶしのゲーム機すら持ってけない場所です。前に衛星携帯を持ちこんだら、粉々にされたんですよ。現代国家の堕だ落らくは蒸気機関の発明からはじまったとか本気で考えてますからね、師父は』

「エジソンが電気を発明するより前なんだな……」

『何かの用事で人里に行けるときがあったら、パソコンでもチョロまかして中間報告とか送りますよ。まあ、そういう機会はすくないと思いますが』

「そこは法にふれない範囲で上手くやってくれ」

『なら大丈夫でしょう。一、二分も無断借用すれば、事足りますから』

　やんわり釘くぎを刺すと、逆に義理の甥は自信ありげに請うけあった。

『そうそう。廬山の僕につなぎを取りたいときは、新しん宿じゆくにいる連中を使ってください。では叔父上、鷹化はこれにておいとまいたします』

　エリカから連絡があったのは、陸鷹化との電話を終えた数分後だった。

　一五〇年前、トルコに顕けん現げんした『まつろわぬ神』サトゥ

ルヌス。彼が地上に残した聖なる果実を、《赤銅黒十字》の仲間が確保に成功したと。

4

　遠くイスタンブールから『投とう函かん』の魔術で、その小箱は送られてきた。

　差出人はエリカの仲間である。トルコ最大の都市イスタンブール常駐員である彼は、この国で魔ま教きよう教きよう主しゆが戦った痕こん跡せきを調査し、あっさり成功したらしい。

　まずトルコ国内での、ここ二〇〇年間の『まつろわぬ神』出現記録をチェック。

　一三八年前、アナトリア平原に大地の神が顕けん現げんしたという記録に注目し、すぐ現地へ。当地の長老格である魔術師と面談し、幸いにもその父親が現場地域の調査人だったと判明。

　かくして、緊急の聞き取り調査が実施されたとか。

　結果、当時の記録は『とにかく大地の神とカンピオーネの誰からしい人物』が戦った程度の代しろ物ものだと判明。だが、幸いにも資料として採取された『果実』を確認できたという。

　報告を受けて、エリカはすぐ連絡したそうだ。

「この際、合法・非合法は問わないわ。手段は選ばなくていいから、大至急『果実』とやらを借りてきて、わたし宛あてに送って頂ちよう戴だい！」

　というわけで、驚くべき速さで『果実』入りの小箱は届けられた。

　かつて『まつろわぬ神』サトゥルヌスが地上に残したという、聖なる果実。これにふれた祐ゆ理りがついに霊視を得た。

「サトゥルナリアの冠かんむり——まつろわぬサトゥルヌスを生み

出す神具は今、あちらに」

　祐理の導みちびきで甘あま粕かすが車を走らせ、到着したのは葛か西さい臨りん海かい公こう園えん。

　ここから程近い沖合に〝根づいて〟いるという――。

　このとき、実に護ご堂どうの廬ろ山ざん訪問から二四時間後。一二月一一日の夜であった。

「こんな短時間で、よくここまで特定できたもんだよ……」

　正せい史し編へん纂さん委員会の〝コネ〟で借りた海上保安庁の巡じゆん視し艇ていで夜の東京湾に乗り出して、護堂はしみじみとつぶやいた。

　これなら、陸りく鷹よう化かに無茶な指令をくださなくてもよかったかもしれない。

　感心していると、エリカに〝当然〟という顔でうそぶかれた。

「それだけ草くさ薙なぎ護堂の陣容が充実したのよ。世界中の魔術結社から六、七人ずつ最精鋭を出させても、わたしたちにはどこもかなわないんじゃないかしら？　戦闘力・調査力・霊感・魔力・交渉手腕・ネットワーク……全てが飛び抜けてるもの」

　エリカ、祐理、リリアナ、恵え那な、甘粕、馨かおる、それと陸りく鷹よう化かもか。

　近しい仲間たちを思い出して、護堂はうなずいた。

　ひとりひとりを見れば、決して最高レベルの達人・超人ではない（そうなりうる才能の持ち主は多いが）。しかし、このメンバーが集まったときの全方位的な能力の高水準さ・バランスのよさは特筆に値あたいするだろう。

「ま、それでも神様相手にはいつも危なっかしいけどな……」

「われわれの場合、並の怪異や魔術師と対決することはまずないですからね」

　護堂の感想に、リリアナが苦笑して応じた。

リーダー格の護堂とミラノの騎士たち、そしてもう一名がこの巡視艇に乗り合わせる仲間の面メン子ツである。最後のひとり、祐理がここで首をかしげた。

「ですが護堂さん。今回の件、恵那さんにお報しらせしなくてもよろしいのですか？」

「ああ。縁えん起ぎのいい話じゃないけど、何が起こるかわからないしさ」

「と、おっしゃいますと？」

「これから俺たちがまずいことになって、ほかの誰かが後始末をしなきゃいけなくなったら……いちばんの候補は清せい秋しゆう院いんだろ？」

自分がロクでもない保険の話をしていると自覚しながら、護堂は言った。

もちろん最悪の展開だが、万一にそなえて悪いことは何もない。実際、馨と甘粕が巡視艇に乗ってない理由はそれもあるだろう。関係者の全滅を防ぐという……。

「あいつの場合、向こうで待機してろって頼んでも、勝手に山から下りてきそうだし。今は報せずにおこう」

「そ、そうかもしれませんね……」

幼なじみでもある媛ひめ巫み女こ仲間の性格を思い出したのだろう。

祐理は困ったようにあいづちを打ってから、不意に表情を凜り々りしく引きしめた。

「さきほど視みた『冠』の霊気を感じます。お気をつけください」

目的までもうすぐらしい。護堂だけでなく、エリカやリリアナもうなずいた。

そして、ついに『サトゥルナリアの冠』と対たい峙じを遂とげ

た。

　葛西近海の海面に〝根づいて〟いた石造りの紋章。その形は大きく翼を広げた『鳥』に見えなくもない。そして発見直後。

　この『鳥』の上に、ヤドリギに似た巨木が唐とう突とつに生まれたのである。

　しかも、ぐんぐん巨大化をはじめ、あっというまに樹齢一〇〇〇年級の巨木――いや、神しん木ぼくが誕生してしまう。

　神木はカンピオーネへの敵意を、幹にも枝にも葉にもみなぎらせていた。

　強烈な呪じゅ力りょくも放出しはじめる。明らかに護堂と戦うつもりだった。

「まさか、自然遺産みたいな『木』にケンカ売られる日が来るとはなあ……」

　それも東京湾の海面上で。本当にデタラメにも程がある。

　巡視艇の甲かん板ぱんから猛たける巨木の威容を見あげて、護堂はしんみりとつぶやいた。

「やっぱり、あれが姐ねえさんの言ってた『まつろわぬ神』の芽か？」

「どうでしょう？　判断するには材料がすくないですね」

「なら視える人材に視てもらうのがいちばんよ。ねえ祐理――祐理？　どうしたの？」

　リリアナは判断を保留し、エリカが判定をゆだねようとして。

　護堂たちは気づいた。媛巫女がおののきながら見つめる先にあるものを。神木の枝のひとつに、灰色のボロ布をまとった者が立っている！

　一応、人型をしていた。毛布か外がい套とうのような灰色のボロ布で全身を隠している。

まったく素肌が見えない、まさに『灰色の者』であった。

「精霊……いえ、まさか神霊？　かつては神であった聖なる御方……？」

何かを感じたのか、祐理が怪け訝げんそうに灰色の者を見つめる。

すると媛巫女の視線を受けて、〝彼〟は大げさに身をよじり、叫んだ。

『おお、さいはての島の巫み女こよ！　余の失しつ墜ついをのぞくのはやめておくれ！』

耳みみ障ざわりなしゃがれ声。妙に芝居がかった言いまわしだ。

『それは恥ち辱じよくなのだ。敗退の歴史であるのだ。余はかつて敗やぶれ、王の座を逐おわれ、しかし、代わりに新たな王を生み出す者なのだ！』

まるで自分に酔っているかのようなセリフまわし。

あつかいづらそうな相手だが、話が通じるのはありがたい。

「あんたがなんとかって冠——あの神具の意思だか守護霊ってヤツだな。あんた、羅ら濠ごう教きよう主しゆにリベンジしようとしたんだろう？」

神木の枝に乗る灰色の者へ、護堂は呼びかけてみた。

『左さ様よう、左様！　我が最新の敗北は、かの麗うるわしき神殺しに喫きつしたものであった。余はかの者に請こうた。ふたたび汝なんじに挑ませよと！』

灰色の者は自らの体をのけぞらせ、くねらせながら叫ぶ。

エリカとリリアナが目くばせし合い、祐理は不安そうに彼を見つめていた。一見すると滑こつ稽けいだが、相手は超自然の理ことわりを体現するもの。彼女たちは緊張を解いてない。

『しかし、やんぬるかな！　余の挑戦はこばまれた。だが、代わりに若き神殺しの名を得た。そなただよ、草薙護堂とやら。余の新た

な挑戦はそなたに向けるものとなった！』

「いや。俺としては、あんたにすぐ引き取ってもらいたいぞ」

　護堂は苦い表情で言った。

「俺と戦えなんて約束、姐さんが勝手にしただけだし」

『そう申すな。余は今より民たみの精気と活気を集め、力をたくわえる。これによって我が新芽は新たなサトゥルヌスとして甦よみがえるのだ！』

　と、灰色の者は自みずからが乗る巨木を、手振りで示した。

　この木が新芽——『まつろわぬ神』の芽？　護堂は視線を鋭くした。

『頼む。まもなく再さい臨りんする我わが嗣し子したる神、まつろわぬサトゥルヌスとどうか戦っておくれ、草薙護堂！』

　神々の関係者に懇こん願がんされたのは、はじめてかもしれない。

　護堂は驚き、同時に眉まゆをひそめた。

「精気と活気を集めるって……一体、何をはじめるつもりだよ？」

『遥はるか昔に敗れ、零れい落らくした身の余だ。だが、この時節であれば落ちぶれし我が身に神力を呼び込むこともかなう——。くくく。余はいにしえの狂乱と大祭を甦らせ、神殺しであるそなたに挑みたい。それには時が必要なのだ！』

「って何だよ、そりゃ……」

　ほくそ笑む灰色の者を眺めて、護堂はため息をついた。

　準備ができるまで待てと頼む挑戦者、神具の意思だか背後霊らしき灰色の者。浮かれた口調が示すとおり、決して知的ではないらしい。むしろ愚おろかといおうか。

　だが、そういうことなら——。護堂は深呼吸した。

　こちらの力を見せて、東京から早々に退去させられないか。

「鋭く近寄り難がたき者よ、契けい約やくを破りし罪科に鉄てつ槌ついを下せ！」

　いきなり『猪いのしし』を召しよう喚かんした。標的は目の前にある巨大な神木である。

　自然破壊は気がひけるが、これはほんの数十秒で生まれたインスタントな超自然。良心の呵か責しやくというハードルはごく低かった。

　かくして、神木のすぐ前に焔ほのおをまとう闇やみが顕けん現げんし、黒き大おお猪じしに変化したのである。

　オオオオオオオォォォォォォォンンンンンンンッ！

　すさまじい咆ほう哮こうとともに『猪』は神木へ突っ込み、槍やりのごとき二本の牙きばで樹皮を抉えぐり、巨体で幹を打ち砕き、やすやすと粉砕してしまった。

　神木の枝に乗っていた灰色の者は、もちろん足場を失う。

　彼はひょいとジャンプして、なんと空中にそのまま静止してしまった。

『――おお。みごとよな、神殺し。その剛ごう腕わん、実にみごと。だが！』

　神木を粉々にして『猪』が帰還したあと、灰色の者は手放しで賞賛した。

　この直後。宙に浮く彼のまわりに灰色の靄もやがいきなり立ちこめ、ボロ布につつまれた姿を覆おおいかくしてしまった。

『限られた力の余とはいえ、応じる手立てがないと思うな！』

　靄のなかで何かが光る。すると、ふたたび海面の紋もん章しようから木が生えはじめた。

　そのまま、なんと数十秒で新たな神木に成長してしまう！

『そなたが新芽を摘つむのであれば、余は幾度でも甦らせる。どうか大祭の時まで荒ぶるのを待っておくれ！』

　靄が消え失せ、灰色の者がふたたび姿を表す。彼は巨木の枝にひらりと飛びのった。

「まさか、不死ってやつか……？」

　あまりにあっさりと再生されて、護堂は愕がく然ぜんとした。

　今まで幾度か見た不死の神性。大だい地ち母ぼ神しんであるアテナも持っていた。

　まさか大地の神だというサトゥルヌスも不死の神で、その眷けん属ぞくたる神木も不死とか？　思い当たった護堂は、とっさに仲間の少女たちを見た。

「たしかに死と再生の連れん環かんは、蛇へびの地母神などが持つ属性ですが」

「真の『まつろわぬ神』ならともかく、神獣と同位の存在ごときに不死性を体現できるはずないわ。もっとべつの理にもとづく復活劇のはずよ」

「靄で隠されて、しっかりとは視みえませんでしたが……。あの方は『サトゥルナリアの冠』より力を引き出したように感じます。おそらく、あちらに復活の秘密があるのでしょう」

　リリアナとエリカがとっさに推論を述べ、さらに祐理がささやいた。

「護堂。神木の方はひとまずわたしが対処するわ」

　媛ひめ巫み女この語る印象を聞いて、エリカが宣言した。

　彼女の手に魔剣クオレ・ディ・レオーネが忽こつ然ぜんと顕あらわれる。

「祐理とリリィを連れて、あの変わり者さんをお相手してあげて。彼と神具の謎なぞを解けば、まつろわぬサトゥルヌスの復活を待たずして決着がつきそうよ」

　護堂に否いなやはない。リリアナと祐理もうなずいている。

　一方、灰色の者は思し慮りょ深げに言った。

『ふむ……。草薙護堂よ。そなたのまわりには心利きく供の者が揃そろっておると見た。そこを突き崩さねば、どうやら時すらも稼かせげぬか……』

「え？」

　不穏な発言に、思わず護堂は訊ききかえした。何を突き崩すと？

　しかし応いらえはなく、代わりに灰色の者は〝ひゅう〟と口笛を吹いた。すると、神木は巨大な枝と葉を揺らしはじめた。

　さやさや……さやさや……。さやさや……さやさや……。

　楽器でも奏かなでるように、神木の枝々は不思議な音色を発していく。

『実りの祭事は民を狂わせ、酔わせるもの。慰なぐさめるもの。言こと祝ほぐもの。奴ど隷れいはひとときの栄光を得よ。王は玉ぎよく座ざを捨て、鎖くさりを得よ。是これ、春の先駆けたる神が恵む一いつ睡すいの夢……』

　しかも、神木の奏でる音に乗せて灰色の者まで謡うたう。

　音色と言こと霊だまは合奏となり、強烈な呪力を帯び、周囲を満たしていった。

　——直後、護堂は奇妙なイメージを見た。

　大都市の大通りを歩いていた。といっても現代のではない。何処いずことも知れぬ都市。何い時つとも知れぬ時代。とにかく、草薙護堂はとぼとぼと歩いていく。

　まわりでは、人々が浮かれ騒いでいる。歌い、踊り、酒を飲みあかしている。

　そのなかで護堂はうつむき、下を見て、黙もく然ぜんと歩く。

　両手首にはまるのは手て枷かせと鎖くさり。両足首にはまるのは足あし枷かせと鎖。

　そして、二の腕には焼きごてで烙らく印いんが押されていた。新たな地位を示す印。そう、草薙護堂の身分は奴隷である。王ではな

い。自由人ですらない。奴隷なのだ――

「って、何だ今のは!?」

　愕がく然ぜんとして、護堂はハッと顔を上げた。

　神木と灰色の者が力を合わせて仕掛けた呪じゅ術じゅつなのだろう。が、カンピオーネの魔力への耐性を破るにはいたらなかった。やはり『まつろわぬ神』ほどの力はないようだ。

　だからイメージを見ただけで、護堂本人に実害はなかったが。

　不意に組みつかれ、投げ飛ばされた。

「くはッ!?」

　まるで暴漢を退治するように護堂は地面にたたきつけられ、押さえこまれた。

　見れば攻撃者は――なんとリリアナだった。

　虚うつろな目で、茫ぼう洋ようと護堂のことを見つめている。しかも、エリカも同じ目をして護堂に近づいてくる。いや、そのうしろから祐理までもが。

『サトゥルヌスの新芽が復活前である以上、その限られた力で事を成さねばならぬ。それではそなたを……魔王たる男を奴隷に堕おとすのは無理というもの』

　どこからか灰色の者の声が響く。

『だが、しばしそなたの地位を狂わせ、本来の権けん威いを発揮できぬ程度にはできよう。さすれば時も稼げようて、草薙護堂よ』

　エリカが、祐理が、リリアナが顔を寄せてくる。

　身動きできない護堂は、為なす術すべなく彼女たちに唇くちびるを奪われた。

『無論、そなたは神殺し。本気で戦う気になれば、こみあげる闘志で余の呪じゅ詛そなどやすやすと打ち砕くはず。これより当分、そなたを見たら逃げさせてもらうわい。そなたとまみえた新芽も間ま

引びくとしよう。われらの逆縁はもうしばらくおあずけよ！』

　少女たちの唇を介し、経けい口こう摂せつ取しゅで送りこまれる謎の呪詛。

　その直後から、草薙護堂は一年近くかけて築いた仲間たちとの絆きずなを失い、義姉より託された案件のことも忘れ、中途半端な立場で冬休み直前まですごす羽目になったのだ――。

5

　思い出してみると、かなり時間を稼かせがれたのがわかる。

　歌か舞ぶ伎き町ちようの香ホン港コン陸りく家け事務所で、護ご堂どうはしみじみと日数を数えあげた。灰色の者との初はつ遭そう遇ぐうは12／11。静しず花か・明あ日す香かと食事へ行ったのが12／15だ。

　そして、今日は12／21で二学期の最終日。なんと一〇日も経過している。

「おまけにあのメールか……。復活とかいったら、やっぱりサトゥルヌスのことがいちばんありそうだよな……」

　あれは、やはり鷹よう化かがもたらしてくれた報告なのか。確認しなくては。

　とはいえ、今年の冬とう至じは12／22。猶ゆう予よはあまりないのだが――。あせる護堂がいる部屋は応接室らしい。来客用とおぼしきソファに腰かけている。

　目の前のガラステーブルには、固定電話の子機があった。もう一時間ほど、こうして鷹化からの連絡を待っていた。時計を見れば、二二時すぎだ。

「す、すんません。あちらの御山にいる若宛あてに『投とう函かん』の方術でとっくに書状を送ってあるんですがっ。なにぶん、向こうからの折りかえしを待つしかないもので……」

　ドアを開け、入室してきたホスト風のイケメン舎しや弟ていがあやまる。

　平へい身しん低てい頭とうを通りこしてビクビクと落ち着かないのは、おそらく草くさ薙なぎ護堂＝羅ら濠ごう教きよう主しゆの同類と知っているからだろう。

「とりあえず、あと一〇分待ってみます。それで音おと沙さ汰たがなければ、お手間を取っていただいたのに申し訳ないですが、俺はもう行きます」

　できるだけ情報はそろえておきたいが、今は制限時間のある身だ。

　ここを出たら、すぐに護堂は『サトゥルナリアの冠かんむり』のもとへ向かうつもりだった。日付が変わって冬至の日を迎えるまで数時間。早めに動いておくに越したことはない。

「——!?　お、御役に立てず、申し訳ないッス！　こういうときの詫わび、うちの一家だと基本は刺いれ青ずみなんスけど、やっぱ日本っぽく指の方がいいッスか!?」

「ど、どっちもしてもらう気はありませんよ！」

　土ど下げ座ざか叩こう頭とうでもするつもりなのか、両りよう膝ひざをつくイケメンを抱かかえおこそうとしたとき。

　電話の子機が着信メロディをのんきに奏かなでる。歓喜の表情をホスト風イケメンは浮かべ、護堂はひったくるように子機を取り、電話に出た。

「鷹化か!?」

『その声は叔お父じ上うえ。ご壮そう健けんなようで何よりです……』

　電話越しに聞く陸鷹化の声は、珍しく憔しよう悴すいしきっていた。

『いや、ひさしぶりに一〇日も師し父ふのところにいたら、ここぞとばかりに雑用やら稽けい古こやら雑用やら稽古やらを次々と押しつけられまして。なかなか帰るに帰れないでいます。今はどうにか

師父の目を盗んで、電話のある人里まで降りてきました……』

「それより鷹化。冬至の日に何かが復活するってメール。あれをくれたのはおまえか？」

　義理の甥おいが語るのをさえぎり、護堂は言った。

『ええ。例の件、師父がぽつぽつと思い出して、いくつか聞き出せたので。緊急性が高そうな情報をちゃちゃっと送っておきました』

　やはりか。護堂は納得した。それにしても、あのメールの性急さ。

　おそらく師の言いつけを守るため時間に追われていたのと、護堂が『非合法手段は最小限に』と釘くぎを刺したせいで、ああいう形になったのだろう。

「復活するの、やっぱりサトゥルヌスって神様か？」

『ええ。古代ローマじゃ一二月の一七日から二四日にかけて、一週間ぶっつづけでサトゥルヌスの大祭を催もよおしたそうで。その間、延々とどんちゃん騒ぎしてたらしいですよ。もちろん、当時の暦こよみは今のとちがいますけどね』

　陸鷹化の説明に、護堂は首をかしげた。

「じゃあ、どうしてサトゥルヌスの復活は冬至だって断言できるんだ？」

『師父いわく、暦がどうあれ冬至の日でまちがいなかったそうです。理由はきれいに忘れちまっていて、ちょっと教えてもらえそうにないですが』

　陸鷹化はのんきな口調で説明してから、訊たずねてきた。

『でも、何でそんなこと気にされるんですか？　叔父上のことだから、とっくに妙な神具を封じるなりして、対処されてるんでしょう？　きっとそうされると思って、とりあえず日取りのことだけお報しらせしたんですから』

　さすが陸鷹化。草薙護堂が好む戦法をちゃんとわかっている。

戦いはじめるまでは慎しん重ちようだが、一度はじめたら即断即決の電撃戦が身上。そう、たしかにふだんの護堂なら、とっくに『サトゥルナリアの冠』と対決していたはずなのだ。

「いや。それがちょっと厄やつ介かいなことになってるんだ……」

灰色の者にかけられた呪じゆ詛そについて、護堂は手短に語る。

それを聞いて陸鷹化はしばらく考えこんでいたが、おもむろに口を開いた。

『古代のサトゥルヌスの祭りじゃ、変わった遊びをやったそうなんですよ。身分の逆転……奴ど隷れいと主人がおたがいの立場を入れ替えるんだとか』

「入れ替える……？」

『ええ。奴隷が命令し、主人がそれにしたがう。そうやって秩ちつ序じよをぐちゃぐちゃにして、七日七晩どんちゃん騒ぎ』

奴隷が主あるじになり、主が奴隷と化す。護堂はハッとした。

「じゃあ、灰色のヤツが俺にかけた呪のろいって――」

『それだと思います。このお遊びを再現するための力じゃないかと。叔父上自身と姐ねえさん方、それにまわりの連中を呪じゆ縛ばくして、叔父上のお立場についての記憶とか認識をいじったんじゃないですかね』

「変な呪いだとは思ってたけど、そんな裏があったのかよ……」

『実はですね。一五〇年前、サトゥルヌスが降こう臨りんした土地じゃ、ものすごい大混乱が起きたそうです。こいつがいる街の人間は、いろんなしがらみを忘れて浮かれだすんですよ。家も家族も放り出して、仕事も義務も放り出して、良識や羞しゆう恥ち心しんも忘れて、ひたすら浮かれ、騒ぎ、飲めや歌え、歌い踊っての大騒ぎを永遠に』

「永遠だって⁉」

『ええ。飲み食いするものがなくなったら、泥水や馬ば糞ふんをごちそうの代わりにして。疲れて動けなくなっても、痙けい攣れんし

ながら踊りつづけて息絶えたり』

　おそらく、義姉・羅ら翠すい蓮れんがその目で見た光景なのだろう。

　狂宴としか言いようのない騒乱が起こるさまを想像して、護堂は息を呑のんだ。

『自分がサトゥルヌスを斃たおさなかったら、みな死ぬまでああしていただろう——とは、師父の御言葉です』

「豊ほう穣じようとお祭りの神っていうから、凶悪なことはしなさそうに思ったんだけどな……」

『叔父上たちが喰くらったのは、この権能の限定版ってところですかね』

　やはり『まつろわぬ神』。身が引きしまるのを護堂は感じた。

　もとの神格がどうあれ、禍わざわいをひきおこし、災さい厄やくの運び手となる資質は十分以上に持ちあわせているのだ。すぐにあの紋章の様子を見にいかなくては。

　まつろわぬサトゥルヌスが平和的に振る舞うような存在なら、いい。

　だが、そうでなかったら——

『御ご武ぶ運うんをお祈りしますよ、叔父上』

　護堂の心を見抜いたように、陸鷹化が言った。

『廬ろ山ざんにいる僕にはそれしかできませんしね。いや、そっちにいたってサトゥルヌスの呪じゆ詛そにやられて、お味方できないでしょうが。でも、たぶん何とかなりますよ！』

「おいおい。俺は姐さんみたいに強くないぞ……」

『神様を殺す魔王さまが何を言うんです。叔父上たちの場合、強い弱いじゃなくて〝勝つか負けるか〟じゃないですか！』

　護堂がぼやくと、陸鷹化は陽気に笑った。

『それに敵がムチャクチャなら、叔父上だっていい感じにデタラメですからね。まあ、たぶんどっちもどっちのいい勝負になりますよ！』

　あるいは、最も深く《カンピオーネ》を知る《人間》かもしれない魔王の直じき弟で子し。

　彼の言いぐさに護堂は頭をかき、それから覚悟をかためた。

　今回、もし戦うことになっても仲間はいない。今まで陰に日向ひなたに助けてくれた面々も、今度ばかりは当てにできない。だが、それでもやらねば——。

　護堂は無意識のうちに笑っていた。唇くちびるの端が獰どう猛もうな形にゆがんでいた。

　訊きかれたら、力の限り否定しただろうが。

　草薙護堂はひそかによろこんでいたのである。これで思う存分やれる。敵がはっきりしないのにトラブルの気配だけ感じ取れる状況と、ようやくおさらばできる——。

　これはもちろん、平和主義者にあるまじき鬱うつ憤ぷんであった。

第６章　よみがえるサトゥルヌス

1

歌か舞ぶ伎き町ちようの事務所を出たあと、護ご堂どうは車で葛か西さい方面に送ってもらった。

陸りく家けの舎しや弟ていたちにお願いしたのだ。まあ、彼らの教きよう主しゆと同類項でくくられているようなので、目くばせひとつで察してくれそうではあった。

が、さすがにそれは人として避け、きちんと頭を下げた結果である。それでも思いっきり怖がられたり、恐きよう縮しゆくされたりしたが。

ともあれ数十分後。香ホン港コン陸家の社用車らしきミニバンは、海岸線に沿って湾岸道路をひた走り、護堂を目的地へと運んでくれていた。しかし、真の目的地は東京湾の上だ。

葛西に着いたら、また正せい史し編へん纂さん委員会の力を借りるつもりだったが――。

「うわっ!?　なんスかありゃ！」

運転席でホスト風のイケメン舎弟が叫んだ。

彼の視線は、海の方角に向けられていた。脇わき見み運転になっているが、こうなるのも無理はない。夜の東京湾が煌こう々こうと照らされていたからだ。

幾百、幾千もの小さな青白い焔ほのおが――。

東京湾の上空に浮遊し、ゆらゆらと揺れていたのである。

夜景がウリの湾岸道路ではあるが、さすがにあんなライトアップは予定にないはずだ。

「まるで鬼火というか、漁いさり火びというか……」

ミニバンの車内から海を眺めて、護堂はつぶやいた。

まだ神の気配は感じない。戦うための力も込みあげてこない。だが、確信する。

おそらく、灰色の者と神の芽とやらが陸に近づいているのだろう。

車内の時計を見れば、一二月二一日の二三時二〇分。

神様たちの関係者が午前零時の日付変更を目安に行動するとは考えづらいが、もう猶ゆう予よはないと思った方が無難だろう。

「降ろしてもらえますか？　ここからはひとりで行きます」

護堂は運転席の舎弟に頼んだ。

無数の鬼火と海をめざして、護堂はひとり葛西臨海公園を走る。

こうなると、広いうえに深夜で人ひと気けのないロケーションがうれしい。心おきなく暴れることができ——いやいや。

「まだそうなるとは決まってないからな……」

自じ戒かいするようにつぶやく。が、それにしても。

気分が落ち着かないのを、護堂は自覚した。理由はなんとなくわかる。考えてみたら、はじめてなのだ。カンピオーネとなって以来、いつも誰かが共に戦ってくれた。

だが今夜、はじめて護堂はひとりで戦うことになる。

まあ——。どんな戦いでも勝負どころで頼りにすべきは己おのれ自身。仲間は信じるし、当てにもする。だが、ひとりで戦えない人

間がきわどく勝ちを拾えるはずもない。

　だから、独力で戦うという点はまったく気にならないのだが。

　いつもの仲間たちが今日は誰もいない。その事実が空くう虚きょなのは否定しようがないわけで。また、この状況を作り出した張本人に対するイライラも否定できないわけで……。

　もしかしたら、今の俺はあまり目つきがよろしくないのでは？

　鏡がないので確認できない自問をもてあそびながら、護堂は鬼火の方向へ走る。

　日本最大というふれこみの大観覧車を尻しり目めに遊歩道を駆け抜け、広い芝生に踏み入っていく。ジョギング程度の速さで、まだ全力疾しつ走そうではない。

　そして、無数の鬼火で照らされる葛西の人工渚なぎさが視界に入ったとき。

『ついにめざめたようだな、若き神殺しよ。草くさ薙なぎ護堂よ！』

　海の方向から人影が歩いてくる。

　神具『サトゥルナリアの冠かんむり』の意思もしくは守護霊、灰色の者だった。

「だんまりと自殺したフリは、もうやらないのか？」

　灰色の者の声をふたたび聞いて、護堂はぼそりと言う。

　自分で想像していたよりも、いくらか不ふ機き嫌げんそうな声だった。

『そなたが神殺しとして闘志をみなぎらせた以上、もはや時すらも稼かせげまい。だが、冬とう至じ節せつの到来まではあと数刻……どうにかしのいでみせよう』

　灰色のボロ布より洩もれる声には、挑戦者の意気地がこもっていた。

『余は天てん下か万ばん民みんのため、冬至の日に豊ほう穣じようの神を甦よみがえらせる再生の器うつわ。この甦りを成す力と理ことわりのみが、余に残された神性の全すべて』

　さらに、灰色の者は強大な呪じゆ力りよくを体から放出しはじめる。

　護堂やまつろわぬ神々とくらべれば、もちろん話にならないほど弱い。しかし、神獣たちをやや上まわるほどの力であるのはたしかだった。

『この聖なる日が——冬至の日が近づくにつれて、余の神力は高まっていく。さらに、この都でかき集めた民たみの精気と活気を加えれば！』

　東京湾の上空に浮かんでいた、青白い鬼火たち。これらがいきなり動きだし、加速し、急降下をはじめた。そのまま灰色の者の背中へぶつかり、吸収されていく。

　葛西湾岸を照らす魔性の光はきれいに消え失せ、代わりに灰色の者の呪力が増した。

　カンピオーネである護堂には、まだまだ遠くおよばない。

　しかし、今までよりもひとまわりほど増量していたのはたしかだった。

『これを集めるたび都につまらぬ騒ぎが起き、そなたらに追いまわされる羽目になったが……まあ、その甲か斐いはあったと言えよう』

　サンタの灰色化か。思いあたって、護堂は眉まゆをひそめた。

「あれか。神様たちがなんとなく超常現象を起こすみたいに、あんたも無意識に世界をおかしくできるのか。メチャクチャなやつだな！」

『そなたの供が申しておったであろう？　余はこれでも、かつては神なりし者』

　くつくつと灰色の者は笑い、愉ゆ快かいそうに叫ぶ。そういえば、祐ゆ理りは最初〝彼〟を『神霊』と呼んでいた。たしか肉体を

失い、霊れい魂こんだけになった神の成れの果てだったか。

『あの程度の怪異であれば、まだ起こせる――否いな、起きてしまうのだ。これよりは余がこの落らく魄はくした身で行いうる最大の奇跡を見せてくれようぞ！』

　直後、彼が立つ場所の上空に『鳥』らしき形の紋もん章しようが忽こつ然ぜんと顕あらわれた。

　もちろん『サトゥルナリアの冠』だ。紋章はそのまま空中で高度を上げていく。

「海の次は空に行くのかよ！」

　急上昇した紋章を見あげながら、護堂が叫んだ瞬間。

　公園の芝生にヤドリギ似の巨木が顕れた。灰色の者のすぐ隣に生えてきたのだ。以前と同じく異常なスピードで急成長を遂とげ、樹齢一〇〇〇年クラスの神しん木ぼくに化け身しんする。

　あいかわらずの巨大さと荘そう厳ごんさだった。

「こいつがこのまま『まつろわぬ神』になるってのか⁉」

『左さ様よう。この夜が明ければ、大祭の幕開け。それまでに我わが新芽は真なるサトゥルヌスへと最後の成長を遂げる。刮かつ目もくして見とどけよ！』

　護堂は気づいた。神しん木ぼくの宿す呪力がすこしずつ増大していく！

　これが最高潮に達したとき、『まつろわぬ神』になるのだろう。どうやら、平和的に話し合うという路線は通用しないようだ。

　ならばと護堂は例のいらつきにまかせて、『猪いのしし』を呼ぼうかと葛かつ藤とうした。

　だが、すでにその手は試ためしている。また再生されるだけだろう。どうする？　どんな手で、どんな化身で立ち向かえばいい？

　護堂が自問したとき、神木の枝に無数の蕾つぼみが生まれた。

　巨大な千年樹が生やす、数え切れないほどの枝々。その枝のいたるところに次々と無数の蕾が萌もえ出てきたのだ。しかも、これら全てがいっせいに白い花となって咲く。

　どころか一瞬で枯れはて、黒い実を結ぶ始末。

　かくして、神木の枝々には数万もの黒い実が発生した。

　しかも、この実は驚くべき形だった。直径一メートルほどの球体で、なかほどがぱっくりと裂け、まるで生き物の口のようになっていたのである。

　ザァァ……ザァァ……ザァァ……。

　ザァァ……ザァァ……ザァァ……。

　夜の海風に吹かれて神木の枝々が揺れ、葉と葉がこすれる。すさまじく巨大な神木が奏かなでる音色は異様なほど騒がしく、耳みみ障ざわりだった。

　まるで獣けものの獰どう猛もうな吠ほえ声。草薙護堂への闘争心をアピールしているのだろう。

　――あの実は、たぶんヤバイものだ。カンピオーネの直感が警告していた。だが、どうやって防ぐ。ウルスラグナの化身に、あれの対処ができそうなものはあるか!?

　自然と頭が動きはじめたとき。

「大丈夫だよ、王様。あれくらい、恵え那ながなんとかしてみせるから！」

　護堂は唐突に、おなじみの快活な声を聞いた。振り向く。こちらに近づいてくるのは、いつもの制服に身をつつんだ太た刀ちの媛ひめ巫み女こ――清せい秋しゅう院いん恵那その人だった。

「来たのか、清せい秋しゆう院いん！」

「うん。秩ちち父ぶから東京まで、大急ぎで送ってもらった甲か斐いがあったよ」

　異い名みように反して今日は丸腰の恵え那なは、にやっと不敵に笑った。

「東京に着いたら、おかしなことが起きてる現場に直行すれば、王様に絶対会えると思ってたんだ。ふふ、王様の助すけ太だ刀ち、今日は恵那がいちばん乗りだね！」

「いちばんっていうか、ほかの連中はほら……」

　知ってるだろう、と言うのをはぶき、護堂は困惑しながら恵那を見つめた。

　今回は、しがらみや人間関係を狂わせる厄やつ介かいな敵が相手なのだ。来てくれたのはうれしいし、正直とてもありがたい。

　しかし、例の呪じゆ詛そを使われたら、恵那までもおかしなことになる。

　それがわからぬ太た刀ちの媛ひめ巫み女こではないはず。なのに、どうして？　疑問を目に込めると、恵那はいつもと変わらぬ明朗さで力強くうなずいた。

　——そうか！　恵那の意図を察して、護ご堂どうがハッとしたとき。

『まだ供の者がおったとは……。草くさ薙なぎ護堂よ、そなたの陣はなかなかに多た士し済せい々せいよな。ならば、余はサトゥルナリアの大祭を司つかさどる器うつわとして饗きよう応おうしよう』

　灰色の者が謡うたいはじめた。神しん木ぼくの方もザァ……と枝を揺らしていく。

『実りの祭事は民たみを狂わせ、酔わせるもの。慰なぐさめるもの。言こと祝ほぐもの。奴ど隷れいはひとときの栄光を得よ。王は玉ぎよく座ざを捨て、鎖くさりを得よ。是これ、春の先駆けたる神が恵む一いつ睡すいの夢……』

聞き覚えのある言こと霊だま。八日前、東京湾でも使われた呪詛。

だが、護堂はもう心配しなかった。恵那も平然たる顔つきだ。

灰色の者が唱となえる謡と、神木の奏かなでる音色。このふたつから強い呪術の波動がほとばしっても、何も恐れることはなかった。

「弓矢の冥みよう加があるべくば、我われに武もの士のふの誉ほまれを取らせ給たまえ」

太刀の媛巫女がささやく言霊を聞いて、護堂は右腕の力を抜いた。

恵那は逆に右腕をのばす。この手が求めるのは鋼はがねの神気。彼女にとっても〝相棒〟にあたる存在の気だ。護堂はうなずいて、鋼の使用権を媛巫女に託した。

つかむ。恵那の手は無色無形の神気を引きよせ、つかんでみせる。

「天あまの叢むら雲くもの御み劔つるぎよ。まつろわぬ夷い狄てきを討つため、我わが背せの君きみの御み手てより来たれ！」

仕上げの言霊とともに、恵那は相棒を引き抜く。



護堂の右腕という鞘さやより、相棒——天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを引き抜いたのだ。

「ぬっ!?　なんと神刀を使うか、娘よ！」

恵那の呼びかけに応こたえて顕けん現げんした天叢雲劍を見て、灰色の者が驚きよう愕がくする。

刃渡り三尺三寸五分の豪刀。その刀身は漆しつ黒こくの闇やみ色いろで、ゆるく反そりが入っている。さらに、黒き神刀は破魔の効能を刃やいばに宿した。

これが切り裂くのは、もちろん灰色の者が放った呪詛！

人の身で天叢雲劍を振るえるのは、太刀の媛巫女だけの特権。この呪詛を恵那がまったく恐れなかった理由である。

「清秋院、あっちの方も何か仕掛けてくるぞ！」

一方、護堂はもう呪詛よりも神木に注意を向けていた。

前回のように妙なイメージも見ない。闘志に火がついたせいか、護堂の呪力は大いに高まっている。この状態のカンピオーネに通じるほど、威力ある呪詛ではないのだ。

ならば、目下最大の脅きよう威いは急成長した神木の方。

ザァァ……ザァァ……ザァァ……。

ザァァ……ザァァ……ザァァ……。

護堂と恵那はそろって神木の威い容ようを見あげた。数え切れないほどの枝々が揺れ、葉が揺れ、巨大な幹が揺れ、海辺の公園に不思議な音色を響かせる。次の瞬間だった。

樹齢一〇〇〇年級の大樹が促成栽培した、数万の黒い実。

これらが一気に枝から離れた。空中へ一斉散布され、さながら黒い霧きりが立ちこめるように公園の空をおおい尽くしてしまう。

数万の実はそのまま夜空をただよい、即席の天てん蓋がいになった。冬の星座はもう見えない。

　さらに、実の一部がバラバラと落下してくる。

　地上に激突するといきなり爆散。そこにあった土も、アスファルトも、草木も花か壇だんも塀へいも柵さくも爆発に巻きこまれた。葛か西さい臨海公園のあちこちが次々と吹き飛んでいく。

　実のひとつがすぐ近くで爆裂するのを見て、護堂はうめいた。

「これで俺たちをふっとばすつもりかよ！」

「だから大丈夫だって。恵那にまかせといて、王様！」

　無差別爆撃の開始にも動じず、恵那は天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを左手で撫でた。そして唱える。

「ここに須す佐さ之の男おの命みこと、国を取らんと軍いくさを起こし、小さ蠅ばえなす一千の悪神を率そつす」

　護堂も使う、天叢雲劍を御すための言霊だった。

　神刀の気が媛巫女の体を満たしていく。神の御み霊たまを引きこみ、神獣や半神に匹敵する力を得る恵那だけの切り札、神がかりであった。

「一千の剣を掘り立て、城じよう郭かくとして楯たて籠こもり給ふ」

　神がかりした恵那が持つ神刀・天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ。

　その黒き刀身が、日本刀を模した柄つかが、忽こつ然ぜんと砕け散った。

　それもまさしく粉々に。木こっ端ぱ微み塵じんに。そして、無数の細かい破片となった天叢雲劍の構成要素たちは恵那のまわりをただよい、城郭のように取りかこむ。

「一千の剣、小さ蛇ばえと成りて失せぬ。しかして命みこと、大蛇おろちの尾より一剣を得たり。是これ所いわ謂ゆる、天叢雲劍也。ちはやぶる千せん釼けん破はの鋼はがねなり！」

　かつてスサノオは千振りの剣を突き立てて、城の代わりにしたと

いう。

　それら全てを失った末に得た一振りが天叢雲剣。千もの刃をしのぐ千鈞破のちはやぶる神刀。恵那はこの言霊で、千鈞破の御業を体現するつもりなのだ！

「神刀の威光、かくあれかし！　一ひと太た刀ち馳ち走そうつかまつる！」

　次の瞬間、神刀から生まれた千の破片が飛散する。

　黒い実が霧のように立ちこめる空へ飛び立っていったのだ。そして、厄やつ介かいな爆裂する黒い実たちに次々と突撃し、己おのれを突き立て、貫つらぬきとおし、そのまま爆散させてしまう。

　気づけば、空には無数の爆発という花が開き、爆裂音が轟とどろきわたった。

　そして、黒い天蓋は消え失せた。武勇を示した神刀の破片たちは恵那の手にもどり、ふたたび天叢雲剣の姿で顕現する。

　ザァァ！　ザァァ！　ザァァ！　ザァァ！　ザァァ！

　神木が今までよりも激しく音を立て、おそらく怒りの意思を露あらわにした。

　さらに、灰色の者まで叫ぶ。

『まつろわす鋼の理ことわりを具現する神器か！　恐るべき御み業わざを示すものよ！』

「変な人、うるさい」

　恵那は無造作につぶやいて、灰色の者めがけて駆けた。

　復活したばかりの神刀を標的の胸にあっさりと突き立てる。その一刺しを避けようともせず、灰色の者は串刺しにされた。前に自じ刎ふんしたときのように、彼の肉体は崩壊していく。

　だが、天から声が降ってきた。

『くくく。体を刈り取ったところで意味はないぞ、神刀の娘よ。こ

の冠かんむりがあるかぎり、余とサトゥルヌスの芽は幾度でも甦よみがえる！』

　その声は、神木の上空に浮かぶ紋章が発していた。見覚えのある『鳥』の意い匠しよう。東京湾に根づいていたはずの神具『サトゥルナリアの冠』だった。

「やっぱり、問題はあっちか……」

「じゃあ、恵那は木の方を伐きりに行ってくるよ。あの変なのがちょっかい出してきたら、そっちは王様にまかせてもいい？」

　もちろんと護堂がうなずくや、恵那は神刀とともに駆けだした。

　神木の根元へと飛ぶように走っていく。すると、これをさえぎるように地中から這はい出てきたのは、巨大な緑色の蔓つるだった。

　まるで大だい蛇じやのように鎌かま首くびをもたげてから、鞭むちのようにしなる。

　その蔓の先端が打ちのめそうとするのは、若わか鮎あゆのごとき恵那の体。太刀の媛巫女は猿を思わせる身ごなしでひらりとかわし、さらに神木の根元へ近づく。

　すると、二本目の蔓が地中から出てきて、また恵那は行く手をふさがれた。

　それどころか三本目、四本目も出現し、しまいには十数本の蔓が蛇の群れのように次々と恵那へ襲いかかっていく。

「なんだか八や岐またの大おろ蛇ちみたいだね！」

　スサノオと天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの故事を思い出したらしい恵那も、負けじと神刀を振るう。

　切られた蔓からは紫色の液体が飛び散る。

　さらに、恵那は源みなもとの義よし経つねもかくやという体さばきでひらりひらりと跳びまわり、鞭のような打ちよう擲ちやくをかわしていく。一応、危なげない戦いぶりだ。

　しかし、敵は神獣にも匹敵する強敵。そろそろ『雄牛』あたりで

援護すべきなのか。

　護堂が考えはじめたとき、詠えい唱しようがはじまった。

「ダヴィデの哀あい悼とうを聞け、民よ！　ああ勇士らは倒れたる哉かな、戦いの器うつわは砕けたる哉！」

「え!?」

　悲壮にこだまする言霊。まちがいなく彼女が切り札とする秘術のものだった。

「殺あやめし者の血を呑のまずして、ヨナタンの弓は退かず！　勇士の油を喰くわずして、サウルの剣は虚むなしく還かえらず！」

　声のする方角を護堂は見た。やはり、そうだ。

　銀の長弓を右め手てに、青き光の矢を左ゆん手でにかまえる立ち姿。銀色のポニーテールを揺らす彼女は青黒ネラツズーロのケープをまとい、戦いくさ装しよう束ぞくをととのえている。

「ヨナタンの弓よ、鷲わしよりも速き勇士の器よ。天あま翔かける勲いさおしと罷まかり成れ！」

　そして、ついに青き矢は放たれる。

　神をも射抜く殺さつ戮りくの武器と化し、リリアナ・クラニチャールの手より。

　放たれた青き光の矢は途中で六本に分離し、そのことごとくが神木の太い幹へと吸いこまれていった。

　十数もの巨蔓を操り、恵那に集中していたせいで防げなかったのだろう。

　急所に当たれば神すら倒しうる『ダヴィデの言霊』の直撃を浴びて、巨大な神木はすさまじい速さで枯れていった。

　見る間に水気と瑞みずゞみずしさを一気に失い、からからに乾ききってしまった。

　そして、音を立てて巨木の形は崩壊をはじめ、崩れ落ちた木片は

そのまま粉となり、海風に乗って飛散していく。

　一方、神木の崩壊が進むなか、護堂はリリアナの参戦に驚いていた。

「どうしてここに来てるんだよ!?」

「来ない方がおかしいでしょう。ここ最近、わたしたちの懸け ん案あんだった存在がにわかに活動をはじめ、こんな事態になっているのですから」

　リリアナはむっとした口調で言った。

「逆におうかがいしますが、どうしてわたしが来てはいけないのですか？」

「そ、それはほら、あの灰色のヤツがいろいろちょっかいを出してくるし……」

　これは説明しづらい。護堂は困った。

　例の呪詛を受けて、リリアナは記憶が妙なことになっている。おかげで草薙護堂との関係が微妙に狂い、最初にみんなで『冠』を見に行ったときのことも忘れてしまった。

　天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎを使えば、記憶の狂いは解除できる。

　しかし、上空では灰色の者の本体である『サトゥルナリアの冠かんむり』が健在である以上、何度でも記憶は狂わせられるはず。
堂々巡りになってしまう。

　そんな護堂の逡しゆん巡じゆんも知らず、リリアナはさらに憤ふん然ぜんと言う。

「草薙護堂。あなたはただ、こうおっしゃればいいんです。『俺といっしょに戦え』と、わたしを信じて。すこし面倒な敵かもしれませんが、わたしはあなたの第一の騎士。いかなるときも草薙護堂を補佐し、付きしたがうのが役目なのですから」

「え――？」

今、リリアナが口にした言葉。彼女が口くち癖ぐせのように使うフレーズ。

それにどきりとした瞬間、またも天から声が降ってきた。

『ふむ。そなた、どうやら供の者どもをまた手もとに集めていたようだな。ふふふ。なれば、その苦労を無に帰きさしめるのも一いつ興きようか――』

面白がるような灰色の者の声。こいつ、またやる気か！

イラッという気持ちが湧わきあがるのを自覚した護堂の隣で、リリアナが胡う乱ろんそうな瞳で上空に浮いている『サトゥルナリアの冠』を眺め、そして恵那が天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを片手にこちらへ駆けもどってくる。

恵那と天叢雲劍に頼んで、あの呪詛を迎え撃ってもらおうか――。

一瞬、護堂が考えたときだった。

『大丈夫です、護堂さん。私たちにはもう、あの力は通じません』

耳元でささやく声があった。

やはり、ここにいるとは思っていなかった少女の声。律りち儀ぎなほど丁てい寧ねいで、そしてやわらかな印象の声は、まちがいなく精神感応の霊力によって伝えられたもの。

「――万ま里り谷や!?」

今、媛ひめ巫み女こが伝えた言葉。ということは、やはり。

リリアナと目が合う。銀髪の女騎士は『問題ない』とばかりに深くうなずき、泰たい然ぜん自じ若じやくとしていた。恵那も事情を察したか、『へえ、さすが』という感じでにやりとする。

その直後、天から呪術の波動が降ってきた。

『奴隷はひとときの栄光を得よ。王は玉座を捨て、鎖を得よ。是これ、春の先駆けたる神が恵む一睡の夢、狂騒の宴うたげ……』

　王を失しつ墜ついさせる言霊が護堂とリリアナ、恵那のまわりに満ちる。

　だが、それに対抗するように唱となえる声があった。

「ローマの秩ちつ序じよを維持するため、元老院は全軍指揮権インペリウムの剥はく奪だつを勧告する。獅し子しの鋼よ、その礎いしずえとなれ！」

　この言霊を、護堂はもちろん耳にしたことがあった。

　最も堅けん牢ろうな守備を構築したいとき、紅き悪魔デイアヴォロ・ロツソを名乗る少女が使う秘術だ。

「元 老 院 最 終 勧 告セナトウス・コンスルトウム・ウルテイムム、発令！」

　守護の魔術を宿して、鉄の鎖が生き物のように宙を舞う。

　魔剣クオレ・ディ・レオーネが変形した鎖——これが護堂たちの頭上に描くのはソロモン王も用いた五ご芒ぼう星せい。悪あしき魔術や悪魔から身を守るための印サインだという。

　そして、鎖の五芒星が持つ守護力を上書きする霊力があった。

「凶きようを浄きよめ、災わざわいを退しりぞけ、厄やくを祓はらう。是これすなわち、幸いなる者の霊れい験げんなり！」

　いつも護堂のそばにいる女子たちよりも、さらに幼い声。

　彼女だけが使えるという『禍まが祓はらい』の霊力までクオレ・ディ・レオーネの鎖は宿し、すさまじいことに上空から降ってきた呪詛を防ぎ切ってしまった。



『ぬ――!?』

「まあ、こんなものでしょうね。力の大元が神の権けん能のうであろうと、運用するのは限られた霊力しか持たない神具の意思とやらですし」

　華麗に勝ち誇りながら、獅子の鋼の所有者が近づいてくる。

「ひかりの禍祓いはごく一部なら神の権能も消去できる。絶対に防げると確信してたわ」

　彼女の名は、もちろんエリカ・ブランデッリ。

　紅と黒ロツソネロのサーコートをまとい、戦闘体勢も万端だった。

　その隣には巫み女こ装しよう束ぞくの姉妹もそろっていた。

　ひかえめに微笑ほほえむ万里谷祐理と、妹の媛巫女見習い・ひかりである。

「わたしたちと護堂を疎そ遠えんにする程度じゃなくて、護堂を憎ませるくらいに呪縛できていれば今の状況も変わってきたでしょうけど……。さすがに魔王であるカンピオーネが相手じゃ、そうもいかなかったようね。――あ、それとリリィ」

　いちばん最後に来て主役のような顔をするのは、もうエリカの特技のようなもの。

　その技をいかんなく発揮しながら、彼女は旧友兼ライバルへ言った。

「草薙護堂の第一の騎士はエリカ・ブランデッリの地位と称号よ。いくらあなたでも、譲るわけにはいかないわ！」

　第一の騎士を争う、紅と青の一対。

　ふたりがしばしば見せる、いつもどおりのやりとりだった。

「一体、いつ呪のろいを解といたんだよ……？」

「今日の夕方、護ご堂どうと別れたあと」

　護堂がいちばんの疑問をぶつけると、エリカはあっさりと答えた。

「あのおかしな神霊だか神具の意思が犯おかした最大のミスはね、あんな穴だらけの記憶操作で一〇日以上も時間稼かせぎをしようとしたことよ」

　上空に浮かぶ『冠かんむり』を一瞬見あげて、エリカは挑発的に言った。

「一日か二日の急場しのぎならともかく。長びけば、それだけつじつまが合わなくて不ふ審しんな点が出てくるわ。護堂と話していて、わたしも今日はさすがに変だと思ったもの。だから、何らかの精神攻撃にさらされてる可能性を疑って、ひかりを呼び出したのよ」

「エリカ姉さまから突然電話をもらって、びっくりしました」

　ひかりは朗ほがらかに笑い、護堂に会え釈しやくしてくれた。

「わたしにかかっている全すべての術を試ためしに消去してもらったら、いきなり記憶がもとどおりになったわ。あとはひかりといっしょに、祐ゆ理りとリリィのところを回ったのよ」

「お、俺のところにも電話くらいよこせ！」

　しれっと語るエリカへ、護堂は噛かみつくように言った。

　すると、才さい気き煥かん発ぱつを絵に描いたような少女は意地悪く微笑ほほえんだ。

「あなたの方もいそがしくしていたようだから、遠慮したの。それに自力で呪じゆ詛そを破るくらい、カンピオーネである護堂にはかんたんだったでしょう？」

　なつかしい悪魔の微笑。エリカの専売特許。

ふたたび見られたのはよろこばしいが、どこか釈しやく然ぜんとしない。だが、まあ――。

「とにかく全員がそろったんだから、いいことにするか……」

調子の悪かった歯車が、ついにきっちり噛かみ合うようになった。

そんな気分をかみしめながら、護堂は集まった全員にうなずきかけた。

エリカは不ふ遜そんに、祐理は真しん摯しに、リリアナは凛り々りしく、恵え那なはにんまりと、それにひかりは最年少らしい朗らかさで、そろってうなずき返してくれた。

しかし、天より降ってくる声がひさしぶりの団結に水を差す――。

『いや、いや！　娘よ、余の失態などと言うてくれるな。余としては此こ度たびの結果に満足しておるよ。子し細さいに問題はあっても、そなたらの間をかき乱したおかげでどうにかここまで――大祭の日を迎えるところまで来られたのだから！』

「空を！　みなさん、空をご覧ください！」

不意に祐理が叫び、上空に浮かぶ『サトゥルナリアの冠』を指さす。

「棺ひつぎが……棺が開きます……」

霊視が降りてきたのだろう。震える声でささやく。

直後、空中の『サトゥルナリアの冠』は砕け散った。破片はバラバラと海へ落ちていく。代わりに今まで紋もん章しようがあった空に、黄金に輝く楕だ円えん形けいが出現した。

それは地上の護堂たちからすると、月と同じほどの大きさに見えた。

この楕円から、一筋の流れ星が葛か西さい臨海公園に落ちてくる。地上に激突した瞬間、その場所から巨大な神しん木ぼくが生えてきた。――いや。

今度、生まれた存在は今までの神木とは異なる姿をしていた。

身の丈三〇メートルほどだろうか。外見を端的に言えば、不器用な子供が見よう見まねで造った木彫り人形である。

いちばん大きくて太いのは胴体にあたる部分で、かろうじて人の形に見える。

両足は太く短い。両腕は逆に細く、地面に届くほど長い。頭部は小さく、ちょこんと胴の上に乗っている。そして、五体のあちこちから木の若芽や枝が生えていた。

樹木の茶色を若芽や葉っぱの緑が細かく斑まだらにいろどって、不思議な色合いだ。

「みんな、気をつけて。あいつ、たぶん今までより強いよ」

緊張した面おも持もちで恵那が警告する。

神がかりの遣つかい手ては、神につらなる存在の力を直感したのだろう。護堂も感じていた。まだ『まつろわぬ神』ではない。神と対したときの感覚は体にたぎってこない。

おそらく神木と神の中間程度の存在ではないか。言うなれば半神半木だろうか――。

『まもなく大祭の日の出……余はあくまで、この日を迎えるまでの司祭役にすぎぬ……ここまで来れば、余の役目はただサトゥルヌスの種を招き、地上に送りこむのみ……そろ……そろ……黙るとしよ……うか……』

天から降ってくる声は、ついに途絶えてしまった。

これに決然と反応したのはエリカだった。旧友兼ライバルに目くばせする。

「リリィ、ここで出し惜しみしても意味がないわ。一気にたたみかけてみましょう。恵那さんもいい？」

そして、クオレ・ディ・レオーネを手に走りだした。

リリアナと恵那もうなずき、あとに続く。三人がめざすのは半神

半木の巨人！

「七人の祭司、各おの々おの角つの笛ぶえを吹き鳴らし、甲かつ冑ちゆうのいくさ人はこれに先立ちて進軍す！」

「主のモーセに命じ給たまえるがごとく、彼かの者ら、ミデアン人びとを攻め撃ちけり！」

　駆けながらエリカが唱となえれば、リリアナも謡うたう。

　彼女たちに聖なる殲せん滅めつの特権をあたえる、聖せい絶ぜつ執しつ行こうの言こと霊だまを。

「ヨシュアは告げたり。主はこの邑むらを汝なんじらに賜たまわれりと。兵つわものどもは生者の悉ことごとくを刃やいばにかけ滅ぼし、牛うし羊ひつじ驢ろ馬ばに至るまで殺あやめけり！」

　エリカの体を紅あかい光がつつみこむ。

　細身の剣であったクオレ・ディ・レオーネも、逆ぎやく棘とげ状じようのランスに変形していく。

「ミデアンの男子を悉く殺め、五ご人たりの王を剣にかけて殺め——彼の者ら、生け捕りしもの掠かすめしものを携たずさえ、モーセのもとに詣もうでけり。かくてミデアンの殲滅、ここに成れり！」

　リリアナの体を青い光がつつみこむ。

　サーベルであったイル・マエストロも柄つかが長くのび、薙なぎ刀なたの形状になっていく。

「丈夫ますらおの弓ふり起こし射いつる箭やを……後見む人は語り継ぐがね！」

　そして、恵那も言霊を唱えて天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを振りかざし——。

　三人の少女は、生まれたばかりの半神半木たる巨人へそれぞれ最強の一撃を叩たたき込む。

　エリカは一直線に天あま翔かけて、巨人の脇腹をごっそりと抉え

ぐり取った。

リリアナはひらりと燕つばめのような身の軽さで舞いあがり、巨人の頸けい部ぶを薙なぎ払った。

恵那は稲いな妻ずまのような一刀を巨人の脛すねにたたきつけ、片足を粉々に打ち砕いた。

「防ぎもしないだと⁉」

リリアナの驚きよう愕がくは、三人共通のものだったはずだ。

三つの斬ざん撃げきを受けて、半神半木の巨人は高らかに哭ないた。

ｏｏｏｏｏａａａａａＡＡＡＡＡＮＮＮｎｎｎＮＮＮｎｎｎｎ……。

そして、巨人の体は崩壊していく。ついさっき前身であった神木がヨナタンの弓で撃ち抜かれたときのように。だが、その数十秒後——。

夜空に浮かぶ黄金の楕だ円えんは、ふたたび流れ星を地上に吐き出した。

当然のように、また半神半木の巨人が誕生する。

聖せい誕たんの光景を目まの当たりにして、護堂の体がぞくりと震えた。寒さゆえでも恐怖ゆえでもない。武者震いである。神殺しが戦うべき敵の気配を、すこしだけ感じたのだ。

「さっきよりも力が増している……？」

直感して、護堂は祐理を見る。媛ひめ巫み女こはこくりとうなずいた。

「私も感じました。おそらく時間が経たつにつれ——夜明けが近づくにつれて、あれは『まつろわぬ神』へと近づいていくのでしょう！」

「しかも、何度でも甦よみがえるのか……」

なんと厄やつ介かいな相手だ。護堂は思わず舌打ちした。

ここに集まったメンバーの力があれば、半神半木の巨人を粉砕することはできる。だが、それでは根本的な解決にならないのだ。

「不死のはずがない神木を際限なく再生させる理ことわり、祐理かリリィのどちらかが霊視できればいいのだけど……」

エリカの発言だった。恵那とリリアナも連れて、護堂たちのところへもどってきた。

半神半木の巨人を攻めても意味がないと見たのだろう。

また、巨人の方にも今すぐ護堂や少女たちと戦う意思はもはやないようだ。やけに猛たけっていた今までの神木と異なり、〝彼〟は黙もく然ぜんと――本物の木のように立ち尽くしている。

そして謡うたう。口らしき部位に開いた裂け目から、音色が洩もれ出てくる。

ｏｏｏｏｏａａａａａａＡＡＡＡＡＮＮＮｎｎｎＮＮＮｎｎｎｎ……。

ぞくり。また護堂の体が武者震いした。〝彼〟はああして力を高め、徐々に『まつろわぬ神』へ近づいていくのだろう。

「ねえ護堂。ひとつ提案があるわ」

「なんだよ？」

「あの巨人が〝神〟になりたいのなら、邪じゃ魔ませずに待ってもいいんじゃないかしら？」

仰ぎよう天てん発言に護堂が驚くと、エリカは平然と続きを語る。

「たぶん、あの巨人を倒すために最適の武器は『剣の言こと霊だま』よ。彼が再生する仕組みを解き明かし、その謎なぞごと切り裂くの。そこまでするなら、敵が神木でも『まつろわぬ神』でも大差ないわ。だったら、収穫が多い方と戦うのはありだと思わない？」

神を倒せば草薙護堂は新たな権けん能のうを得る。それを狙ねら

えというのだ。

　エリカの言葉が意味するところを察して、護堂は即答した。

「ありなわけないだろ。神様の力なんて俺には必要ない。欲しい力はもう持ってる」

「欲しい力？　何のこと？」

「みんな、こうして集まってくれただろ？　いっしょに体張ってくれる仲間がいて、俺のことを気にしてくれるんだ。それでもう十分だよ」

　思わず口調がしみじみとしたのは、今回の一件があったからか。

　この告白にエリカは弾はじけるように笑い、祐理はしっとりと微笑んでくれた。リリアナは我わが意を得たりとうなずき、恵那もにやりとする。

「私もごいっしょします、お兄さま！」

「ああ。なんだかんだで、ひかりにもよく世話になるもんな」

　最年少の媛巫女見習いが笑顔で言うと、護堂はうなずいた。

　だが、やはりまだ小学生。今より危険な状況になるなら避難させたい。

　さりげなくエリカに目くばせする。わかっているという感じで視線がかえってきた。さすがの察しのよさだった。そういえば——。

　ひそかに感じていたイライラが、いつのまにか収まっていた。

「それと、やつをサトゥルヌスって神様にしたくない理由はまだあるんだ」

　思い出した護堂は、この神が一五〇年前に到来したときの現象を語った。

　陸りく鷹よう化かが伝えてくれた情報だ。女子たちの顔が一気にひきしまる。

「前ぜん言げん撤てつ回かいね。さすがに騎士として、そんな狼ろ

う藉ぜきを東京で許す気になれないわ。すみやかにあの巨人を無力化しましょう」

　さすがのエリカも真剣な面おも持もちで言う。

「となると、やっぱり『剣』の準備を急ぎたいところだわ」

「鍵かぎを握ってるのはでっかい方じゃなくて、あっちなんだよね？」

　恵那が空に生まれた黄金色の楕だ円えんを指さした。

「祐理、さっき棺ひつぎがどうとか言ってなかった？」

「は、はい。あそこにどなたかが葬ほうむられているような……そんな気がするんです。それでつい棺と。もしかすると、あの灰色の方の棺かもしれません」

「そういや、昔は神だったとか言ってたもんな」

　祐理の推測に護堂はうなずいた。

「いずれにしても、あれがもっと近くに——地上にさえあれば。わたしはともかく万里谷祐理なら、もっと詳細な霊視を得られるかもしれないものを」

　近距離で神に由来するものと接するとき、祐理が示す霊視成功率はおそろしく高い。

　だからだろう。リリアナは悔しそうに言った。すると、

「近づくだけでしたら、なんとかなるかもしれません」

　決然と祐理がささやいた。

「あちらに行っても霊視が得られるかはわかりませんが……とにかくやってみます！」

　と言って、媛巫女は胸の前で両手を組み、瞑めい目もくする。

　祈りの姿勢。そして、祐理の体から淡い白色の光がたちのぼる。この光はそのまま天へと昇っていく。まるで純白の反たん物ものがのびるように、空へと上がっていく。

「幽体分離！　プリンセスの御力か⁉」

　リリアナの言葉で、護堂は思い出した。

　欧おう州しゆう最高といわれる巫み女こ姫ひめプリンセス・アリス。そのひそかな特技は精神感応を応用した幽体分離。肉体はロンドンの館やかたで眠りながら、幽体だけを世界各地に飛ばして活動するのだ。

　あれと同じことを祐理も——。

　アリスの幽体は彼女自身とうりふたつだが、祐理にはまだ無理なようだ。だが、白い燦きらめきはたしかに天あま翔かけ、黄金の棺とやらをめざしている！

　そのまま二分ほどが経たち、瞑目していた媛巫女はいきなり膝ひざを折った。

「お姉ちゃん！」

　妹のひかりがとっさに姉を支え、護堂たちもそばに駆けよって手伝う。

　消しよう耗もうし尽くした様子で祐理はがっくりと膝をつき、ハァハァと息を荒らげていた。幽体分離をしたことで、疲労困こん憊ぱいしたのだろう。

　目の焦点も合っていない。だが、荒い呼吸の合間に媛巫女はささやく。

「どうにか……視みえたことが。護堂さん」

「なんだ、万里谷⁉」

「あ、あの棺の奥に『光』が隠されています。その光こそが、あの不可解な甦よみがえりを起こす全ての源みなもと……。あれを打ち消すことができれば……」

　最後にどうにか息をととのえて、言い残すと。

　祐理は目を閉ざし、そのまま意識を失ってしまった。

「あの奥だって？」

　護堂は困惑して、夜空を見あげた。黄金に輝く不気味な楕円形が浮かんでいる。

　あの奥にあるという光とやら、どうやって封じればいい？　そもそも護堂たちがいるのは地上。あそこまで飛んでいく手段など……ある。

　その方法を護堂は検討し、それから躊ちゆう躇ちよした。もう一回だけ再検討。

　やっぱり、やらなくてはダメなようだ。

「なあリリアナ……最近、よく俺にみずくさいって言ってたよな？」

　いきなり関係ない話題を振られて、女騎士は「は、はい」と答えた。

　困惑しているようだ。『なぜ、それを今？』と。

「こんなときだけ遠慮なく頼むのは申し訳ないんだけど、おまえにしか頼めない。俺をあそこまで運んでくれ！」

　夜空に浮かぶ黄金の楕円形。祐理が『棺』と喝かつ破ぱした存在。

　その威容を指さしながら、護堂はリリアナ・クラニチャールに懇こん願がんした。

4

　護ご堂どうとリリアナが旅立ってから、しばらくののち。

　いきなりだった。半神半木の巨人が吠ほえた。

　ｏｏｏｏｏａａａａａＡＡＡＡＡＮＮＮｎｎｎＮＮＮ！

今までのおだやかな哭なき声から一点。雄お叫たけびのごとき力強い音色を口にあたる裂け目から発して、天をにらむ。

その視線の先にあるのは、護堂たちが向かった黄金の棺ひつぎ！

「やっぱり、あの巨人にとっても、あの棺は重要な場所のようね」

「王様たちが向こうに近づいたのを感じて、のんびりしてられなくなったんだ」

エリカがつぶやくと、恵え那なも推測を口にした。

地上に残った戦闘要員はこのふたり。となれば、やることは決まっている。エリカと恵那が無言のアイコンタクトで意思を共有したときだった。

半神半木の巨人が細い右腕を空にかざす。

その手に忽こつ然ぜんと顕あらわれるのは長い木の杖つえ。先端は二つに分かれており、まるで音おん叉さのような形状をしていた。

さらに、巨人の太い両足から数十本もの蔓つるがうねうねと生えてきた。

そのどれもが太く、長く、生きた大だい蛇じやのように身をくねらせ、鞭むちのようにしなる。

そして、二ふた叉またの杖はその先端から緑に輝く光の球体を生み出した。これが空へ——黄金の棺へと上昇していく！

それも単発ではない。ひとつ、もうひとつという感じで次々と放っていく。

ゆっくりとシャボン玉を吹くような仕草だったが、あの球体がそういう牧歌的な代しろ物ものだと思うほど、エリカはおめでたい性格でもない。

ほぼまちがいなく、空へ上がったふたりへの牽けん制せいだろう。

実際、放たれた球体はかなりの高速で空へ上昇していく。

「ひかり」

「は、はいっ、エリカ姉さま！」

「祐ゆ理りを連れて、この場から退たい避ひよ。わたしも恵那さんも打って出るから、あなたたち姉妹を守り切る余裕がなくなるわ」

「――！　承知しました。お兄さまとリリアナ姉さまをお手伝いするためですね」

　さすが見習いとはいえ媛ひめ巫み女こ。躾しつけも教育も行きとどいている。

　エリカの指示が意図するところを察して、すぐにうなずいてくれた。その表情は幼くとも凜り々りしく、真剣だ。

　まだ意識が混こん濁だくした姉の祐理を支え、ひかりはエリカたちから離れていく。

　そういえば、斉せい天てん大たい聖せいとの戦いでも似たような役を命じられたとか。思いあたって、エリカはくすりと微笑ほほえんだ。なんだかんだで万ま里り谷やひかりも、草くさ薙なぎ護堂とともに円卓をかこむ仲間になりつつあるのだろう。

「じゃあエリカさん、行こうか。あの蔓、さっきから八や岐またの大おろ蛇ちみたいで気になってるし、そっちの露つゆ払はらいは恵那がやるよ」

「あら。本陣を攻める役をもらえるなんて、光栄だわ」

「べつにいいよ。一いち番ばん槍やりはエリカさんに譲るけど、仕留めきれなかったときの二に太た刀ち目は恵那がいただくからね」

　太刀の媛巫女が不敵に言えば、エリカも気取った微笑を返す。

　軽口をたたくようにして役割分担を決め、直後、巫女と騎士は一気に駆けだした。空に奇怪な光球を放っている半神半木の巨人へ。

　エリカも恵那も、身軽さと走力を爆発的に高める術の恩おん恵けいを受けている。

　あと一〇メートルほどで巨人に到達できるという至近距離まで、

風のような速さで一息に走破。しかし、巨人の足から生えた数十もの蔓が生き物さながらに動き、ふたりの行く手をさえぎってしまう。

　この蔓たちに恵那が天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを振りかざし、応戦。

　そうしてできた隙すきに——巨人のふところに飛び込める道筋に、エリカはためらうことなく突撃していった。

　一直線に駆け、槍を突き立てることこそ騎士の本分。

　まさしくその心を体現する鋭さで飛び込み、聖なる殲せん滅めつの特権が宿るランスを突き出して、巨人の胴をまっすぐに貫つらぬこうとする。

　この穂先を受けとめたのは、意外にも機き敏びんだった巨人の左手だった。

　だが、エリカは怯ひるまない。とっさに言こと霊だまを唱となえる。

「クオレ・ディ・レオーネ！　大天使ガブリエルの加護を得て、蹴け散ちらしなさい！」

　立ちふさがる壁を突き崩し、喰くい破ってこそ鋼はがねの獅し子し。

　逆さか棘とげ状じようのランスと化したクオレ・ディ・レオーネはエリカの突撃チヤージと言霊に助けられ、木でできた巨人の左手を貫き、そこから殲滅の特権を流しこむ。

　轟ごう！　音を立てて巨人の左手は爆裂し、豪快に吹き飛んでいった。

　一方、護堂とリリアナは黄金の棺をめざす。

　旅立つ前、銀髪の女騎士は得意の魔女術で視覚を飛ばして、空に浮かぶ黄金の棺を視認。そうして場所の確認をしてから、護堂に寄りそって飛ひ翔しよう術じゆつを使った。

青い光につつまれて、ふたりは空に飛び立つ。

およそ人間が使う魔術のなかでは、最も速く飛べる魔術。飛翔できる距離も長く、地つづきの欧おう州しゆうであれば国境を越えることも可能だという。

これを使えるのは、リリアナのような魔女だけだった。

ただし、自分の知っている場所か、目視した場所にしか飛べないが……。

護堂はふと下を見て、後悔した。眼がん下かに広がるのは夜の黒い海。遠くの方に東京の夜景も見えるが、まるで超高層ビル四〇階あたりの展望台から眺めるような眺望だ。

この状況で、足もとを支えるのはあやしい魔術の光。

かなり心臓に悪い。飛翔術でこの高さまで到達したのは初めての経験だ。飛び立つ前リリアナに訊きいてみたら、彼女は何度か遊びでやってみたそうだが。

「見えてきました、草薙護堂！」

天あま翔かける青き光を操りながら、リリアナが叫ぶ。

上空に浮かぶ黄金の棺——黄金に輝く楕だ円えん形けいの光がどんどん近づいてくる。地上で思っていたよりも大きいことに、護堂は気づいた。

細長い楕円は、陸上競技場のトラックと同じほどの大きさをしていた。

さあ、ここからが本番。護堂が唇くちびるを舐なめたとき。

下方から追ってくる光球に気づいた。緑に輝いている。直径は四メートルほど。

しかも、この緑に輝く球体は明らかにリリアナの飛翔術より速かった。これがざっと見たところ二、三〇は飛んでくる！

光球のひとつ、最も先を進んでいるものが飛翔術に追いつきそうになり——

　ボンとはじけた。風船が割れるように破裂したのだ。途端に衝撃波が駆け抜けた。リリアナが維持する飛翔術の青き光も揺れ、護堂たちの体も大きく揺さぶられた。

「くっ……！」

「やっぱり、かんたんにはたどり着けないか」

　リリアナは歯を食いしばり、護堂はひとりごちた。

　実は空中での妨害を心配して、はじめリリアナに頼むのを躊ちゅう躇ちょしたのである。だが、ほかに手はないとあきらめ、仕方なくお願いしたのだ。

　なにしろ飛翔術は直線的に飛ぶだけ。

　空中で攻撃されたら、はずれるのを祈るしかできないらしい。
だったら。

　護堂は食い入るように黄金の棺を見つめた。考える。本当は、ここまでリリアナに運んでもらったら、自分だけ棺のなかに〝落として〟もらうつもりだった。そして、棺の奥とやらをこの目で確認してみようと。

　だが、この状況でそうしたら、ひとり空に残るリリアナはまず助からない。

　当座のピンチをふたりそろって切り抜ける方法はある。しかし、それはそれで彼女をべつの危険にさらすことに――

　そのとき護堂は、リリアナが軽くため息をつくのを見た。

「草薙護堂。またわたしにあの言葉を言わせるおつもりですか？」

「え？」

「先ほどのように言ってくだされば十分です。大体、今までどれだけの危険をあなたと乗り越えてきたと思うんですか？　その心配は今さらです」

　思わず、護堂はリリアナの顔を見た。

　手厳しい言葉のわりに、妖精めいた少女は悪戯いたずらっぽく微笑んでいた。

「今さら……かな？」

「ええ、かなり」

　即答されて、護堂は恥じ入った。たしかにそうかもしれない。

　考えてみたら、リリアナたちをさんざん危険につきあわせてきたのは草薙護堂なのだ。そして、物好きにもずっとつきあってきてくれた彼女たちなのだ。

　だったら――最後まで肩をならべて危地へ突っこむ方が、自分たちらしい。

「リリアナ！　このままあそこに、光のなかに突っこめ！」

「はい！」

　次の瞬間、ふたりをつつむ飛翔術の光は黄金の棺へと突入していった。

第７章　冬の祭典来たりて

1

　黄金に輝く楕だ円えん形けいの光。

　そのなかに突っこむと、まず金色の光が視界を満たした。

　そして、なんともいえないフワフワした浮遊感。唐とう突とつな落下感。ぐるぐると振りまわされるような感覚。それらを続けざまに味わってから、護ご堂どうの視界は回復していった。

「何なんだ、ここは？」

　目の前に広がるのは、黄金に輝く小麦畑であった。

　たわわに実る麦の穂が、まるで財宝のような輝きを畑にもたらしているのだ。これが見渡すかぎり続いている。どこまでも続いている。

　無限に広がる大宇宙ではないが、これではまるで無限に広がる小麦畑だ。

　しかも、空を見れば夕焼けの茜あかね空ぞらだった。西日が黄金の小麦畑をオレンジに染めて、ますます色あざやかにしていた。

　さっきまで東京の夜空を見あげていた身としては、違和感がありすぎだ。

「ここ、棺ひつぎってヤツのなかだよな？」

「おそらく『サトゥルナリアの冠かんむり』という神具の内部に、

何らかの呪じゅ術じゅつ、もしかしたら神の権けん能のうによって空間を造りあげたのでしょう」

　そばにいたリリアナが検けん分ぶんするように小麦畑を見まわしていた。

「この空間から聖域めいた気配を感じます。神殿というほどではないのですが……」

「どんな場所にせよ、灰色のヤツのふところに飛び込んだってところか」

　まさに敵陣のどまんなか。安全とは程遠い場所だろう。

「悪いな。こんなところまでつきあわせて……」

「かまいません。いつかも言ったじゃありませんか。わたしたちは王と騎士。比ひ翼よくの鳥であり連理の枝。鴛えん鴦おうの契ちぎりを結んだに等しい仲なのですから」

　リリアナは謹きん厳げんな女騎士の顔で請うけあった。

「それに、わたしの役割はまさにこれなのだとも思いますし」

「役割？」

「草くさ薙なぎ護堂のおそばにいて、決して離れないことです」

　まっすぐ護堂の目を見ての、誓うようなリリアナの宣言だった。

「あなたは窮きゅう地ちを切り抜けようとするとき、敵のふところに飛び込むことを第一の選択肢として考える方です。しかも、只ただふつうに暮らしているだけでも、気づけば危険のまっただなかにいる異常な才能まで持ちあわせていますし」

「さ、才能なのか、それ……」

「執しつ事じやメイドとして仕つかえるだけなら、誰でもつとまるでしょう。ですが、そういう方と常に寄りそい、剣となり楯たてとなり支えることは、わたし以外にはできない役のはずです」

　ひそやかな自負と確信を込めて、リリアナは言う。

　武芸・魔術・知識の全てに長たけ、霊視までこなし、あらゆる局面に対応できる。しかも、突出する護堂についていける体力・身軽さもある。自然界の事象と超自然の神秘に精通する魔女だから、どんな局面でも活躍できる下地をそなえている。

　彼女の言葉は、それに裏打ちされてのものだろう。

　草薙護堂のような男の副官・近衛このえとなるなら、たしかに最高の資質かもしれない。これはエリカや祐ゆ理り、恵え那なたちでは決して持ちえないものだった。

　リリアナの厚意をうれしく思いつつも、護堂は照れかくしに言った。

「俺、そこまでお守りが必要な歳としでもないけどな」

「でしたら、監視役と言いかえてもいいですが。今回だって、
ちょっと離れていただけで、もうこれだけの騒ぎに巻きこまれているじゃありませんか」

　リリアナは冗談めかして微笑ほほえんでから、携帯電話を取り出した。この間、お台だい場ばで入手した女の子クマのストラップが付いている。

「でも、いろいろ腹立たしい出来事が多かったのはたしかですが、あなたとああいう機会を作れたことだけはよかったかもしれません」

「そ、そうか……？」

　不意打ちで言われたので、護堂は思わず言葉に詰まった。

　お台場でのやりとりを思い出して、さっきとは異なる照れくささを感じてしまう。思わず頭をかくと、リリアナはなぜか微笑ましそうに目を細め、こちらを見つめてくる。

　ますます照れくさい。護堂はごまかすように、一面の小麦畑を見まわした。

「そろそろ動くか。どこをめざせばいいんだろうな？」

「すこし偵察してみましょう」

　リリアナが目をつぶる。魔女術で視覚を出張させたようだ。数分後、報告してくれた。

「あちらの方に建物がありました。放棄された神殿のような雰ふん囲い気きです」

　リリアナが指さす方角は真東であった。沈む西日のちょうど反対方向だったのだ。

　まあ、この空間でも太陽が西に沈むという保証はどこにもないが……。

　ともかく、ふたりは東へと歩きはじめた。だが、やはりここは敵陣のまっただなか。行く手をさえぎる者がすぐに現れた。

　それは十数分ぶりに見る、灰色のボロ布をまとう神霊の姿であった。

『神殺しよ。なんと、ここまで参るとはな――』

　賛さん嘆たん半分、あきれ半分の口調で灰色の者は言った。

『もはや余が劇場の隅でうろつく時間は終わったのだ。疾とく地上にもどり、余の育てた新芽たるサトゥルヌスの神と戦っておくれ』

「いいや。地上はもういいから、こっちでケリをつけようぜ」

　護堂は静かに言った。

　葛か西さい臨海公園で再会したときは、灰色の者へのいらつきが胸の裡うちにくすぶっていた。

　だが、もうそれはない。自分でも不思議だった。むしろ今は、この奇妙な神霊との最後になるかもしれない対話をしておこうと、冷静さに突き動かされていた。

「単刀直入に訊きくけど、神様の復活をやめるつもりはあるか？　あるなら、この騒ぎを収めてから身の振り方の相談にでも乗るぞ」

『無理を言う。余はサトゥルヌス――冬とう至じの豊ほう穣じよう

神しんを甦よみがえらせるためだけの影』

　灰色の者は大げさに身をよじりつつ、ささやいた。

『そなたが何を企たくらんで余の聖域に乗り込んだかは知らぬが、今一度この身に残された力で足止めをしてみようぞ。余の新芽が真なる神となるまで、もうあとわずかなのだから！』

　夕陽を浴びる黄金の小麦畑から、いきなり黒い十字架が生えてきた。

　高さ二メートルほどで、その数はざっと見て五〇本以上。

　これらが畑の作物というには迅じん速そくすぎる速さで忽こつ然ぜんと生えてきたのである。

　しかも、十字架たちはそのまま空中に浮かび上がり、地上にいる護堂とリリアナめがけて稲いな妻ずまのような速さで急降下してきた。

「彼かの者ら、掠かすめしもの奪うばいしものを携たずさえ、モーセのもとに詣もうでけり！」

　聖パラ騎デイ士ーノの言こと霊だまとともに光の箭やを放ったのは、リリアナだった。

　その手に持つのは魔剣イル・マエストロが変形した銀の長弓。
放ったばかりの箭に宿るのは聖なる殲せん滅めつの特権。

　リリアナの一射は彼女の指をはなれた直後、すぐに数十の箭へと分かたれた。

　これが五〇以上の十字架たちをことごとく貫つらぬき、一瞬にして消滅させる。さらにリリアナは即座に地を蹴けり、駆けた。めざすのは灰色の者。燕つばめの軽やかさで距離を詰めながら、彼女の手の中で銀の長弓はサーベルへと形を変える。

　そして一いっ閃せん。リリアナの剣は、みごと灰色の者を袈け裟さ懸がけに斬きり伏せた。

　そのまま神霊の体は黒い砂となり、消滅してしまう。だが——

『ははははは。余はこの程度では朽くちぬ。滅びぬ。またそなたらの相手をして進ぜよう』

　灰色の者のかわいた笑いが響く。黒い砂から。

　小麦畑にばらまかれた砂は風もないのにひとりでに動きだし、人影らしき形に集まりつつあった。しかも、また黒い十字架たちが畑から次々と生えてくる。

「これでは埒らちがあきませんね」

　つぶやいて、リリアナが目くばせしてくる。

　その意図を察して、護堂は彼女のそばまで近づいた。直後、近衛騎士にして魔女でもある少女は得意の飛ひ翔しよう術じゆつを使い、護堂をかかえて飛び立ったのである。

　リリアナの飛翔は、護堂をある建築物の前に連れてきてくれた。

　さっき彼女が『放棄された神殿のような』と形容した建物であろう。だが、護堂にはリリアナの表現が正しいのかはわからなかった。

　というのも、何かの植物のツタや茨いばら、蔓つるなどが建物の壁という壁、床という床、柱という柱を這はいまわり、全ぜん貌ぼうをわかりにくくしていたからだった。植物の緑が絡からみ合う隙すき間まから、白い石材らしき表面は見えるのだが。

　また、あまりにツタや蔓がひどいため、建物の入り口も見つけられない。

「すこしの間、取りのぞいてみましょう。……地より命をのばす緑の子らよ、魔女の裔すえに敬意を示せ」

　つぶやいて、リリアナは目の前のツタにさわる。

　すると、建物の形さえわからなくしていた緑のツタや茨、蔓たちは見る間に縮み、小さくなっていき、ついには地面のなかに帰っていったのである。まるで成長の映像記録を逆再生させたような現象だった。

　このおかげで建築物の様子がわかるようになった。

　白い石造りの建物である。壁がすくない開放的な造りで、あちこちに丸くて太い石柱が整然と立ちならんでいた。

　リリアナといっしょに入っていくと、広い中庭に出た。

　ここの中央に祭さい壇だんらしき白い台座があり、そこに刻まれた紋もん章しようを護堂は見とがめた。

「……なんだか鳥の形みたいだな」

　刻まれた徴しるし。それは翼を広げた鳥とおぼしき意匠デザインだった。

「そういえば、『サトゥルナリアの冠』も似たような形だったよな」

　石造りの立体物だった『冠』よりも、この図の方がわかりやすく鳥の形をしている。

　護堂は首をかしげた。これと同じデザイン、どこかで見た気がしたのだ。

　その瞬間、リリアナが隣でいきなり叫んだ。

「天に君臨する太陽の印！　アフラ・マズダも象しよう徴ちようとしたイコン。まさかミトラス⁉」

　そうか、ミトラス。リリアナの言葉で護堂も思い出した。

　これはかつてナポリで見た図章だ。ペルセウス――またの名をミトラスともいう古代ローマの英雄が送りつけてきたメダルにも、同じシンボルが刻まれていた。

「もしかして、ここはあのペルセウスの神殿なのか？」

「可能性はあります。ただ、この徴は太陽神のシンボルとして、オリエントに広く流る布ふしたものです。サトゥルヌスを祀まつったローマ帝国でも……」

「ざっくり、太陽の神様のサインくらいに考えるべきってことか」

　リリアナと問答を交わしていたとき。

　銀髪の魔女は目を細め、神殿の奥を食い入るように見つめた。

「墜おちた太陽……名な残ごりの陽ひ差ざし——？」

「何か視みえたのか⁉」

　霊視が降りてきたのだと察して訊きくと、リリアナはうなずいた。

「はい。行ってみましょう。サトゥルヌスの芽である神木を甦よみがえらせる理ことわり……なんとなくわかった気がします。たぶん、奥に答えがあるはずです」

2

　神殿のさらに内部へと進む前、リリアナはまた魔女術を使った。

　せっかく引っ込めさせたツタや茨いばらをもとどおりにして、神殿をまた緑の植物の茎くきや葉たちで覆おおいかくしてしまったのだ。

「灰色の神霊が来たら、この子たちに足止めさせます。いっしょに結界の術もかけておきましょう。エリカの元 老 院 最 終 勧 告セナトウス・コンスルトウム・ウルテイムムほどの堅けん牢ろうさはありませんが、数分程度であれば十分に役立ってくれるはずです」

　この説明で、護ご堂どうは相方の意図を呑のみこめた。

　さらに神殿の内部をさまよいながら、リリアナはつらつらと語りはじめる。

「羅ら濠ごう教きよう主しゆが『サトゥルナリアの冠かんむり』と呼んだ神具……大元はサトゥルヌスとは異なる神に由来する神具だったように思えます」

　まわりを石でかこまれた通つう廊ろうを進むと、地下への階段に

ぶつかった。

　当然、ここも下りていく。夕刻の西日で照らされていた地上とは一転、明かりのない地下通路である。リリアナは魔術で青い鬼火を呼んで、行く道を照らさせた。

「現にわたしの使い魔は『サトゥルナリアの冠』から大地の匂においをかぎとれませんでした。サトゥルヌスは大地の豊ほう穣じよう神しんだというのに」

　そういえば、そんな一幕もあった。護ご堂どうはいつかの船旅を思い出した。

「草くさ薙なぎ護堂。あなたが最もよく知る不死の神格は『蛇へび』の女神たちでしょう。では、それ以外の不死なる神はどのような存在だと思いますか？」

「……やっぱり太陽の神様か？」

　中庭で見た紋章。この話の流れ。そこから導みちびかれる、当然の連想であった。

「はい。太陽はたとえ沈んでも、朝になればまた東の空から甦よみがえります。冬を迎えて弱まっても、春が近づくにつれて力を取りもどします。『蛇』と同じく『太陽』もまた不死の属性を持つ神格なのです」

「ってことは、ペルセウスのやつも今頃どこかで生きているのか」

　護堂は以前からの疑問に答えを得た思いだった。

　一応、ナポリではペルセウスに勝利した形となった。だが、そのあとも権けん能のうは増えなかったので、きっと生きているはずだと考えていたのだ。

「あの派手好き、人間社会に迷惑かけてないといいんだけどな……」

　傍はた迷めい惑わくなくせに、どこか憎めないハンサムな英雄神。

　とにかく派手だった彼の言動を思い出した護堂に、リリアナは

言った。

「農耕の神の名のもと、その年の収穫を感謝し、来年の豊作を祈る祭事。これが年の終わりに催もよおされるのは、冬とう至じを節目とするからです」

「……そういえば、サトゥルヌスはどうして冬至の日に甦るんだ？」

　以前も感じた疑問を護堂は口にした。

「今と古代のローマじゃ暦こよみとかもちがうんだろ？」

「ええ。国と時代が変われば、暦すらも変わるもの。ですが草薙護堂、冬至という節目がそのような決まり事に左右されることはありません。冬至とは一年で最も夜が長い日。昼がいちばん短い日。つまり、太陽が最も地球から遠ざかる日ですから」

「そうか。大切なのは暦じゃなくて、太陽と地球の位置関係なんだな」

　ふたりは話すうちに階段を下りきり、ついに終点へたどり着いた。

　礼拝堂としても利用できそうな、石造りの広い地下室。

　その中央に横たわるのは棺ひつぎだった。黒い木製だ。内側から尋じん常じようならざる強さの呪じゆ力りよくが洩もれ出ている。それを感じた護堂は、リリアナに目くばせした。

　うなずきが返ってくるのを確認してから、棺のフタに手をかける。

　一気に開けた。入っていたのは人の体だった。壮年の男性だ。顔には黄金製の仮面をかぶっている。獅し子しを意い匠しよう化かしたデザインの仮面であった。

　そして、ボロボロになった黄色い衣ころもを着ている。昔は金色だったのかもしれない。

　ためしに衣をぬがす。その下には逞たくましい男の肉体があった。

　ふれてみると体温のぬくもりが伝わってきた。次は脈を取る。命の脈動は確認できない。心臓に手を当ててみる。こちらも止まっていた。

　仮面をはぎ取ろうとしたが無理だった。顔の一部であるかのように貼りついていた。

「何なんだ、これ？　この人、生きてるのか？」

「いいえ。これは亡なき骸がら――かつて太陽神であった存在の亡骸です」

　おごそかな断定口調でリリアナが答えた。

　その口ぶりに、尊とうといとさえいえる遠いまなざし。亡骸とやらが放つ呪力と霊気に刺激を受けて、霊視の啓けい示じを得たことは明らかだった。

「そして、『サトゥルナリアの冠』と呼ばれる神具の本体……。まつろわぬサトゥルヌスがかつて仕つかえた主あるじ……」

『それ以上語るのはやめよ、魔女！』

　いきなり上方から〝声〟が響きわたった。

『我わが失しつ墜ついをつまびらかにするのはやめておくれ！　それは恥ち辱じよくなのだ。敗退の歴史であるのだ。余のかつての敗北は、闇やみに沈めたままにしておくれ！』

　ガタガタと激しく床が揺れ、壁が震え、天井が鳴動している。

　まるで地震だが、原因はおそらく灰色の者だ。このままでは地下室も壊され、生き埋めになってしまうのでは？　護堂は即座に言った。

「とっとと脱出した方がよさそうだな。でも、こいつはどうしたもんだろう？」

　棺に横たわる太陽神の亡骸とやらを見おろして、考える。

　持っていくには重そうだし、そうする価値があるかもわからない。といって、放置するのも差しさわりがありそうな――。

　一方、考えを巡らす護堂に対して、リリアナは不満そうに言った。

「さきほど結界を用意したこと、お忘れですか？　数分程度なら保つと言ったではありませんか。結界を破れないから、あの神霊はこんな形で揺さぶっているだけです」

　言われて思い出した。リリアナはこれを予期していたのか。

　うなずく護堂に、忠実な近このえ衛き騎士しはさらに言う。

「それで草薙護堂。神霊が相手とはいえ、数分はきちんと保つはずですが」

「？」

「ですから、しばらくは大丈夫なはずなんです！」

　リリアナが顔を真っ赤にして叫ぶ。彼女は何を訴えたいのか？

　護堂は考えて、すぐに思いあたった。何しろ、今まで何度となく行ってきた行為だ。すこしは察しもよくなる。

　思わず、わなわなと何か言いたげに震えているリリアナの唇くちびるを見つめてしまった。

　その視線に気づいて、彼女はさっと目を伏せる。が、すぐに護堂の顔色をうかがうようにして、わずかに目を上げた。珍しいリリアナの上うわ目め遣づかいだった。

　めったに見られない表情を目まの当たりにして、護堂の胸が高鳴った。

「し、しばらくは保つのか……」

「は、はい。こんなこともあろうかと、用心しましたから……」

　何を言うべきか困って、あえて意味のない確認をした護堂。

　リリアナの方も意味のない相づちで応こたえ、恥ずかしげに上目遣いを維持する。

　――護堂は深呼吸した。こういうとき、なんと切り出すべきか？

いまだにわからず、そのたびにどきどきしてしまう。だが、ここで言うべきことを口にしないのはダメだと、それだけはなんとか呑みこめつつあった。だから、意を決する。

神様と戦うとき以上の勇気を動員して、なんとか言う。

「毎回そうだけど、今度も俺には助けが必要だ。だから……頼む」

まあ、何を頼むかまでは言えないあたりが、我われながら進歩しないと感じるが……。

それでも決意を伝えると、リリアナはこくりとうなずいてくれた。

「わたしの答えは……今回も同じです。あなたのために『剣』を研とぐ役、いつだって拒んだりはしません。今度もいっしょに、戦わせてください」

とつぶやいて、彼女はそっと目を閉ざす。

これからはじめる行為への羞しゅう恥ちと、おそらく期待で、リリアナの体がかすかに震えていることに護堂は気づいた。

その硬さと初うい々ういしさがたまらなく可か憐れんで、護堂の背中に最後の一押しをくれた。

やや乱暴にリリアナの華きゃ奢しゃな体を抱きよせ、その唇をキスでふさぐ。

「あ……」

凛り々りしい女騎士であるはずの少女が、唇から弱々しい吐息をこぼす。

だが、彼女にも護堂にも『剣』を研ぐという目的がある。すぐにリリアナは唇を大きく開いて、護堂の唇を迎えてくれた。

合わさる。ふたりの唇と唇はぴったりと合わさり、たがいの感触をたしかめ合う。

そして、リリアナはささやきはじめた。

「この亡骸……不死の太陽を葬ほうむったのが何者かはわかりません。同じ神であったのか、あるいはあなたの同族である古代の神殺しだったのか――」

　いまだに地下室全体がガタガタと激しく揺れている。だが、護堂は気にせず、リリアナも同じだった。ふたりで口づけを交わしながら、知識と心を共有しようとしている。

「ただ、死したあとも彼の亡骸は滅びぬまま地上に残り、不死の神性を分けあたえる『神具』となったのです……」

　リリアナが使う『教授』の魔術。その効果で、膨ぼう大だいな知識とイメージの送付がはじまりつつあった。神具『サトゥルナリアの冠』。護堂たちが今まで見てきたのは、外側にすぎない。内側に存在する空間と、そこに隠されていた棺。

　ここに横たわる亡骸こそが、真の神具――！

「この亡骸にかつて宿っていたはずの魂たましいは歳さい月げつを経へるうちに零れい落らくし、灰色の神霊となりました……。そうして神具の意思、神具の精として振る舞うようになったのでしょう」

　少女の可憐なささやきと吐息が口のなかに吹きこまれてくる。

　それを受けとめながら、護堂はリリアナの唇をついばみ、舌をのばした。彼女の舌がおずおずと受けとめてくれた。舌で舌を舐なぶり、からめとる。感触をたしかめる。

　ここから密着の度合いが高まり、心と心のつながりもより深くなっていく――。

　いつもの儀式で何度も繰りかえしてきた手順だった。

　だが、護堂は気づいた。心を開き、より深くつながろうとしているのに、相手の反応がかんばしくない。舌の動きはぎこちなく、唇もどこか硬いように感じられた。

　そのせいだろう。いつもより知識の伝わりが遅く、情報の量もすくなかった。

　どうやら、リリアナには何か躊ちゆう躇ちよがあるようだった。

　もしかしたら、灰色の神霊からの干かん渉しようを気にしているのだろうか？

「外のことが気になるのか？」

「あ、はい。地上ではみんなが……エリカたちが戦っているというのに、わたしひとりだけこんな想おもいをしているのが……申し訳なくて……」

　質問をべつの意味にまちがえたらしい。リリアナは目を伏せ、小声でささやいた。

「抜け駆けするようにあなたを独占して……こうしてキスまで……」

　リリアナから思い切りのよさを奪っているもの。

　それは警戒心ではなく、罪悪感のようだった。言われてみると、護堂の心にも同じ重荷がずしりとのしかかってくる。みんながいないところでリリアナと儀式をしていることへの罪悪感が、試合前のプレッシャーのように胸を苦しくする。

　——だが、しかし。護堂はかぶりを振った。

　それを受けとめねばいけない人間はこちらだ。草薙護堂の方なのだ。

　護堂は軽くリリアナにキスすると、すぐに顔をななめ下へとずらし、おもむろに彼女の細い首筋に唇を這はわせた。そして、ちゅっと吸いつく。

「は……ん！」

　不意打ちのせいで、リリアナの体がびくんと震えた。

　護堂はかまわずに首筋を吸い、舌を這わせ、それから彼女の唇にふたたびキス。そして薔ば薇ら色に染まった頬ほおにもキス。頬と頬を寄りそわせるようにして顔を近づけ、リリアナの耳にも口づけし、耳たぶを唇ではさみこみ、最後に耳元でささやいた。

「この役をおまえに頼んだのは俺だ。だから気にしないでくれ。すくなくとも、今ここでは何も考えなくていい」

「でも――あ！」

　リリアナがまだ何か言おうとしたので、護堂は耳たぶを軽く噛かんだ。

　遊びのような甘噛み。だが、ふたたび妖精めいた肢し体たいはびくりと震え、大きくのけぞる。そして、護堂に軽い体重の全てをあずけるようにして抱きついてきた。

　それを抱き止めて、護堂はまたリリアナにキスする。

　さっきよりもやわらかく受けいれてもらえた。リリアナは自みずから唇を開き、舌を護堂の口内に差し入れて、主と呼ぶ男の唇を丹念に舐なめ、唾だ液えきでしめらせようとする。

「い、今のは御命令ですか？　王として――いえ、わたしの主としての？」

「あ、ああ」

「でしたら……仕方ありません」

　リリアナの言葉に籠こもっていたのは、明らかに諦てい念ねんではなく。

　いくばくかの罪悪感を無視しようとする者特有の、確信犯めいた意思だった。それから彼女はとろんとした目つきになり、護堂と抱き合う腕にきゅっと力を込める。

「本当は……あなたのおそばにいる間、いつもこうしたいと思っています。でも、わたしは草薙護堂の騎士。許されないことです。だから――」

　リリアナが護堂の顔に頬を寄せ、じゃれつくようにほおずりしてくる。



「だから、これは今だけ。こういうときだけです。でも、かまいませんよね？　リリアナ・クラニチャールは常にあなたとともにある騎士。決してはなれない一組のつがい。これから何度だってこうする機会はあるでしょうし、そのたびにわたしはあなたと――」

　ある意味で素直に愛を告白するよりも深く、重い、騎士の誓約。

　護堂は最後まで言わせず、キスで言葉の続きを受けとめた。リリアナは大だい胆たんに口を開き、しゃぶりつくようにして護堂の唇全体を包みこむ。

　そこから突然、リリアナは舌を強引に差し入れて、護堂の舌を求めてきた。

「の、農耕文化圏で冬至を盛大に祝うのは、この日が一年で最も夜が長い日だからです。逆をいうと、この日を境に昼がすこしずつ長くなり、春へ近づいていきます……」

　くちゅくちゅと護堂の唇と舌をついばみ、舐め取り、味わいながらの語り。

　同時に、この接触をとおして膨大な量の知識が奔ほん流りゅうのように護堂の脳へ伝わってくる。

「このため冬至とは、冬の終わりのはじまり。春の到来がはじまる祝いの時節となります。つまり、言いかえれば――」

「不滅の太陽が復活する日。冬の間に弱まった力が甦る記念の日になるんだな」

　リリアナの唇のうごめきに答えながら、護堂も彼女の唇を求めた。

　どちらのキスが情熱的かを競うようにして、ふたりでおたがいの唇をぶつけ合う。

「ええ。そして、もうひとつ。サトゥルヌスはローマの主神ユピテルによって囚とらわれの身となった神でした。あるとき狂気に冒おかされたサトゥルヌスを鎮しずめるため、ユピテルは彼を神殿の奥深くに幽ゆう閉へいします。解放されるのは一年のうち七日間だけ。この神話こそサトゥルヌスと太陽神の亡骸を結びつける鍵かぎ

となるんです——！」

　ふたりで心を通わせ、知識を授けてもらう魔術の儀式。

　ついにその効果が結実し、護堂のなかで神性を切り裂くための刃やいばが形を成したとき——。

　バリン！　ガラスが砕け散るような音がした。

　リリアナの築いた結界が崩壊する音、ついに灰色の者が侵入してくるという警けい鐘しようだった。

3

　エリカは鋼鉄を操る魔術のスペシャリストである。

　鉄は研とぎすませば刃やいばとなる。その重量で押しつぶす鈍どん器きにもなる。熱して溶解させれば、ふれるもの全すべてを溶かし、蒸発させる金属の溶液と化す。しかも、鋼はがねの堅けん牢ろうさは古来、戦士の身を守ってきた庇ひ護ご者しや。

　鉄に長たけるということは、攻撃にも防御にも長けることを意味する。

　一方、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎの遣つかい手てである恵え那なは、防御よりも攻撃の方が得意な少女だ。

　やはり、猿ましらの身軽さで駆けまわる自然児。一箇所にとどまって攻防するよりも、ふらふら縦横無尽に動いての強襲・遊撃戦が性に合っているのだろう。

　——地上の葛か西さい臨海公園。

　半神半木の巨人と戦うエリカは、いつのまにか恵那とたがいの個性を活いかし合う形で共闘するようになっていた。斉せい天てん大たい聖せいや神祖グィネヴィアとの戦いを通じて、太た刀ちの媛ひめ巫み女ことの間にも連携の呼吸ができあがりつつあるのだ。

ｏｏｏｏｏａａａａａａＡＡＡＡＡＮＮＮｎｎｎＮＮＮ！

　半神半木の巨人は咆ほう哮こうするなり、二ふた叉またの杖つえをかかげた。

　その先端から緑の光球が吐き出される。しばらく前、空に上がったリリアナと護ご堂どうを追いかけたものだ。破裂すれば衝撃波を生み出す攻撃だった。

　これが十数個も自分たちの方へ飛んでくるのを見て、エリカは言こと霊だまを唱となえた。

「軍団長レガトウス・レギオニスの位くらいをもって、我われは命ずる！」

　そして、クオレ・ディ・レオーネを空に放り上げる。

　直後、逆さか棘とげ状じようのランスと化していた獅し子しの魔剣は、いきなり増殖した。

　コピー＆ペーストでもするように、うりふたつのランスが次々と空中に出現していったのである。一本や二本ではない。合計でなんと八一もあった。

「集つどえ方陣フアランクス！　鋼の鉄かな床とこを築き、持ちこたえよ！」

　エリカの言霊に応えてランスの軍団は宙を飛び、整然と動く。

　そのまま縦たて九列・横九列にならんで正方形の密集方陣を作り出してしまう。エリカはこの陣を自分と恵那の前に配置させた。

　半神半木の巨人によって生み出された緑の光球が、そこに押し寄せてくる。

　十数個の光球はエリカたちの近くまで来る前に、待ちかまえていたランスの穂先で全て貫つらぬかれ、破裂した。緑の光が次々とはじけ、衝撃波が吹き荒れる。

「く——！」

　これにエリカは衝撃を抑おさえこむ守護の魔術で、我わが身と恵

那を防御。

　彼女たちの立つ場所を衝撃波が駆け抜けていったが、みごとにしのぎきった。そして、ほぼ同時に恵那が動いた。

　身を低く、重心も低くして、半神半木の巨人めがけて走りはじめたのだ。

　風のような速さで、方陣を組むランスの間も縫ぬうように駆け抜けた。このときすこしもスピードを落とさない。地を駆ける狼おおかみにも似た疾しつ走そうだった。

　そして一呼吸のあとには、もう巨人の足もとへと近づいている！

　これを抑えようとしたのは、地中から這はい出てきた巨大な蔓つるたちである。

　ついさっきも恵那の天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎによって雑草でも刈るように伐きられ、消滅していったのだが、もう再生したのだ。

　蛇へびのごとく、鞭むちのごとく襲ってくる蔓の集団。

　これを恵那はひらりひらりと避よけ、それどころか避けたばかりの蔓を踏み台にして、さらにひらひらと飛びまわり、軽かる業わざ師しさながらの軽けい捷しようさを披ひ露ろうする。

　だが、避けるだけで反撃はしない。

　なぜなら、太た刀ちの媛ひめ巫み女この手には漆しつ黒こくの相棒がおらず——。

「ちはやぶる破は金がねの力、いざご披ひ露ろうつかまつる！」

　飛びまわりながら、恵那は言霊を唱えた。

　これに応えて、宙に浮いていた天叢雲劍は急降下をはじめる。

　走りはじめる前、恵那が前もって空に投げ上げ、黒き神刀はそのまま空中を浮遊したまま攻撃に転じる機をうかがっていたのである。

ｏｏｏｏｏａａａａａａＡＡＡＡＡＮＮＮｎｎｎＮＮＮ！

鋼の襲来に気づいて、半神半木の巨人は二叉の杖をまたもかかげようとした。

だが、すでにエリカが妨害に入っていた。

「鋼の槌つちよ、突き崩せ！」

方陣を組んでいたランスのうち九本が飛び立ち、かかげられた二叉の杖を刺す。貫く。砕く。突き通す。ふっとばす。

そして、がらあきになった巨人の頭へ、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎが雷いかずちのごとく降り——。

人間でいえば頭頂から頸くび、喉のど、食道を貫きとおし、最後に股こ間かんから出てくるようなコースをたどって、半神半木の巨体を一直線に駆け抜けた。

これにはたまらず、身の丈三〇メートルはあろう巨体はまっぷたつに裂けていく。

斧おので薪まきをかち割ったような、渾こん身しんの一刀であった。

神獣・神木が相手であっても、ふつうなら勝利に値あたいする一撃。

だが天叢雲劍が貫通したというのに、巨人の肉体は再生をはじめる。ふたつに裂けた巨体がふたたび接合しようと、磁じ石しゃくのＮ極とＳ極のようにくっついていく。

しかも、巨人はつながったばかりの口に相当する裂け目から、何かを吐き出した。

それは毒々しいほど黄色く、細かな粉末だった。

これが巨人のまわりにばらまかれ、黄こう砂さか花粉のように拡散していく。当然、エリカと恵那のもとにも飛んでくる。

「気をつけて！　いやな匂においがする。たぶん毒だよ！」

風で運ばれてきた匂いをかぎ分けたのか、恵那が警告する。

さすがの嗅きゆう覚かくだった。自然児の彼女は五感全てが尋じん常じようでないほど鋭えい敏びんなのだ。そして、すぐに言霊を唱えはじめる。

「吹くからに秋の草木のしをるれば……むべ山風を嵐といふらむ！」

恵那のまわりで強風がうずまく。

嵐の神でもあるスサノオの巫み女こは、風の呪力を操ることにも長けているのだ。恵那が吹かせた強風で、黄色い毒の粉は海の方向に流されていった。

「こちらの打撃力が敵の再生力を超えられない以上、打開策が見つからないわね」

かんばしくない戦況をエリカが自覚したときだった。

遥はるか頭上で輝く黄金の楕だ円えん形けい、祐ゆ理りが『棺ひつぎ』と呼んだ存在。冬の夜空に浮かぶ怪異のまわりで、見覚えのある光が次々と燦きらめきはじめたのである。

「古代のヨーロッパで一二月に行われた冬とう至じ節せつの祭礼は、今年の収穫を祝い、来年の豊作を祈るための祭りだった」

護堂が剣の言霊をささやくたび、周囲に光の刃が生まれていった。

広い地下室の中央で、リリアナに見守られながらの詠えい唱しようだった。ウルスラグナ最後の化け身しんである『戦士』となり、神を切り裂く刃を引き抜いたのだ。

「冬至は太陽の復活を祝う大祭。農耕のさかんな国や集落では、冬と春の節目となる行事だった。何より人々が浮かれさわいで息抜きする記念の祭典だった」

『ぬう！　その光、その言霊、我が来歴を解きあかすつもりか!?』

上方から灰色の者の声が響く。

すると地下室全体が鳴動し、床が波打った。震度でいえば優に五以上はありそうな激しさで、護堂はバランスを崩し、倒れかけた。

だが、とっさにリリアナが駆けよってくる。

銀髪の少女は護堂の背に手をまわし、抱きついて、支えてくれた。

「古代ローマの太陽神はたくさんいる。最も代表的な太陽神ソル。ギリシアではアポロンと呼ばれていたアポロ。東方から来た英雄ミトラス……」

リリアナの体は細く軽い。華きや奢しやで妖精めいた肢し体たいなのだ。

しかし、この揺れのなかでもしっかりと護堂を支える杖となってくれた。彼女の華奢な体を逆に頼もしく思いながら、護堂は〝相棒〟にも意識を向ける。

地上で戦う恵那が振るう天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎ——。

ちはやぶる神刀の力を、遥か下方の臨海公園から呼びこむ。

「あんたはそういう神々のどれかだったはずだ。古代ローマの空に君臨した太陽神。何者かに敗北する前、かつてのあんたは輝かしい光の神だった」

灰色の者に向けて、護堂は言い放つ。

いつもの神を切り裂く剣に、天叢雲劍の力をかけ合わせた言霊を。以前、アテナとの再戦でも使った刃。剣と劍を融合させた、神具封じの言霊を。

「あんたがどんな太陽神だったかは知らない。でも、太陽の祭典である冬至節には盛大に祀まつられ、そしてローマの民たみに祝福を授けたことだろう」

『嗚あ呼あ！　やめておくれ、草くさ薙なぎ護堂よ！』

　もはや灰色の者は懇こん願がんではなく、哀願の声をしぼり出していた。

『余の魂たましいを切り裂き、余の存在を封じ込む言霊！　その仕打ち、実に堪たえがたい！』

　かつて、いかなる神からも聞いたことのない弱音だった。

　そうか。護堂は悟った。一五〇〇年以上も前に神としての位くらいを失った神霊。おそらく彼は神祖たち——あのグィネヴィアらと似たような存在なのだ。

　人を凌りよう駕がする超越者。しかし、その力と魂たましいは神々と比すべくもない。

　彼はかつての偉大さ・強壮さを失った零れい落らく者しやなのだ。

「あんたが太陽神だった頃の亡なき骸がらは、冬至の祭りを再現する神具となった。豊ほう穣じようと祭りの神サトゥルヌスを生み出す神具に。それができるのは、サトゥルヌスが大地の神でありながら太陽神——あんたたちに仕つかえる従属神だからだ」

　護堂の言霊が生み出す『剣』は、着実に数を増やしていく。

　いつしか地下室に収まりきらないほどとなり、無数にまたたく黄金の光は財宝のごとく室内を照らしあげ、そして壁・床・天てん井じようへと殺到していった。

　まず、この広い地下室から切り裂くために。

『サトゥルナリアの冠かんむり』という神具を内部から八つ裂きにし、封じ込むために。

　護堂も口を止めず、さらに言霊をつむぐ。

「サトゥルヌスは囚とらわれの神だった。彼はローマの主神ユピテルによって、神殿の奥深くに閉じこめられていた。解放されるのは年に一度、それも一週間だけだった」

　無数の『剣』は光の乱舞となって、地下室を無惨に切り刻む。

しかも、切られた石材はそのまま消滅していった。

この地下室も、地上の小麦畑も神具の力が生み出した空間。『剣』と天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎが合わさった神具封じの刃を振るえば、それらが消滅していくのも道理だった。

「それが冬至節の七日間。サトゥルヌスは大地に属する神でありながら、太陽の復活を祝う祭りがはじまらなければ解放されない、不自由な神でもあった。その関係がサトゥルヌスをあんたたち太陽神に従属する者としているんだ！」

黄金の『剣』が宙を駆けるたびに、空間のどこかが消滅する。

およそ数十秒ほどで、剣と劍の光は地下室とここへ来るための階段、そして、その上にある神殿をきれいに消し去った。

さらに、どこまでも続く黄金の小麦畑も、茜あかね色いろに染まる夕焼けの空も。

気づけば護堂とリリアナは空中にいた。足場となるのは、葛西沖に〝根づいて〟いた鳥の紋もん章しよう。あの石造りの鳥をふたりで踏みしめる。

もう足もとは揺れていない。だが、まだリリアナは護堂の体を支えてくれていた。

そして、目の前にはもうお馴な染じみとなった灰色の者が立っている。

彼が抱かかえこんでいたのは、あの亡骸だった。己おのれが神であった頃の肉体。かつて金色だった衣ころもと黄金の仮面をまとう太陽神の屍しかばね――。

『草薙護堂！　もはや神ならぬ身の余は、それでも神殺しとの対決を望むのだ！　どうか、余のサトゥルヌスと立ち合うておくれ……！』

「悪いけど、あんたの悪ふざけにはもうつきあえない」

先月、軍神ランスロットの勇壮な挑戦に応えた護堂だが。

この神霊からの懇願を受けいれるつもりはなかった。そんな望み

のために東京を危険に巻きこむつもりは断じてないし、何より。

　ついさっきまで感じていたイライラを、護堂はちょっとだけ思い出したのだ。

　今回の事件を起こした元凶に、必要以上の寛大さを示す気になれないことを再確認してから、自分たちのまわりに浮かぶ『剣』たちを見やる。

　まだ数百以上はありそうな、黄金に輝く光球たち。

　天にまたたく星たちよりもまぶしい刃やいばの軍団を、護堂は一気に加速させた。

「我は最強にして、全ての勝利を掴つかむ者。全ての敵と悪魔を挫くじく者なり！」

　ウルスラグナの聖句に応えて、輝く光の剣たちは縦じゅう横おう無む尽じんに乱舞する。

　そして灰色の者を、彼がかかえる太陽神の亡骸を存分に切り裂き、八つ裂きにし、ついに消滅させてしまった。

　彼らがいた場所には、獅し子しを模した黄金の仮面だけが残る。

　また、今まで護堂とリリアナの足場となっていた石造りの鳥まで消滅してしまった。

　自由落下が当然はじまる。とっさに護堂は叫んだ。

「リリアナ！」

「はい！」

　それだけの短いやりとり。だが、ふたりの間ではそれで十分だった。

　リリアナは護堂を抱えたまま飛ひ翔しよう術じゆつを使い、青き光につつまれての飛行をはじめる。地上の臨海公園へ着陸するためだ。だが、その前に空へ残された黄金の仮面にも近づく。

　おそらく、これこそが不ふ朽きゆう不ふ滅めつたる神具『サトゥ

ルナリアの冠』の本体。

しっかり回収し、あとで義姉のもとにでも送りかえさなくては——。護堂は右手をのばして、どうにかつかみとった。

そして、眼下へ目を向ける。地上が近づいてくる。

葛西臨海公園を俯ふ瞰かんで見るという、めったにない経験ができた。

広い緑の芝生。森。花畑。巨大観覧車。公園中央部の遊歩道。水族園など。

そして、海に近い芝生の一角では、半神半木の巨人が二叉の杖を振りあげていた。あちらの始末もつけなくてはいけない。

護堂は全てにケリをつけるため、言霊を唱えた。

「我わがもとに来きたれ、勝利のために……。不死の太陽よ、輝ける駿しゆん馬めを遣つかわし給たまえ。駿足にして霊妙なる馬よ、汝なんじの主たる光輪を疾とく運べ——！」

灰色の者に仕える従属神であったサトゥルヌス。

一五〇年前、『まつろわぬ神』として地上に混乱をもたらし、人々を狂騒へと導みちびいた彼は、当然あの条件を満たしていたのだ。

民衆を苦しめる大罪人であるという『白馬』の使用条件を——。

東の方角に暁あかつきの兆きざしが見えてからは、全てが予定調和とさえ言えた。

エリカと恵那が何の相談もなしにうなずき合い、即座に待避をはじめたのも。

まだ夜明けまで数時間あるというのに、薔ば薇ら色の曙しよ光こうが東の夜空より発するのを見て、半神半木の巨人が猛たけ々だけしく咆ほう哮こうしたのも。

さらに、太陽フレアのごとき白き光の槍やりが海辺の公園に突き刺さったのも。

この光——ウルスラグナ第三の化身『白馬』が巨人をあっさりと呑み込み、灼やき尽くし、そして今度こそ再生を許さずに蒸発させていったのも。

そして『白馬』の閃せん光こうは標的を討うつ前の先駆けとして、大観覧車——葛西臨海公園の代名詞ともいえる巨大遊具をも呑み込み、消滅させたのも……。

「まあ、護堂が戦うことになった以上、やっぱりこうなるわよね」

全てが収まったあとの公園で、エリカは肩をすくめて言った。

時ならぬ暁の曙光はすでになく、ふたたび頭上には冬の夜空が広がっている。さっきまで東京湾上空に浮かび、異い彩さいを放ちすぎていた黄金に輝く楕円形も消滅ずみ。

平穏がようやく東京と草薙護堂の周囲にもどってきたのだ。

もちろん、事後処理の煩はん雑ざつさをあえて無視すればの話ではあったが——。

「あ。あれ、王様とリリアナさんだよね？」

恵那が空を指さす。その先には青い流れ星の光があった。

星空から地上へと降る、青の軌き跡せき。リリアナの飛翔術が放つ輝きにほかなるまい。

また、向こうから万ま里り谷や家の姉妹もこちらへやってくる。

どうにか恢かい復ふくしたらしい祐理は、エリカと恵那の視線に気づいて会え釈しやくをした。妹のひかりはにっこりと笑い、こちらに元気よく手を振っている。

「どうやら一件落着のようね。じゃあ祐理たちも呼んで、これからのことを相談しましょうか」

「ああ、クリスマスのパーティーってやつ？」

　恵那が言うのを聞いて、エリカはくすりと微笑んだ。そして、かぶりを振る。

　彼女の口元に浮かぶのは、護堂やリリアナがたまに『悪魔の笑い方』だと評する笑みであった。意地悪くも華麗な、エリカ・ブランデッリだけの表情だ。

「いいえ。護堂とリリィが帰ってきたら、どうやっていじめるかの相談よ」

「え、いじめるの!?」

「ええ。ふたりで空に上がったときから、こうなるだろうとは思ってたけど。本当に予想どおりなのですもの。ちょっとみんなで意地悪するくらい、かまわないんじゃないかしら」

「あー……たしかに。ふたりで『剣』の準備もしたわけだしねえ……」

　恵那も問題点に気づいて、しみじみとつぶやいた。

「言われてみると、恵那もちょっとだけ王様に意地悪したくなってきたかな？」

「ええ。本当にちょっとだけ。淑しゅく女じょのたしなみからはずれない程度に」

「そうだね。役やく得とくもあったんだから、ちょっとくらい悪いこともないとね」

　提案したエリカは、王の宮廷で策略を巡らす貴婦人もかくやという笑顔だった。

　一方、恵那は大胆不敵なイタズラ好きの表情でにやりとした。

「じゃあ、ふたりがもどるまで時間もないことだし、早速はじめましょうか」

「了解。あ、祐理、ひかり！　早くこっち来てよ。相談があるんだけどさ——！」

　ひとまず、すべて世は事もなし。草薙護堂の周辺は、平穏と揉も

めごとのどちらも合わせて『いつもどおり』にもどりつつあるようだった。

4

かつて太陽神だった神霊と、『まつろわぬ神』になりかけていた神しん木ぼく。

両者の消滅後、草くさ薙なぎ護ご堂どうの周囲はすみやかに平常状態へ復旧した。沙さ耶やの宮みや馨かおるや甘あま粕かす冬とう馬まといった呪じゆ力りよくの強い関係者は、もとにもどっても呪じゆ詛そを受けていた間の記憶を保っていた。

「さすが神様がらみの事件、何でもありでしたねェ」

とは、護堂と再会したあと甘粕が口にしたコメントである。

しかし、これだけの事件が起きたあとなのに、彼は珍しく昼ひる行あん灯どんな就業スタイルを継続中だった。今回、正せい史し編へん纂さん委員会の行うべき情報隠いん蔽ぺい業務がすくなかったおかげである。

冬とう至じの前夜、東京湾上に浮かんだ無数の鬼火。

そして、葛か西さい臨海公園で護堂たちが繰りひろげた戦闘の模様。

それらを目撃して然しかるべき近隣住民たちは、この怪現象について何も覚えていなかった。

サトゥルヌスによる記憶操作の呪詛が奇跡的に上う手まい案あん配ばいで作用して、思わぬ副産物を生んだのではないか？　それが正史編纂委員会の見解だった。

もちろん、戦いの爪つめ痕あとが生々しい葛西臨海公園は封鎖されたりもしたが。

「天がぼくらにくれた、早めのクリスマスプレゼントかもしれませ

んね」

　馨に苦笑されて、護堂は大いに恐きよう縮しゆくした。

　彼らがいつも事後処理で忙ぼう殺さつされる理由の多くは、まちがいなく東京在住のカンピオーネに起き因いんする。自然に頭が下がるというものだ。

　一方、呪術の心得がない一般人は、一連の騒ぎにまつわる記憶を失っていた。

　サンタが灰色になった怪現象も覚えておらず、草薙護堂に近しい人々も護堂についての認識が狂っていたことを覚えていない。

　まあ、いつ入手したかも定かでない灰色のサンタ衣装などを発見して、首をかしげたりするエピソードがひそかに東京のあちこちで流行するのだが……。

　また身近なところでは、クリスマスパーティーの会場が草薙家となった。

　最初、発ほつ起き人にんのリリアナはこう提案してくれた。

「今から店を予約するのも無理でしょうし、会場はわたしの家にしましょうか」

「わたしのマンションでもかまわないわよ。ただ、二四日から新年までアリアンナに休暇をあげるつもりだから、彼女を当てにはできないけれど」

　エリカも申し出てくれた。だが、護堂は言ったのである。

「じいちゃんも当分いないし、うちの親がクリスマスだからって早めに帰ってくるはずないからさ。俺の家に集まればいいじゃないか。静しず花かもその日はいるって言うし」

「当日、静花さんもいらっしゃるんですか？」

　祐ゆ理りに訊きかれて、護堂はうなずいた。

「ああ。最初はクラスの友達と出かけるとか言ってたんだけど」

　それを聞いて、護堂が『うちに誰もいないなら、みんなで集まれるな』とつぶやいた途端に前言をひるがえしたのである。

「そんな集まりがあるなら、イブはあたしもうちにいる！　いいかげん、お兄ちゃんが我が家でやりたい放題するのをストップさせなきゃ！」

　妹よ。おまえは兄が何をやると思っているのだ？

　いつか問いかけてみたいと、護堂は考えたりもしたが……。ともあれ、パーティーの会場は決まった。葛西での戦いのあと、秩ちち父ぶの実家にトンボ返りした恵え那なにもメールで報しらせたところ、

『わかった。食糧とかいろいろ持ってくよ』

　と、おそろしく簡潔な返信があった。

　こうして、ついに一二月二四日のクリスマスイブを迎えたのである。

　二四日の午後一四時。護堂の携帯電話は三通のメールを受信した。

　名な波なみ・反そり町まち・高たか木ぎの三人からである。どれも文章は短く、名波のメールにいたっては本文なしで写真が添てん付ぷしてあるだけだった。

『オレたちは登りはじめたばかりなんだ、このはてしない男坂を（反町）』

『愛など知らなければ、どんな悲しい思いもすることはない（高木）』

　そして、名波のメールに付いてきた写真画像。

　それはどことも知れない公園のキャンプ施設で、バーベキューの準備をし、クリスマスケーキを切り分けている名波・反町・高木という構図であった。

　ほかに誰も映っていない。どうやら、この三人だけで集まっているらしい。

　ちなみに、三人ともまったく浮かれていない。

　むしろ悲壮感と雄お々おしさすらただよわせて、挑むように食糧を見つめていた。

　護堂は思わず空を見た。よく晴れていて、ホワイトクリスマスになりそうな気配は微み塵じんもない。しかし、今日は風が激しいうえにひどく冷たかった。

　――野外でバーベキュー向きの日和ひよりとは、とても思えないのだが……。

　しみじみと三バカの写真を眺めて、護堂はもの悲しさを感じた。どういう類たぐいの内なる激情が、こいつらをここまで駆り立てるのだろう？

「どうしたんですか、お兄さま？」

「あ、ああ。クラスの友達からメールが来たんだ。今日の集まりにも誘ったんだけど、何でか断られたんだよな」

　隣を歩くひかりに訊かれて、護堂は答えた。

　冬至節の事件で草薙護堂のまわりがおかしくなっていたとき、三バカたちはあれほど悟りすました雰ふん囲い気きだった。だが、もとどおりになると、連中はなぜか事件前のやさぐれた感じまで取りもどしていたのである。

「まあ、ああいうのも何だかんだで楽しそうだし、いいか」

　ひとりごちながら、ひかりと赤あか坂さかの街を歩く。

　今日のパーティー用に予約しておいたケーキを、ふたりで受け取りに来たのである。昼前に待ち合わせて、ランチのあとで洋菓子店に向かったのだ。

　そして、この帰り道。護堂の手には四角い箱入りの袋があった。

「今日はたくさん人が来るみたいで、楽しくなりそうですね♪」

朗ほがらかに言うひかりとともに、護堂は駅へと歩いていった。

——ちなみに。

今日ひかりと待ち合わせたのは、実は葛西での戦闘直後、エリカに突きつけられた要求のためである。あのあと、エリカは貴婦人めいた和なごやかさで言ったのだ。

『ねえ護堂。クリスマスの前日はふたりきりでデートするのが、日本の恋人たちなんでしょう？　だったら、わたしたちがそうしてもおかしくないわよね？』

『え？』

『まあ、でも。ここにはエリカ・ブランデッリ以外にも女の子はいるわけだし。あなたに選択の自由をあたえるのもやぶさかじゃないわよ？』

『な、何だよそれは？　せっかくいろいろ片づいたのに、変なこと言いだすなよ！』

『そのとおりだ、エリカ。今はまず事後処理のことを話すべきであって……』

護堂がうろたえれば、隣にいたリリアナも弁護しようとしてくれた。

しかし、エリカは落ち着いてにっこりと悪魔的に微笑み、

『なぜ今かをあなたたちが気にするなら、その前に訊いてあげましょうか？　上でどんなふうに戦って、どうやって剣を研といだのか』

『う！』『う!?』

にこやかなエリカを前にして、護堂とリリアナはそろって絶句した。

『護堂ったら、いつもいつも勢いにまかせて……とか言わないわ。リリィも騎士の道にこだわるくせに、ここぞというときは抜け駆けを躊ちゆう躇ちよしないのね……とも言わないであげる。だから、今度はわたしたちの誰かを選んでほしいと思うのよね』

『そうだよねー。たまにはそういうことしてくれても、バチは当たらないよねえ』

　エリカの尻しり馬うまに乗って、しれっと恵那まで言った。

『いつもだったらさ。祐理と恵那のふたりでお供するから、どこかに行こうよって言うところだけど。今日は恵那のことだけ選んでほしい気分かなあ』

『た、たしかに』

　あげく、祐理まで言いづらそうにしながら、それでもはっきりつぶやいた。

『護堂さんも、たまにはなし崩し以外で事を起こされてもいいのかもしれませんね……』

　そして、女子たちはじっと護堂の顔を見た。

　こちらの選択と発表を無言でうながす構えだった。誰を選んでも、選ばなくても波風が立ちそうだと本能的に察して、護堂は叫んだ。

『ひ、ひかり！　じゃあ、ひかりと出かけようっ。前から約束してたし！』

　いちばんの最年少者に目をかけるのは、歳とし上うえとして当然だし無難でもある選択。

　あの夜、ひかりがいてくれたことに感謝しつつ、護堂はクリスマスの家路をたどる。隣にいる一二歳がにっこり笑って、

「あ、お兄さま。ああいうときはいつでも私を頼ってくださって大丈夫ですからね！」

　朗らかに言うのを、頼もしくも末恐ろしいように感じながら──。

　草薙家の居間で、家人である静花は暗い顔つきでつぶやいた。

「あたし、今年になるまでお兄ちゃんが変なふうにならないよう、すごく注意して目を光らせていたつもりだったんだ……」

「変なふうって？　ゴドーくん、すごくまじめないい子だよ～」

　ふんわりとした感じで笑い、にこやかに言ったのは香こう月づきさくらである。

　護堂と静花のはとこにあたる、遠縁の親戚だった。

「まじめなところだけは認めるけど……全然いい子じゃないって！　草薙家の男は先祖代々ろくでなし揃ぞろい、なかでもきわめつきの逸いつ材ざいがおじいちゃんなんだよ。その人が幼稚園児の頃から連れまわして育てていたお兄ちゃんは、いい歳して不良がまだ治らないお父さんの血まで受け継いでるんだから！」

「ふふふ。おじいちゃんも弦げん蔵ぞうおじさんも楽しい人だもんね～」

　思わず興奮する静花に対して、さくらはどこまでもおっとりとうなずく。

「楽しいだけならいいけど、ふたりともろくでなしに分類されるのはまちがいない人間なんだから。お兄ちゃんもまじめで律りち儀ぎなくせに、ろくでなし街道を着実に歩いてる感じだし。ほんと、うちの一族ってどうしてちゃんとした男がいないんだろ……」

「なるほど。ああいう人が生まれる下地はちゃんとあったわけね」

　静花の憂ゆう鬱うつなコメントを聞いて、傍そばで聞いていた童女が訳知り顔でコメントした。

「さすがゴローさん、じゃなかったゴドーさんの一族だわ！」

「あ、さくらちゃんの友達だっけ。お兄ちゃんのこと知ってるんだ？」

　静花が訊たずねると、童女——否いな、連れん城じよう冬ふゆ姫ひめは畳たたみの上で三つ指ついて頭を下げる。

　中学二年生の静花に対して、大学一年生の冬姫の方が明らかに幼い見た目であった。

「連城家の跡取り娘、冬姫と申します。おにいさまとは真剣に〝びじねすらいく〟なおつきあいをしたいと考えてますので、どうぞよろしくお願いいたします」

「え？　びじねすらいく？」

「はい。具体的には『あいじんけいやく』でも『ぎそうけっこん』でも何でもかまわないと思ってるんですが、とにかく私を上に引きあげて、出世させてほしいなって思っています。幼なじみの馨かおるよりも絶対に上のポジションまで！」

「へ？」

「ふふふ。冬姫ちゃんってばね、最近よくこういうこと言うの～。なんかゴドーくんと仲良くすると、出世運が上がるんだって～」

「ちちちちょっと、し、小学生がなんてこと言うの！」

「むぎぎっ。私、女子大生だもん！　れっきとした大人の女なんだから！」

　さくらがおっとりと微笑めば、見た目小学生幼女のトンデモ発言に静花はあわて、当の冬姫は唇くちびるをとがらせて『大人の女』アピールをする。

　そこに顔を出したのはご近所の住人、徳とく永なが明あ日す香かだった。

「あいかわらずにぎやかねー。今日パーティーなんだって？　これ差し入れ」

　草薙兄妹の幼なじみでもある、寿司店『すし徳とく』の娘だった。勝手知ったる様子で玄関を勝手に開け、居間をのぞき込みながら寿司桶おけを差し出してくれる。

「明日香ちゃん、よかった！　ちょうど助っ人が欲しいところだったの！」

　玄関に出て、寿司桶を受け取りながら静花は言った。

　すると、ツインテールの幼なじみは困り顔になり、すまなそうに答える。

「あ……ごめん。今日はこれからクリスマス女子会。おひとりさまの友達みんなでカラオケに行くんだ。静花ちゃん、苦しい戦いだろうけどがんばって」

「えーっ。最近のお兄ちゃん、ろくでなし度が三倍増しでスケールアップしてるんだから」

　静花は歳上の女友達への気安さで、頬ほおをふくらませた。

「あたしひとりじゃ、もう前線は支えきれないよ。絶対に無理」

「でも、護堂と仲のいい娘こたちが勢ぞろいなんでしょ？　すっごく疲れそう。だからご遠慮したいなーって――あれ？」

　気まずそうに笑う明日香のうしろから、エプロンドレスの女性が入ってきた。

「申し訳ありません、失礼いたします」

　と礼儀正しく、それでいて人なつっこい明るさとともに。

　メイドの衣装に身をつつんだ女性はペコリと頭を下げて、玄関で靴をぬぎ、草薙家に上がりこんだ。そのまま台所へとパタパタ足早に歩いていく。

　いかにも働き者という印象の足取りであり、後ろ姿であった。

「い、今のメイドさん？　こ、コスプレまでアリなの、今日は⁉」

「それがコスプレじゃないんだって。知ってる？　お兄ちゃんと〝なかよし〟のエリカさん、あの人の家のメイドさんらしいよ」

「そ……そこまで集結させるっていうの？　もう、何なのよあいつは！」

　予想外の人材出現に刺激されたのか、明日香はいきなり不ふ機き嫌げんになった。

「静花ちゃん、前言撤回っ。カラオケは適当なところで切りあげて、あたしもこっちに合流する。それまでひとりでがんばって、あいつに我が世の春を謳おう歌かさせないようにして！」

幼なじみの宣言をもし護堂が聞けば、こう言ったであろう。

俺、べつに春を謳歌してる気は全然しないけどなあ……と。むしろ面倒とか気苦労とかが多い毎日じゃないかなあ……とも。

一方、パーティーの準備に追われる草薙家の台所では。

「いやー……やっぱり日本はいいな。こっちにいると心が洗われるよ」

しみじみと発言したのは、昨日帰ってきたばかりの陸りく鷹よう化かである。

台所のテーブルに陣取って、野菜の皮むきを担当している。ちなみに使っているのはあつかいやすい皮むき器ではなく、料理用のナイフだった。

「何がいいって、師し父ふのいる場所から遠くなるのが最高だ。この解放感、中国本土じゃ絶対に味わえない。香ホン港コンだって、あの人の息がかかった連中はそこらにいるし」

しゃべりながらも、皮むきの手は止まらない。

しかも、速いうえに的確。どんな機械をもしのぐ迅じん速そくさと精密さで皮だけを剝はいでいく。ジャガイモやニンジンの身は一ミリたりとも削そぎ取らない。

その手並みを賛嘆とともに見つめるのは、女子三人だった。

台所で今日の料理を作っていたリリアナ、祐ゆ理り、恵え那なの三人である。

「陸鷹化……あなたの料理の腕、もしかして相当なレベルじゃないのか？」

「プロの方みたい……いえ。本職でもここまで器用な方はすくないと思います」

「たいして切れなさそうな道具なのにねえ……」

　食材を切っているだけの陸鷹化。

　だが、その手つきとたたずまいには一級厨ちゆう師しさながらの雰囲気がにじみ出ていた。これで料理が下へ手たなはずない。問答無用の説得力を女子たちは見み出いだしたのである。

「どうかな？　まずいもんを作らない自信はあるけど、美う味まいかどうかはもう自分じゃわからないな……」

　陸鷹化はぼそりと答えた。暗い過去を思い起こす人間特有の闇やみに満ちた目で、ナイフの切っ先を見つめている。その間も手は止まらない。

「何せ師父の庵いおりにいる間、飯炊きは全て僕の仕事だ。まずいもん作ったらトンデモない折せつ檻かんが待ってるから、とにかくそれだけはないように必死なのさ。食い物なんか、そこらで売ってるジャンクフードで十分だってのに！」

「うわー……ってことは若様、祐理たちより料理が上手だったり？」

「お話を聞いただけですが、まちがいなくそうではないかと……」

「あの方の御食事を毎日毎日作りつづけるわけだからな。鍛きたえ方がちがうだろう。わたしたち程度とくらべるのは、たぶん彼に失礼だぞ……」

　女性陣が畏い敬けいと同情に満ちた視線を少年に向けていたとき。

「みなさん、ご苦労さまですー」

　台所へアリアンナ・ハヤマ・アリアルディがやってきた。

　あいかわらずの明朗さであいさつし、持ってきたタッパをテーブルに置く。

「まあ。アンナさん、今日から休暇だとうかがってましたが？」

　旧知のメイド兼エリカの助手へ、祐理は微笑んであいさつした。

「はい。年が明けるまでお暇ひまをいただきましたので、長なが崎

さきに住んでいる父方の祖父母を訪ねる予定です。出発の前に差し入れをと思いまして」

　アリアンナの祖父は日本人。その関係で彼女は日本語に堪かん能のうなのだ。

　煮こみ料理と車の運転以外は申し分のないメイドである女性は、にこやかにタッパを指ししめした。

「こちら、私が三日かけて煮こんだチャーシューになります。初めて作ってみたんですが、なかなかの出来ではないかと。みなさんで是非召し上がってくださいね！」

　すでにアンナことアリアンナの鍋料理を経験ずみの三人。

　祐理・リリアナ・恵那が思わず返答に窮きゅうした瞬間であった。一方、その危険性を知らない陸鷹化は「ふーん」とつまらなそうに作業を続けていた。

　そして陽ひは沈み、聖なる夜のはじまりが近づいてきた。

　ケーキを持って護堂とひかりも帰宅し、最後に金髪の少女がやってきた。ほかにも顔を出す集まりがあると、あちこち回ってきたらしい。

「パーティーの前にあいさつは付きものだけど、長く話すほど無ぶ粋すいになる不思議なものでもあるわ。だから簡潔に。今夜は楽しむことにしましょう」

　あとから来て主役のように振る舞う特技。

　その技をいつもの華麗さで発揮するエリカの言葉で、ささやかなパーティーは開幕した。

　まあ、特別たいしたことはしない。親しい人間が集まって飲み、食べ、たわいもなくおしゃべりする。それだけだった。

　だが、護堂にとっては、この十カ月足らずで出会った人間ばかりである。

　だからだろうか。集まった顔ぶれを見ると、なかなか感慨深かった。

　エリカ。祐理。リリアナ。恵那。陸鷹化。ひかり。

　それに静花。さくら。冬姫。あとから明日香も来ると聞いている。

　途中、馨がふらっと顔を出しにきた。二時間ほどなら参加できると言って。

「今年はおつかれさまでした。あ、護堂さん。来年こそ、例の旅行どうですか？　ぼくたちふたりが組めば、旅先でいろいろ楽しい目に遭あえると思うんですよ！」

　いつか言っていたナンパ旅行とやらの話を蒸しかえしされもしたが。

　尚、甘粕も誘ったが『用事があるので』と断られていた。

　ただ馨がやってきたとき「これは甘粕さんからです」と、大量のフライドチキンが入ったバスケットを提供してくれた。店で買った物かと思いきや、意外にも手作りの品だった。

　そうこうするうちに、飲み物がだいぶすくなくなってきた。

　このままでは、エリカが当然のように持ちこんでいた数本のワイン、宴会なら飲むでしょと恵那が平然と持参していた地酒の一いつ升しよう瓶びんなど、パーティー開始前に護堂の手で封印された飲料のフタが開けられるかもしれない。

　というわけで、護堂は家を出て、飲み物の買い出しに向かった。

　クリスマスイブの夜。

　ひとり家を出た護堂は近所のコンビニをめざす。

　途中、ふと空を見あげてみた。やはり冬だけあって、ほかの季節よりも星のまたたきが鮮明で美しい。ちょうどオリオン座の三連星を見つけたときだった。

　ポケットで携帯電話が着信音を鳴らす。液晶を見ると、リリアナからの電話だった。

「どうした？」

『おひとりで買い物に行かれるなんて、みずくさくはありませんか？』

　いきなり言われてしまった。

　みんながにぎやかにやっていたので、何も告げず静かに家を出てきたのだが。

　確信にまかせて、護堂はうしろをふりかえった。当然のようにリリアナがこちらへ歩いてくるところだった。しかも、エリカと祐理、恵那までくっついてきている。

「せっかくのお祝いの日よ。好きこのんで独りにならなくてもいいでしょう？」

「荷物も多くなるでしょうし、お手伝いしますね」

「そうそう。これだけ人がいるわけだしね～」

　四人の仲間が追いかけてきたのを見て、護堂は思わず笑った。

　たわいもないことだが、それが逆にうれしい。

　この間、葛西の戦いで感じたよろこびを再確認する。面倒なことにもつきあってくれる仲間がいて、彼女たちは草薙護堂のことを気にかけてくれるのだ。

　これ以上を望む必要など、どこにもないように思える。

　みんなで連れ立って歩きながら、護堂はまた空を見あげてみた。

　さっきと変わらない冬の星空。

　だが、なぜか数分前よりも光があざやかなように感じられるのであった。



断　章

　それが夢のなかの出来事だと、護ご堂どうは認知していた。

　クリスマスイブを仲間たちとにぎやかに過ごしたあと、自分は寝床でぐっすり眠っているはずなのだ。だが今、草くさ薙なぎ護堂の意識は何処いずことも知れぬ広野をさまよっている。

　見あげれば、上じよう弦げんの月。

　それ以外に目立つものは何もない無人の野。

　鳥も獣けものもいなければ、建物もない。強しいていえば背の高いススキが茫ぼう々ぼうと生えていて、妙に秋めいた空気を感じるくらいか。

　護堂がめざすのは、荒涼たる広野に響く琴ことの音だった。

　おそらく日本の琴が奏かなでる音色ではない。文句なく美しいが、異国情緒に満ちた音と曲であった。どちらも日本より遥はるか西方で造られたのだろう。

　夢のなかで行く当てもない護堂は、なんとなく奏者を捜して広野を歩いている。

　廬ろ山ざんの一隅で羅ら翠すい蓮れんが奏でる月げつ琴きんを聞いてから、まだ半月しか経たっていない。だからだろうか。この演奏が義姉の手によるものではないと確信できた。

　これはもしかしたら、消えない哀かなしみと悔くいを心にかかえる人物の演奏ではないか？

　そんな想像が頭の隅にわきあがってくる。嫋じよう々じようたる音色に宿る情感の綾あやが、護堂を柄がらにもなく感傷的にさせて

いるようだ。

　やがて、すぐ近くから詩を誦しようする声が聞こえてきた。

昔、海に邪竜あり。王は乃すなわち箭やを放ち、まさに竜の胸を破る――。

　これを耳にした瞬間、護堂の背筋がぞくりと震えた。

　まるで、いずれまみえる仇きゆう敵てきを讃たたえる歌でも聴いたかのような感覚。込みあげてくるのは敵てき愾がい心しん、対抗心、闘争心。

　ともかく護堂は足を速め、声の主に近づこうとする。

　背の高いススキをかき分けていくと、ついに奏者兼謡うたい手の姿が目に入った。

「あなたでしたか！」

　護堂は驚いた。視線の先にいるのは旧知の人物だったのだ。

　茫々たる広野に端然と座し、膝ひざに乗せた台形の琴を奏でるのはあでやかな十じゆう二に単ひとえに身をつつむ媛ひめ。美しく長い髪は亜あ麻ま色いろで、冴さえわたる瞳ひとみは玻は璃りの色。

　幾度か幽かくり世よで邂かい逅こうした、玻璃の媛であった。

　媛は護堂の到来に気づいて手を止め、淡い微笑を口もとに浮かべた。

「お待ちしておりました、羅ら刹せつの君よ。今こ宵よいはお許しも得ぬまま御おん身みの夢ゆめ枕まくらに立つ非礼をお許しくださいませ」

「それは全然かまわないんですけど、なんで俺の夢なんかに⁉」

　護堂が訊ねると、玻璃の媛はかすかに微笑を大きくした。

「実はあなたさまの仮親に当たる女神より是非にと御伝言を頼まれ、幽世より夢見の術を贈らせていただきました」

「仮親——ってことは、やっぱりパンドラさん？」

ノリが軽すぎる自称義母。夢のなかだけあって、幽世の記憶もすぐに思い出せた。

護堂の確認に、玻璃の媛は「左さ様ようでございます」と丁てい寧ねいに答える。

「そういえば、俺が『雄羊』とか使わないと、かんたんには会えないんでしたっけ。でも、どうしてあなたに伝言を頼むんですか？パンドラさんと仲がいいとか？」

「わたくしの前身と、あの方の祖となる女神……両者は元をたどれば同郷であるとも言えますので、その縁でございます」

媛が言葉をにごしたので、護堂は詮せん索さくするのをやめた。

くわしく語れない事情があるのだろう。代わりに本題へ入ることにした。

「それで、伝言って何でしょう？」

「はい。先日、あなたさまが思い出されたペルセウス王はすでに亡く、『王の鏃やじり』として出陣の時にそなえているゆえ、気をつけよと」

「ペルセウスが死んだ⁉」

「そのようです。『鏃』は救世の神刀とならぶ御子の剣つるぎ。いずれあなたさまを切り裂き、地上に滅びをもたらす刃やいばとなりましょう。やがて来きたる戦いの日のため、どうか御心の隅にお留めあそばしませ」

深々と媛に頭を下げられて、護堂は諒りよう解かいした。

たしか『最後の王』だったか。最強の《鋼はがね》がらみの警告らしい。

「まあ、会ったこともないヤツを気をつけろってのもピンときませ

んけど、なるべく覚えておくようにします。でも、どうせ夢から覚めたら忘れるんですよね、いつもみたいに？」

　確認すると、媛はついにくすりと笑みをこぼし、朗ほがらかに言った。

「御安心ください。たとえ言葉は忘れようとも、あなたさまの荒ぶる魂たましいは戦いにまつわる戒いましめをお忘れになりますまい。——それと、わたくしよりも草薙さまに御言葉を」

「やっぱり警告ですか？」

「いえ。只ただの予感を告げさせていただきます。でも、存外に当たるやもしれませんよ？」

　玻璃の媛はいつのまにか、やわらかなまなざしで護堂を見つめていた。

　言葉遣づかいもすこしだけ崩れ、親しみを感じさせてくれる。

「いずれ来きたる『鏃』との邂かい逅こうはたしかに脅きよう威いとなりましょう。ですが、あなたさまに逆縁のみをもたらすとは限りますまい。かの女神の筐はこではございませぬが、あらゆる災厄の果てに巡り会う希望もあるはずですから」

「希望、ですか」

　つぶやく護堂の顔を見つめながら、媛はうなずいてくれた。

「ふふ。あなたさまは歴代の神殺しのなかでも、力に対して特に自由である御方。そのような方なればこそ、得られる力もあるのやもしれませんね。わたくしは——かつて…………と呼ばれし女神の娘は、草薙さまのために御ご武ぶ運うんをお祈り申し上げますわ！」

　玻璃の媛がくすくす笑いながら告げてくれた言葉。

　残念ながら、護堂にはよく聞こえなかった。意識が急速にうすれつつあった。

　夢から覚めつつあるのだろう。きっとクリスマスの朝がもう近いのだ。起床後、思わぬプレゼントの記憶は失われているはずだ。

だが、旧知の女性たちからのささやかな贈り物に、護堂は心から感謝した。

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

XII　かりそめの聖夜

著者　丈月　城

２０１２年９月25日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！
XII　かりそめの聖夜」

２０１２年５月30日発行の第１刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

〒１０１－８０５０

［電話］

０３－３２３０－６０９５（編集部）

０３－３２３０－６３９３（販売部）

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　有限会社ワイズネット